
Parallel another...-the encounter of TWO WORLD

逆逆三里 & Xナンバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Parallel another . . . the encounter
between TWO WORLD

【Zコード】

Z8971H

【作者名】

逆逆三里&Xナンバー

【あらすじ】

田を開けると、俺は死んでいた！？一つの世界が融合する時、新たな物語がツクラレル

第0話・The Beginning of ALL (前書き)

これは、逆逆三里（W0460D）とずっとXナンバー（W5568E）が合宿のテンションで衝動書きしてしまった小説です。二人三脚どころか六脚ぐらいの勢いで頑張りたいと思っています。

目が覚めたら、そこは

「どこだ？ 此処」

見知らぬ部屋……

俺、高山恭介はある小部屋の中にいた。紺の壁紙、紺のテーブル、紺の椅子。しかし所々置いてある灰皿や花瓶等の小物は漆器のように艶のある赤で、そのコントラストが今の状況と相まって異様だった。

しかし、この空間にはまったく見覚えが無い。それどころか、どうやって連れてこられたかすらも分からない。気が付いたらこの部屋の真ん中に立っていた。頬をつねつてみる。

ぎゅーっ

「いだだだだだだだっ！」

どうやら夢ではないようだ。俺は赤くなつたほっぺたを触りつつ、自分の銃を確かめる。どちらも盗られてはいないようだ。それぞれ抜いて初弾を装填する。

いわゆる「拉致」をしたにも関わらず、相手はこちらの武器に手を付けていない。プレイヤーズもこんなマヌケな真似はしないだろう。「意味が分からぬ……」

両手に握っているルシフェルと十六夜のグリップが軋む。

ガチャツ！

「一。」

ドアノブが捻られ、扉がゆっくりと開く。

「誰だつ！」

俺はすぐに2丁の銃を構え、ドアの前に照準を合わせる。

「ホストに向かつて『誰だ』は無いだろ」

ドアが開くと、そこには一人のスーツを着た男、いや青年が立っていた。大体歳は同じほどか。背はやや高めだが、威圧感はまったく無い。だがここで銃を降ろすような真似も危険だ。

青年は部屋に歩いて入つてくると、両手を広げて部屋を見渡す。

「美しい部屋だろ？」

「まあ、清潔ではあるけど」

「この紺色は、ブルマを表している。そしてこの赤も、同じくブルマを」

「つああああああつ！..！」

バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ
バンッバンッバンッバンッバンッバンッチャキン！

俺は片手で握つた拳銃の9mmルガーを全弾男に向けて撃ちぬいた。何だらう、今まで戦つたどんな敵よりも、コイツからは濃い、純粹な恐怖しか感じない。そんなに実戦経験があるわけじゃないけど。

「さつ、急に何言い出すんだこの変態！」

「こいつは、こんなとこひじやなきや、お近づきになりたくない種類の人間だ。」

「さて、君はここに来る前までの記憶はあるかな？」

んな事を言い出すスースの青年。そういうば、何してたんだけつか。

「たしか ラノベの発売日で雨の中、本屋に駆け込んで、道路を渡つたところで……あれ？」

ここまでしか思い出せない。まるで脳が思い出すのを拒否しているかのようだ。

「やのあとに」とや。ヒントをやめり。自動車のアパート

「ライト?」「

脳の細胞をフル稼働させる。……そして、思い出した。いや、思い出してしまうた。

「あの痛車つ！」

「思い出したようだな」

そつ、あの雨の中、初版の本を片手に道路を渡る俺の横から、とある学校の音楽活動部がカスタネットでうんたんしたり、菓子食つたり、合宿で海に遊びに行つたりする漫画のプリントが至る所にされた車が突つ込んできたことを。つてことは、

「じゃ、じゃあもしかして……俺は痛車に轢かれて死んだっていうのか？ うそだろ？」

嫌だ、認めたくない！ そんな、そんな痛い死に方なんて！ まだ読みたい本とかいっぱいあつたのに！ 言いたい事だつていっぱいやりたい事だつてたくさんあつたのに！

「いや、そんなに落ち込まれると、逆にやりにくいんだが」「……ゴメン、立ち直れそうにないわ」

スーツの青年が仕切りなおすように咳払いをする。まだ何かあるらしい。

「そう悲觀することはない。君はあの時の衝撃で、体から魂が抜け出てしまつた状態なんだ。つまり」

「身体に戻れる可能性があるってことか？」「

「ああ」

「どうやら俺はまだ死んだわけではないらしい。良かつた。

「んで、どこにあるんだ？ 俺の身体は！？」

スーツの青年は顎に手を当てて考え込む。一体どこにあるんだ？ こんなブルマのことしか考えてない変態の部屋からは一刻も早く出たかった。

「分からぬんだ」

返ってきた答えに俺は愕然とする。

「んだそりや！？ テメエ、知つてんじやねーのかよ！」

「どうしたんだい、何か、良いことでもあつたのかい？」

「なんで忍野！？」

さすが、ラノベばかり読んでないな、とスーツの青年は呟いた。

「確かに君の体の在り処は分からぬ。しかし高山恭介。君と同じ境遇の魂がこの世界を彷徨つてゐるはずだ」

「何だその設定。お前、逆逆に頼んで物語から消すぞ」

正直、そんな話に付き合つてゐる暇は無い。家には腹をすかせた涼とアンプが待つてゐるハズだ。涼に料理は作れないし、作ったとしてもあんな暗黒物質をアンプに食べさせるわけにはいかない。しかし、その言葉もスーツの青年には効かないようだった。

「残念だが、逆逆氏の権力はここには通じない。この世界は違う勢力からも介入を受けてゐるのだから」

「違う勢力？」

「その名もXナンバー勢力」

「えつくすなんばー？」

「まあ、いざれ分かるだろう。とにかく、君と同じ境遇の魂を見つけることだ。それと、体を見つけるのも急いだ方がいいかもな。中身のない、空っぽの器を狙う魂も少なくはないのだから」

「おい！ どういうことか説明しろよー おい！」

青年の体が陽炎のように揺らいで消える。何でこいつは最初にドアから入ってきたんだろうか。

「俺と同じ境遇の魂を見つける、か」

今は、奴の言うとおりにするしかなさそうだ。とつとと帰つて買つた本読みたいし。

一方その頃。

高山恭介が目覚めた部屋と全く同じレイアウトの部屋にて。

「ん、どこだここは」

俺、つまりアルバー＝リョウは辺りを見渡して呟いた。こんな部屋に見覚えはないし、来たといつ記憶もない。テロリストにでも拉致されたのだろうか？ 日頃からそんな隙を見せないで暮らすようにはしているのだが、どうやらボロが出たらしい。その証拠がこの異様な状況だ。つたく、鈍ったか？ エミリオ辺りにに知られたら何を言われるか分かつものではない。そんなことを考えながら背中のバツクパツクやホルスターを確認する。どうやら装備品に手は付けられていないようだ。手足も縛られていない。テロリストではないのか？

「ギャングのガキどもか？ それにしたつて拳銃の1挺ぐらい持つていいくよな」

俺を拉致した人間は何をしようとしている？ クソッ、考えが読めない。

「とりあえず、襲撃しに来るとしたらドアか」

ドアノブに手榴弾をワイヤートラップとして設置。迂闊に外にでれば、どんなトラップがあるか分からない。不用意に動くのは危険だ。しばらくして、ドアノブがまわされた。誰か入つて来る！

「迂闊に爆発させないほうが良い。この部屋に風穴が開けば君の魂は異次元にあつという間に飛ばされてしまうだろう」

扉の向こうの声が俺に警告する。どうやら若い男のようだ。

「悪いが、SFは読んでいなかつたもんでな。異次元とか魂とかそんな話に興味はない。お前は何者だ。どうやって俺をここに連れてきた。答える」

俺は愛銃SG552を構えて尋問する。

「俺を入れたら答えてやろう。とりあえずその物騒なモノを外せ」安全ピンを手榴弾に差し込み、ワイヤーを外す。ライフルは構えたままだ。

「良いぞ、入れ。両手を高く上げてゆつくりとな」

この男、トラップの存在を予見していたのか？壁越しだ、あり得ない……

ドアからは一人のスースを着た男が入ってくる。脇下に武器は確認できない。腰、足首も同様だ。

「ホストの体をジロジロ見るなんて、どういう了見だ？」

「こんな胡散臭い場所に上着を着て現れるんだ、この程度のチェックは最低限だ」

「ほう、なるほどなるほど。あの少年と違つてすぐには警戒を解かないか……さて」

男は両手を広げる。

「美しい色で塗装してあるだろ？この部屋は私の空間なのでね、自分好みに模様替えしているんだ。この紺は、スクール水着の紺。そして赤は競泳用の水着を」

「チツ」

シユカツ！ドスツ！

右手でライフルを支えつつ、左手でスローアイニングダガーを指で挟んで投擲する。細い両刃のナイフは太腿に撃ち込まれて、相手の動きを止める

筈だった。

「ハハハ、流石はあのXナンバーと付き合つているだけあって、ツツコミは速くて鋭いな。だが言つただろ？」

ナイフの柄を男は掴んで、そのまま引き抜く。

その刃にも、男の体にも、血は一滴も付いていなかつた。

「この部屋は『私の空間』だ」

男はナイフを山なりの軌道で投げて返す。俺はそれをキャッチする

と、ベルトの^鞄シースに納める。

「……ほほう、立派な手品をお持ちだな。で、こんな所まで俺を呼

びつけた理由は何だ？ 情報か？

「生憎、君の事を知る必要は無い。知っているからな。それより、君がここに来るまでの記憶はあるかな？」

この部屋に来るまでの記憶…… 何も思い出せない。雨降る午後、二コーコーク警察本部にいつものように射撃練習場を借り、装備を車で積んで出かける所だった。車に乗り込もうとして装備を担いだ所までは覚えているのだが……

「ヒントをやろう。自動車のライト」「ライト？」

そして思い出す。ああっ、クソッ！

「あの時かっ！」

路肩に出来ていた車に乗り込む時に、真正面からやつてきたあのケバケバしい、イラストのペイントされた車。たしかレイが違法DV Dをせつせと焼いていた、学生がバンド活動をしてステージの上で口げて下着を露呈するジャパンメーションの柄だった。その車はスピードを落とす気配無く、それどころか加速して俺の方に……

「俺は、あの車に轢かれて死んだって事か？」

D畜生amn it! なんて事だつ！生憎昔から銃を握つて危険な任務に就いていたお陰で、こんな歳で他の兵士よりも多くの死線をくぐり抜けてきた俺だ。当然最期は銃弾で、戦場に倒れるものだと思つていた。

だがそれが？ NYのど真ん中で？ クレイジーな車に轢かれて死ぬだつて？ ハツ、笑えないジョークだつ！

だが悪態をつこうと口を開きかけた時、俺はどんでもないことに気が付いてしまつた……

「うあああああああああっ！」

俺は頭を抱えて絶叫する。そうだ、なんたる失態だつ！

「せつかく射撃場のレンタル料金を払つたのに、行けずじまいじゃないかっ！！」

「意外と、ケチなんだな」

「ケチ？ ケチだと？ いいや違う。これは経営者としての判断だつ！」

「あの警察署長、人は良さそうだが貰える代金はキッチリと貰つていいだろ？ クソつ、どうせなら半年契約でなく1ヶ月、せめて俺の名前ではなく部隊の名前を偽名でも良いから登録しておくんだつたつ！」

スポンサーのクニモトにもアーチボルト家にも全く申し訳が立たない。任務に全く不必要的力ネが外部へ渡つてしまつたじやないか！ そうだ、そもそも力ネを統括しておいた俺が死んでいるんだぞ。残りの人間に部隊の資金を管理し、適宜運用させる事が出来るのか？ 否だ。今までの株、土地、国債を含む資産運用を行つてきた際の資料は俺が所持していた。保管場所の暗証番号を知つてるのは、俺一人じやないか！

畜生、少し泣けてきた。ここまで理不尽な目に遭うのは久々だ。さて、とスースイ男が仕切り直すように言つた。

「まあ落ち着け、その金が無駄になることはないかも知れない」「どういうことだ？」

「君はあの時の衝撃で、体から魂が抜け出てしまつた状態なんだ。簡単に言つてしまえば、仮死状態に近い」

さつきからこいつは何を言つているんだ。

「高山恭介はすんなり理解したんだがな。彼はライトノベルに長く触れていて軽く中二病になつていたからか。つまり、君の肉体はまだ死んでいない」

タカヤマキヨウスケという人物がどんな人間なのかは知らんが、俺と同じような境遇であることは推測できた。それにしても、死んでいない、だと

「ああ、そうとも。君だつてここが天国 神が創つた楽園とは思つていいんだろう？」

「当たり前だ。こんなふざけた部屋が楽園つて言つのなら地獄に墮ちたほうがマシだ」

そもそも、天国に行くには俺は命を奪いすぎたが。

「あの世界に戻りたいのなら、君と同じ境遇の魂を見つけることだ。それと、体を見つけるのも急いだ方がいいかもな。中身のない、空っぽの器を狙う魂も少なくはないのだから」「

どうやら目的ははっきりしたようだ。タカヤマキヨウスケを探せ、という事らしい。

「聞いておくが、Xナンバーは関係しているのか？」

「ああ。君をここに連れてくるのはXナンバーの協力無しでできなかつた」

男が陽炎のように揺らいで消える。アレは本当に人間だったのだろうか。

「Xナンバー……殺す」

拳銃のスライドを引いて初弾を装填し、殺意も新たに俺は部屋から出た。

「つまつ、まぶしつ！」

ドアを開けると目が眩み、突然何百ものスポットライトに照らされたような気がした。

だが実際には、その空間が真っ白に塗られていたからだと気づく。暗い色の部屋にいたお陰で、瞳孔が開いていたようだ。

次第に視界が戻ってくる。

「さっきの部屋に引き続き、何なんだよ！」

真っ白の壁紙に囲まれた真っ白の場所。そこには白く塗装した物々しい様々なバリケードが、一定の間隔をおいて配置されている。

「戦車でも止めるのか？」

部屋は見る限り大きな長方形をしている。天井も床も白一色なので遠近感が狂う。しかしちょうど学校の体育館を倍に引き延ばしたような広さだ。反対側の辺は障害物に阻まれて見えない。しかし建物のほぼ対称なデザインから、恐らく今俺が出てきたような扉があるのだろう。

「とにかく、先に進まないとな」

ルシフェルの弾倉を交換し、二丁の銃を構えて一歩ずつ、対岸へと進んでいく。とにかく早くここを出で、「同じ境遇の魂」を探さないと……

「……また珍妙な場所だな」

俺はドアを注意深く開け、ライフルを構えつつ周囲安全を確認する。と、ポツリとそう呟いた。

白一色が紺色に慣れた目に痛い。

障害物の陰に身を潜めると、チャージングハンドルを少し引いて初弾が装填されている事を確認する。

「タカヤマキヨウスケ。名前からして日本人。ヒントはそれだけか……」

溜息をつくと、じりじりと転がっている障害物に目を向ける。タカヤマキヨウスケを探す手がかりは、百歩譲つてもこのバリケードだらけの部屋には無いだろう。

「とにかく、この部屋を出ない事には事態は進展しない、か」物陰から素早く顔を出し、次のバリケードに目標を定めて音を立てずに走る。到達、クリア。未知の空間では迂闊に移動出来ないが、ゴツいバリケードのお陰で少しばか安全を確保しやすくなる。待ち伏せする敵にとつても同じ事だが。

とりあえずこのだだつ広い空間の外に出なければ話にならない。先の事は後で考えよう。

手に握った一丁の拳銃の重みを感じつつ前へ歩く。何が出てくるか分からぬ。さつきの変態ぐらいならまだ良いが（ちつとも良くないけど）、こちらの命に危険が及ぶような状況も想定できる。全神経を研ぎ澄まし、慎重に慎重を重ねて歩く。

その時、空気が動いた。

少なくとも俺はそう感じた。武器を構えなおして気配を探る……何もない。

（気のせいか？）

フツ

（やつぱり、何か動いている…）

物陰に屈み、上半身を僅かに出して照準を目線に合わせる。十六夜

トルシフェルのハンマーを起こし、いつでも射撃出来る体制へ移つた。

汗でグリップが滑る。

自分の呼吸音さえ煩わしい。

俺が四度呼吸した時……

何かが動いた。

「うわっ！」

唐突に迅速な動きで飛び出したソレが何かを確認する暇も無く、両手に握った拳銃の引き金を反射的に引く。右、左、右、左。爆ぜるような音と鋭い反動が手首に伝わる。

しかし、目標が急に低く姿勢を変えて隣のバリケードに移動したので、弾丸は鉄壁に当たつて火花を散らした。

「外した！？」

物陰から上半身を露出させて、ソレが？？おそらく人が反撃を仕掛けってきた。ライフルによる3点射で攻撃しているらしく、小気味良い力力カン！という音がする。どうやらこちらが隠れている遮蔽物に当たつているようだ。

「先制攻撃を当てられなかつたのは、痛かつたかな」

ひとまず呼吸を落ち着かせる。ハンドガンの射程は短いし、俺の戦い方も中近距離の接近戦を想定している。こちらから圧倒的火力で押し込む戦い方をすれば、チャンスを作れるかもしれない。

射撃音が止んだ。ふと隠れている遮蔽物を見ると、鉄板を銃弾が貫通して上部が穴だらけになつていて、次のマガジンを装填されれば、バリケードごと蜂の巣にされるだろう。

「いまのうちに、いつちょやりますか」

両手の拳銃をフルオートにセットして、飛び出すと同時に小刻みに連射を加える。猛ダッシュしながら弾幕を張り、相手が身を乗り出す隙を与えない。目標バリケードまで、あと3メートル、2メートル……

障害物をクルリと回り込んで、残りの弾丸を障害物の背後に全弾吐き出す。フルオートの激しい反動が両手を震わせ、すぐにスライドが開いて弾切れを知らせる。完全に人間を沈黙させるには、十分な弾数を撃つた。

（やつたか？）

しかし、目標は沈黙していなかつた。それどころか、いなかつた（・・・・・）。

どこに行つたか、など考える暇も無く、俺は地面に押し倒され、ナイフの刃を喉元に押しつけられていた。受身を取る暇も無かつた。

「Freeze, cool Hollywood star.」

動くなよ、イカしたハリウッドスター（）

金属の冷たさをここまで不快に感じられるなんて、想像したことも無かつた。

フリーズ、ということは「動くな」つてことか。まさか、実際にこの言葉を聞くことになるとは。顔を見る限り男、歳は20代前ぐらい。日系か？ どこか影を持つたその眼は、人殺しの眼をしていた。これほどの相手は、穂波以上かもしれない。刃物の腕前は涼と同程度。にしても、

「は、ハリウッド、スター？」

恐怖で渴いた口で俺がそう言つと、男は眉をひそめた。

「お前が、タカヤマキヨウスケか？」

今度は流暢な日本語だった。どうやらこの男は俺の事を探していたようだ。

「ただけど……アンタ誰だ。それと、このナイフ^と退けてほしいんだけど」

聞いてみた。打ち付けた背中が痛い。

「」の世界について知っていることを全て吐け
聞いちやいなかつた。とりあえず、あの変態に聞いたことを全て話す。

「んで、同じ境遇の魂を探してるんだけぢや……」
男はそうか、とだけ呟くと俺の喉元からナイフを外した。起き上がりつてもいいみたいだ。

「さつきの質問に答えてくれ。アンタ誰だ」

ナイフを腰のホルスターにしまう男に尋ねる。改めて見ると、男の格好は異常だつた。少なくとも、普通の人間がする服装ではない。黒の戦闘服に、ポーチをやたらくつつけたボディーアーマー。背中にはハンドガードと銃身の短い突撃銃アサルトライフルがスリングで吊られていた。

「俺はアルバート＝リョウ。そつだな、話を聞く限りだと、お前と同じ境遇の魂だ」

「そうなのか？」

助かつた、と思つた。こんだけ強い奴と組めれば戦力としては申し分ない。

「おい、タカヤマキヨウスケ。お前はどうやって死んだ？」
「恭介でいいよ。本屋からの帰り道、痛車に轢かれたんだ」
アルバートは苦笑いを浮かべた。初めて表情を変えたな。

「そこまで同じか

「じゃあお前も？」

「我ながら間抜けな死に方だ。ふざけてやがる」

「とりあえず、アンタは仲間つてことでいいんだな？」

「ああ、よろしく頼む。それと、俺の事はアルバートと呼んでくれ
「分かつたよ。よろしくな、アルバート。あと、聞きたいこと
があるんだけど……」

「何だ？」

「その……アルバートは何の仕事してるんだ？」

「対テロ特殊部隊みたいなもんをアメリカでな
道理で英語だつたわけだ。

「俺からしたら、そつちの方がハリウッドスターに見えるけどね」「そうか？ 2挺撃ちほどではないと思うが」「まあ、そうだけど」

「こっちも質問してもいいか？」

「いいよ、何？」

「お前の職業は？」

「高校1年生」

アルバートはかなり驚いたらしい。そりやそうか。

「いつから日本はそんな物騒になつたんだ？」

「まあ、色々ありますて……」

そうだよなあ、普通じゃないよなあ。普通の高校生は銃で的確に急所を狙い撃つ方法とか考えてないよなあ。

「何も無い人間なんていない。いいんじやないか？ 少なくともそのおかげで俺は助かるが。それで護れる人がいるのなら、銃を握ることに意味はあると思う。何もしないよりはな」

意外だつた。そんなことを言う人間じやないと思つたんだけど。

「まあ、銃を握つても救えない人だつているが」「どうやらアルバートも、昔色々あつたようだ。

「そんなわけで、よろしくな、相棒」

アルバートが手を差し伸べる。俺はそれを握り返した。

「なんとしても、元に戻ろう。アルバート」

「ああ、俺にはやらなきやいけない事がある」

そう言つたアルバートの眼は、殺意に溢れていた。まるで、殺さなくちゃいけない仇がいるような。

「俺も、腹をすかせた居候2人が帰りを待つてゐる。買った本もまだ読んでないし」

待つてゐるはずの居候2人によつて、その言葉が後に裏切られることを俺はまだ知らなかつた。

出口はすぐに見つかった。部屋の横に鉄の大きな扉があつたのだ。

「これ、入ったときには無かつたよな？」

「死者同士で喋つてゐるくせに、今更何を驚く」

早くもこの訳が分からぬ世界に順応している事に自分でも驚く。

「まずはここを脱出する事が先決だ。外に出てみよう」

恭介が扉に手を掛けようとする。

「いや、俺から行く。何かあれば援護してくれ」

俺は彼を退かせて、自分がドアのすぐ脇に立つ。

後ろへ、と左手でサインを送ると、彼は素直に俺の後ろに立つ。

(5秒後に突入、援護を)

もう一度ハンドサインを出す。

「えっと、アルバート？ それ……何やつてんの？」

「なんだ、分からず後に下がつてたのか……」

一通り、ハンドサインの意味を大ざっぱに教える。いざ銃撃戦にな

つた時に於けるハンドサインの有効性も説いておく。

「一度片方の拳銃をホルスターに納めてでも、アクションの前には必ずサインを出せ。予め仲間^{あらかじ}がする事が分かつていた方が、味方は的確な行動ができるんだ。敵に音が聞かれる事も無いし、声が聞こえないほどの銃声が鳴つても意思疎通^{あいしゆつう}が出来る」

恭介は納得したみたいだ。一応片手で10まで数を表す方法と、突入、援護、停止のサインだけを教える。

「それが出来るだけで随分違うぞ。お前に戦う仲間がいるかは知らないが、きっと戦闘中のコミュニケーションが円滑になるはずだ」

「ああ、ありがとう。早速生きて帰つたら仲間に教えるよ

「生きて帰つたら、か。文字通りの意味だな」

二人で顔を見合させて笑う。全く、こんな状況で笑うなんて事が出来るなんて、つくづく人間の適応能力の高さ、というか俺達の神経の図太さを思い知らされる。

(2秒後に突入。5秒後に援護を)

左手でサインを出した後、ライフルを構えながら重い扉をゆっくり開けていく。

金属の軋む音が不気味だ。

人が通れるだけの隙間を作ると、ライフルから先に滑り込む。部屋の隅から隅までを索敵し、敵がいれば引き金を引く。ただそれだけだった……

だが、そんな動作は全く必要無かつた。

5秒してからアルバートの抜けた扉から抜け出す。それと同時に銃口を前に突き出すように構えた。

「……今度は、部屋じゃないのか」

屋内戦闘を想像していたので拍子抜けしたけれど、今度は

街だった。

ただ妙だったのは、そこが真っ暗だった事。ふつう都会って、「眠らない街」とかいって夜でも電灯やネオンサインが光ってる物だろ？それが全く無いんだ。

暗い都市の中で、街灯の蒼い蛍光灯だけが街を照らしている。

だんだん目が慣れてきて、少し離れた所のアルバートを見つける事が出来た。

「アルバート、ここは……何処なんだ？」

答えは当然帰つてこないと思つたが

「東京だ」

即答だった。彼は看板を指さす。確かにそこには「新宿駅」と書いてある。どうやら駅の真ん前にいるらしい。

「だが、俺達の知つている東京では無いらしいな。生物の気配一つすらしない」

アルバートがライフルを構えるのを見て、あわてて自分の武器を準備する。

「気をつける……何が来るか分からんからな」

「わ、分かつた」

先行するアルバートの背中に着いて行きながら、不気味な街を見回す。人どころか、猫1匹見えない。まるで、煙にでもなつて消えたかのように。

と、アルバートが左手を上げた。止まれの合図だ。慣れないと辛いな。

「何かが居る。見えるか？」

アルバートが細い路地を指差す。肩越しに覗き込むと、何かがこちらの事を見ているのが分かつた。しかし暗くてよく見えない。

「残念だけど、何なのかまでは分からないな。居るのは分かる」

「行くぞ、うまくいけば情報が手に入るかもしれん」

黙つて頷く。とにかくこの世界のことが知りたかった。2人で銃を構えて走る。すると、その影は危険を感じたのか逃げ出した。

「Freeze！」

影の進む先にアルバートが銃弾を叩き込む。威嚇にはそれで十分だつた。影は観念したのか、立ち止まりこちらを向いた。かなり小柄な、どうやら人のようだ。

「そのまま両手を挙げるんだ。恭介、アイツの後ろに立つて銃を構えろ。何をするか分からぬからな」

「え？ あ、分かつた」

俺が頷いた瞬間、

「き、きょうすけ？」

聞き覚えのある声がした。影が喋ったのか。

「へ？ アンプ？」

思わず間抜けな声が出た。何でこいつがこんなところに？

「きょうすけなの？」

「お前、どうして」

アンプがこっちに走つてくる。

「動くな！」

アルバートがライフルの銃口を向けた。つておい！ 引き金に指掛け
かつてんじゃねーか！

「待つてくれ！」 こいつはうちの身内だ！

ギリギリでアルバートの腕を掴む。

「身内だと？」

「ほら、さつき言つたろ？ うちにいる居候だよ。名前はアンプ＝

シルバーフィールド」

アンプが怯えたように俺の後ろに隠れる。こいつは感情表現が下手なだけで、内面は人より敏感だ。アルバートはしばらくその様子を眺めると、銃を下ろした。

「どうやら、本当みたいだな」

「間違いない、こいつは俺の知つてるアンプだ」

ほつと胸を撫で下ろしたのもつかの間、アンプが言つた。

「とにかく移動したほうがいい。やつらが来たら

「奴ら？」

「からっぽの体をねらう悪いたましい」

「何で俺たちが狙われるんだよ」

「やつらは、わたしたちが体のありかを知つてていると思つてる。だから

「移動するぞ、何かに囮まれている」

アルバートがアンプの言葉を遮つた。

「囮まれてる？ アンプ、頼む！」

アンプが黙つて俺の手を握る。アンプに異能によつて俺の感覚器官が 増幅 された。

「なんだつてんだ、こりやあ……」

どうやら囮まれているのは本当みたいだ。にしてもこの敵つて……。

鋭敏になつた感覚で脱出ルートを考える。はじめだったら、もうち よいマシなものを考えるんだろうけど。

「アルバート、正面に進んでこの道を抜けて、右に進んで強行突破 しよう。そこが一番薄い」

「何でそんなことが分かる?」

「それは後で説明するから早く!」

「分かった、信用する」

「頼んだよ、相棒」

俺たちは市街地を走り出した。

相変わらず謎だらけだ。街で出会った白銀の髪に白銀の瞳を持つ10歳ほどの無口な少女。彼女は恭介の家に居候しているらしい。そこまでならまだ分かるが、分からるのはその後だ。どうして恭介は敵の配置まで分かったのだろうか。それもある少女が手を握った瞬間に。

彼は後で説明すると言った。なら、それを信じるとしよう。そんな事を考えていると、先程恭介から右に曲がると指示があつた角に差し掛かった。壁に背を預け、道を覗き込む。

「何だアレは……」

思わずそんな言葉が漏れた。だってそうなるだろ? 死人みたいな顔をした人型が呻き声を上げて歩いてるんだから。

「バイオハザードかつてんだ」

横にいた恭介が呟いた。全くその通りだ。あんな連中に体を乗っ取られたらと思うと吐き気がする。

と、その後ろからちかちかとライトの様な物が光った。アレは……車のヘッドライトか?

俺がそう思った直後、

「こんばっぱー!」

音楽活動部のケバケバしいプリントがされた4輪駆動車がゾンビの群れに突っ込んだ。

「今度は何だつてんだよ!」

恭介が半ばキレ気味に叫んだ。これ以上敵が増えるのはまずいな。

「あ！ あん時の痛車！」

恭介の2挺拳銃がフルオートで火を噴いた。そのドアに次々と穴が開いていく。そんなに撃つたら運転手が蜂の巣になるだろ？が！ せつかくの情報源が！

煙を上げて動きを止める自動車。ガソリンに引火しなければいいが……ん？ ドアが開いて男が降りてきた。

「何してくれるんだ高山君！ 私の愛車が蜂の巣じゃないか！」 男はアジア系の顔立ち、恐らく日本人。眼鏡を掛けたその顔からして15、6歳ほどだろう。

「知つたことかよ！ ってか何でお前もここにいるんだ！？」

「恭介、知り合いか？」

「知り合いも何も、このイタイ奴が俺の所の作者だ」

男は俺に気づき、片手を親しげに上げる。

「やあ、初めましてリョウ君。キミの事はXナンバーからよく聞いている。私の名前は逆逆三里と言つんだ。嫌いな言葉は『セロリ』。どうぞお見知りおきを」

「……お前、Xナンバーを知っているのか？」

「知っているも何も、同じ高校で同じ部活に所属している友人さ」 そうか、どうりで醸し出す雰囲気がアイツに似ていると思った。きっとその学校、部活とやらには、コイツ等みたいなのがうようよ湧いてるんだろう。廃人養成機関だな。考えるだけで身の毛がよだつ。

「そんな事よりも」

恭介が割つて入る。

「俺を殺した責任取れよ！ 轉き逃げつてのは流石にマズいだろ！」

「高山君、キミは大きな勘違いをしている」

逆逆は溜息をつく。

「キミを轢いたという痛車、キャラクターの髪の色は？」

「……黒だ」

恭介は死ぬ間際の事をしばし思いだして回答する。

「ほーら、見たまえ高山君。このキーボード担当の女の子の髪の色

を。それにこの特徴的な眉！見間違ひ無からう！？」

ケソッ、」の選選とかいうせり、×カンバーと同じくらしおるみ

「重田、だ

質問が2つある。
1つ目は何故お前のような「作者」
がここにいるのか。もう1つは俺達の肉体がどこにあるのかだ」「
俺は二つあえず流を突きつけ、尋問を始める。

俺はとにかく金を稼ぎたいと意を用ひる

順番に答えていこか

遠慮は面倒臭そこには伸びをすると詰じ始めた

「作者（つまり私や×ナンバー）のよこな人間は、世界を『想像（imagine）』によって『創造（create）』する事が出来るんだ。ただ、この過程が厄介でね。『創造』の際にはかならず『ゴミ』が出るんだ」

- 2 . 1

「そうだ。いわゆる『書けなかつたアイデア』だな。筆記という動作を通じて具現化出来る『想像』はごく一部だ。その為にその『想像』は行き場を失い集まつて、自らで世界を作り出してしまつ。これが『平行世界』と呼ばれる物だ。こうなつてしまえば我々作者も干渉出来なくなる。平行世界の構築は自動的に行われる物だからな」副産物によつて作られた平行世界の要素は、もしかしたら俺達の世界の要素の一つになつていかかもしれないという事か。

「つまり、この世界にそがそうだと語りたいのか？」

「その通りだ。まあ、干渉は出来ないが観測が不可能という訳ではない。こうやってちょくちょく色々な平行世界を見て回っているんだが、ここはヒドい。負のオーラがするよ。これが1つ目。2つ目としてだが、たまに私達の精神が著しい躁あるいは鬱状態になつた時、通常の世界にもランダムに、何というか……『暴走』が起つてゐる。そういう時にはイレギュラーな事態が起つりやすいんだ。たとえば、異なつた『作品』との境界が消えたり

「平行世界に飛ばされたり、か……」

「ああ、それなら辺をもつむよ」と詳しく述べたいところなんだが

……

逆逆が俺達の後方に眼を向ける。

「どうやら、彼らは待つてくれないようだ」

そこには、ゾンビ（？）がひしめいていた。

「とにかくそんな訳だから、我々作者人としても何もできないんだよ。頑張ってね！」

そんなことを言いながら、いそいそと蜂の巣になつた車に乗り込む逆逆。

「ちょ、どこ行くんだよ！」

恭介が手を伸ばして彼の肩を掴もうとするが届かない。

「んじゃ、バイナラー！」

ケバケバしい車は敵を蹴散らしながら走り去つていった。

「畜生が！ あの野郎、次に会つたら蜂の巣だ！」

「きょうすけ、そんなことより敵が」

アンプの言つとおり、とにかくこの場から抜け出すことが先決だ。

バババツ、とアルバートが撃つた3点バーストの発射音が聞こえる。

俺は2挺の重さを確かめながら逆手の銃剣を振り回して発砲した。なんせ敵の数がとにかく多い！

「アンプ、とにかく怪我すんなよ！」

「わかつてる」

横にいるアンプに声を掛ける。そういうば、こいつはなんで死んだんだろうか？

「恭介、下がれ。グレネードを使う」

アルバートがパイナッフル型の手榴弾を投げた。つてこのままじゃ、俺とアンプが爆風で……

「うわあ！」

とつさにアンプを抱えて横に飛ぶ。その後、路地に爆風が轟いた。

飛び散った細かい破片を背中に受けながらアンプを抱きかかる。

無茶し過ぎだつて！

爆煙が風に流されて消えた後、どこにも敵の姿は無かつた。にして
も、

「アルバート……信じてくれとは言つたけど、過信してくれとは言
つてないぞ」

「お前ならやつてくれると思つた」

「俺は、まさかやつてくれるとは思つてなかつたよ！」

とりあえず助かつたようだ。このバグだらけの世界に夜明けがある
のかは知らないが、

休めるところが必要だ。

「とにかく、ここが現実の新宿と同じならホテルぐらいはあるはず
だ。今はそこに行つて、敵がいないうなら休もう」
アルバートも同じことを考えていたようだ。

今は一時の安らぎが欲しい。

第2話・Phones are completeness

ホテルはすぐに見つかったが、やはりそこも無人だった。アルバイトがフロントにあるコンピュータをいじつて俺達3人の名前を書き込む。勝手に泊まる訳にもいかないだろ？

「日が昇つて人間が出てくるよなら、銀行に行つてドルを換えてくる。学生身分じゃ安宿の代金も高くつくだろ」

客室までの廊下を歩きながらアルバートは声を掛ける。

「あ、ありがとう」

「日が出ても人がいないか、最悪このままずつと夜なら、暫く滞在させて貰おう」

「……」

このままずつと夜なんてあり得ないと思つた。しかし逆逆が言うには、あり得ないという言葉自体「あり得ない」のだ。自分の世界の常識は殆ど通じないだろ？ 改めて不可解な境遇に置かれている事を実感する。

「アンプ＝シルバーフィールド」

突然アンプが切り出す。

「わたしの名前。よろしく」

アルバートと握手を交わすアンプ。

「Well, you're not seems to be Japanese. Where are you from? I'm American.（ええと、君は日本人に見えないが、どこから来たんだ？俺はアメリカ人だ）」

「From Russia.（ロシアから）」

アンプは英語でアルバートの問いに返答する。

「（ロシア語を話す）？」

「There's no need.（必要ない）

（ありがとう）

「Oh,

・（おや、失礼）By the wa

y, Gyakusaka said this world is
s . . . (所で、逆逆が言うには……)」

二人は英語とロシア語を混ぜて話してゐる……意味不明だ。

「二人とも、何ヶ国語しゃべれるんだよ」

二人が話を中断して首を捻りながら指をバシバシ折り始めたのを見て、俺はグローバル化の波を肌で感じていた。

「603号室……ここか。お前達は待ってる」

扉を開けると同時にハンドガンを引き抜いて周りを見渡す。バスルームには何も無い。

クローゼットの中も大丈夫だ。

ベッドの下……クリア。

後はテラスか……

外が暗いせいでガラスの向こうが見えない。だが

カチヤツ

カチヤツ

畜生、固いものが触れ合つ音がする。

またさつきのゾンビかもしれない。音を立てずにテラスに近づき、ガラスを開ける。

人影が椅子に腰掛けている。テーブルにはティーカップ、ソーサー、スコーン……

ん？ 何故だか見覚えが？

もう少し接近してみる。1歩、2歩……

「ふう、異世界でも、紅茶の美味しさは普遍ね～
やつぱりそつか？ でも彼女であるはずが無い！ 何故彼女が死んでいる？？」

その刹那、ちょうど真上から先程と同じようなゾンビが飛び降りてくる。それも一体。牙を剥いて戦闘態勢に入った状態で、紅茶を嗜むブリティッシュの前に立つ。

「でも、やつぱり本部に置いてあるアールグレイが美味しいのよね」しかし彼女は動じる事無く、紅茶の入ったカップをソーサーに戻し、机の下に立てかけてあるSCAR-Lを手に取つた。指はMK40グレネードランチャーのトリガーに掛かっている。

シュボン！

40mm擲弾が2者の中心に着弾し、そのまま爆発が床を犠牲にしてゾンビをただの粉にする。それを見届けると、彼女は再び紅茶の香りを愉しみだした。

やつぱり、お前か！

「何だ、さつきの爆発！」

恭介とアンプがこちらに駆け込んでくるが、それも視界に入らない。
「……Hey, why are you here? (おい、なんでお前がここにいるんだよ！)」

俺は彼女の目の前に立つ。

「Marsha! (マーシャ！)」

「Ah, Ah! Small world isn't it?
(ああ、アル！世界つて狭いわね) Hey, let's have a tea time with your friend
! (ほら、友達も誘つてお茶にしましょうよ！)」

そこにいたのは俺の仲間、マーシャ＝アーチボルトだった。

「アルバート！ 敵か？」

「待て恭介、こいつは敵じゃない。俺の仲間だ」

後ろから飛び出した恭介が拳銃の銃口を向ける。それを右手で制した。さつきも見た光景だ。

「（ねえ、この子達何なの？ どうやらお茶会のマナーを知らないみたいだけど）」

「（さつき知り合つてな。俺達とは協力関係だ。それより、何でお前がここにいるんだ？）」

「（あなたがいなくなつてから、なんだかよく分からない請求書がたくさん来てね。それがあまりにもとんでもない額だつたから、シンヨックで後ろに仰け反つたら……そこで記憶が途切れたわ）」

カップ片手に微笑むマーシャ。俺も人の事を言えないが、なんて間抜けな死に方だ。

「なるほど、ありがとなアンプ」

どうやら恭介はアンプに通訳してもらつたらしい。これは楽だ。

「なあ、アンプ。一体君はどうやって死んだんだ？」

そういうえば聞いていなかつたことを思い出して尋ねる。

「買い物にでかけたきょうすけをすずと2人で待つていたけど、いつまでたつても帰つてこないからすずが「ご飯を作る」つて言つて、

できたものを食べたら意識がなくなつて……ここに」

どうやら、マーシャはアンプと同じ境遇の魂ではないようだ。つまり、このまま行くと恭介の世界から1人、俺の世界から1人、最低は出てくる計算になる。

「ゴメンなアンプ……俺が早く帰つてこないばかりに、涼のダークマターを……」

「（ダークマター？ あの子、ダークマターって言つた？）」

恭介の言葉にマーシャが反応。どういう事だ？

「（ああ、言つたがそれがどうした？）」

「（何でか知らないけど、エミリオが私の作った食事を食べて、あ

まりの美味しさに昇天した時に言つた言葉と同じなのよ。どうこうことかしら?」

マーシャの生まれはイギリスだ。そのせいなのか、彼女が作る料理は殺人的な不味さを誇る。ある時などは、「目標を戦闘機で爆撃するよりも、マーシャのメシを食わせたほうが確実に死ぬ」と言われたほどだ。さらに、本人にはその自覚がないのだからタチが悪い。ところでは、

「(チッ、もう一人はエミリオかー)」

「まさか、もう一人は涼か!」

俺と恭介は同時に声を上げた。

「どうということ?」

アンプが恭介に尋ねる。それは俺も気になるところだ。必要なならば保護に向かわなければならぬ。

「その、マーシャさんが暗黒物質製造装置だとしたらたぶん、同じ境遇の魂はうちの臣候だ。だって俺とアルバートはある程度共通点があるし、その法則で行くとか、あいつしかいない」

「俺とお前の共通点?」

「作者に振り回されるチッコミ役つて感じ」
なるほど。疑問顔のマーシャに通訳する。ちなみに恭介の安全のために『暗黒物質製造装置』のところは『すばらしい腕の料理人』に変えておいた。テーブルマナーだけは素晴らしいんだけどな、本当に。

「んで、そつちのエミリオっていうのは?」

「ああ、うちの暗黒物質製造装置の飯を食つた奴だ。話を聞く限り、恐らくアンプと同じ境遇の魂だろう」

よりによつてエミリオとはな。早いとこ見つけてやらないと。

「(とりあえず私の知らないことを知つてるみたいだから、教えてくれないかしら)」

「(分かってる。後でな)」

今日のところはゆつくり休むことにした。

突然出てきたマーシャという赤毛の女性。ゾンビを少しも恐れずに粉砕した彼女は、アルバートの知り合いらしい。つたく、とんでもない部隊だ。もし俺がテロリストだったら迷わず投降するよ。

「信じてもらえないかもしないけど、俺とアンプはよく分からん組織に入つていて夜な夜な怪物と戦つてるんだ」

約束通り、アルバートに俺達の事情を説明した。

ポカンと口を開けるアルバート。そりやそなるか。俺だつて最初メナスマシアの事を聞いたときにはそうなつた。アンプから通訳を受けたマーシャが爆笑する。

「（何それ！　レイが聞いたら大喜びしそうな話ね！）」

「んで、俺達は 異能 つていうやつが使える。俺のはあらゆる銃器の構造を触れただけで理解して、扱う力。まあ、言つても信じてもらえないだろうから。アンプ」

「わかった」

俺の呼びかけでアンプが前に出る。そのまま備え付けの机の天板に手をかけた。

「こいつの異能は、あらゆる力を増幅するんだ」

アンプの小さな手が天板を易々と引き剥がす。

「なんだ、それは……」

「さつき、俺が敵の情報を知っていたのもこの力のお陰なんだ。自分の感覚を増幅するつてやつでね」

「俄に信じがたい話だな。だが、証拠がある以上否定出来ない……

怪物だつて似たようなモノをこの目で見てるんだ。お前達の言う事は信じる」

アルバートは初めこそ驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻した。切り替えの早さがプロなのだろう。

「さて、じつちの自己紹介だが、先程も話したように民間の特殊部

隊、『Demonic Pioneers』をやっている。所謂傭兵とは違つて、対テロ犯罪を専門としている組織で一流の連中が所属している。俺は指揮と近接戦闘、マーシャは擲弾手をやっている。コイツの事は呼び捨てで構わない

マーシャは一言、ヨロシクと微笑んだ。片言の発音から推察するに日本語は出来ないのだろう。

「自己紹介としちゃ、こんな所だ。とにかく、一眠りしてから2人を探しに行こう。その涼という子もどうせメナスメシアの戦闘員なんだろう。お互い生き延びている可能性は十一分にある。今は我々の休養が先だ」

アルバートは自分のライフルとハンドガンをベッドの下に隠す。俺もそれに倣つてハンドガンを抜いた。

「（その銃、見せて貰えるかしら）」

マーシャガルシフェルと十六夜を見る。

「触つても良いか、とマーシャは聞いてる」

アンプが通訳するので、弾倉を抜いて彼女に見せる。

「（Hk社のUHPの延長型をベースにして、フルオートシアに対応させるために各部をチューンアップしてる。フィニッシュをブルーイングから二トロカーブライズに変更してるし、何より特徴的なのはそれに装着された銃剣……フォールディングする刃をマガジンベースに固定しているのね。ふうん、よく出来てるわ）」

「マーシャの家はその……裏家業で武器を扱つていてな。俺達の装備もアーチボルト家から調達しているんだ」

「アリガトウ。Very fine.」

つて事は今、ルシフェルと十六夜は数々の銃を見てきた人間のお墨付きを貰つてゐるわけか……

「サ、サンキュー」

きっと、名前は知らないが開発者が知つたら喜ぶだろうな。

「（そうだ、二人を回収したら補給に行きましょうよ。近くにアーチボルト家の隠し倉庫があるわ。きっとあの調子でゾンビが出てき

たら弾も刃もきるでしょうじ。弟に語りてサービスしてくわ)「

「(前にスペインの倉庫に行つたときは品揃えに圧倒されたな)「

「(その5倍はあるわよ)「

「……」

「沢山銃をマーシャが用意してて、わたし達にくれる」

「なるほど。ありがとマーシャ。サンキュー!」

「ドウイタシマシテ」

マーシャはふわっと笑みを返す。いつも優雅に微笑む人だよな、笑う時は笑うけどさ。

「それじゃあ、俺は下に行つて隣の部屋を取つてくる。マーシャとアンプは隣に移つておいてくれ」

次の日。田の出で少し早い時間に俺は田を覚ました。隣のベッドで恭介が寝息を立てててこる。起こしてなつて下から銃を取り出しが準備した。

「どうやら、夜は明けるようだな」

窓の外を見ると東の空が明るくなつていて。しかし、明るくなつたとはいえゾンビ共がやつてきた時の事を考えると気分は沈む。何とかして打開策を考えなければ。

「ん? アルバート、もう起きたのか」

後ろを振り返ると、恭介が眠そうに眼を擦りながらベッドに腰掛けていた。

「ああ、まだ寝ていてもいいぞ。疲れているだろつ」

「いや、いつもこのくらいの時間に起きてるからね。ほり、昨日言った涼が朝に弱くて」

そんな会話をしていると外から銃声が聞こえた。

「何だ? ゾンビに銃を使つほどの知能があるとは思ないし……」

「今の音 7.62mmか」

俺の呟いた言葉に驚いたのか、恭介がこちらを向く。

「分かるのか?」

「戦場にいたらこのくらいは分かる。行くぞ、もしかしたら涼つて子かもしない」

「それは無いよ。涼は刃物使いだ。銃は撃てない。知り合いだとしたらエミリオって人だよ」

「そう言いながら恭介も銃を構えた。

「行こう、アルバート。朝の準備運動にはちょうど良い」

2人でエレベータに乗つて一階へ降りる。アンプは危ないところに行かせたくないし、アルバートの話ではマーシャは寝起きがかなり悪いらしく、ゾンビと戦う前に怪我したくないなら近づくな、との事だった。

ベルが鳴つてドアが開く。アルバートが先行して敵影があるか確認。「クリア！」

俺もエレベータから降りて両手の安全装置を外す。ガラスの自動ドアの向こうを見ると2つの影が見えた。しかしながら離れていてよく見えない。

「何だあれは？」

アルバートが呟く。とりあえず外に出て近づいてみると。ゾンビか？ でもそれにしちゃ、しっかり立ってるよな……。と、片方の後ろからどう考へてもゾンビっぽい歩き方をした、第三の影が襲い掛かった。つまり、あの2つの影はゾンビじゃない？

もう1つの影が何かを叫び、襲い掛けられたほうの影が腿のホルスターから拳銃を抜いた。

ズダン！ という発砲音と共にゾンビ（？）が倒れる。つーか、もう片方の影戦えよな、さつきからおうおうしてただけじゃん。でも、どつかで見覚えが……

「あの動きはエミリオか！」

アルバートが声を上げた。どうやら仲間のようだ。そして、そのエミリオがもう1人の影に何かを言つてゐる。さらに近づいてみると、辛うじて声が聞こえてきた。英語だった。

「Oh, thanks. Well, I must be dead if ya didn't tell that. By the way. . . Hey, You're so Hot, huh? what's ya name? Let's go somewhere to play with me if ya don't mind. (ありがと。全く、キミが教えてくれなかつたらどうなつていたか。にしてもキミ可愛いね、名前何て言うの? よければオレと遊ばない?)」

「あの馬鹿っ!」

アルバートが吐き棄てるように言う。別に英語が得意なわけじゃないし、日本から一歩も出たことが無いから分からないけど、男の様子を見るにナンパしてるらしい。もう1つの影は何を言われているのか分からぬようで、首を小さく傾げるばかりだ。それでもなんとなく雰囲気で察したのか、何かを必死で考えるような動きをとつたのちバリバリの日本語発音で言つた。

「え、えーと……あい、でいてすとゆー! げ、げっと、あうとあぶ、ひやー、あつとわんす!」

日本語に訳すと「私はお前の事が反吐へきが出るほど大嫌いだ。とつととこの場から失せろ」。あんな乏しい英語力しか持つていらない人間を俺は1人知つていた。

「……酷いな」

アルバートが呟いた。全くだ。エミリオさん日本にトラウマ持つちまうだろうが。あーあ見てみる、頭抱えてうずくまつたじゃないか。

「(エミリオー、じつに来い、とりあえず)」

アルバートがエミリオに声を掛けた。と、彼は弾かれたように立ち上がるといつちに向かって走つてくる。

「(おお、アル! 何やつてんだこんなところで! それより聞いてくれよ、ここんところ酷い目に遭いつぱなしだ!)」

「(みたいだな、聞いた話だとマーシャの飯を食つたそうじやない

か。これは自業自得だと思つが）」

「（イギリス人に舌が無いってのは本当だつたんだな……）」
英語で何か言葉を交わしたあと握手する2人。なんか一拳手一投足が格好良いな。

「（そりなんだよ。なあ、そこの中!!。そんなに酷い断り方するのを見ると、彼氏でもいるのかい？）」
エミリオが振り向くが、影はちつとも反応しない。銃をホルスターにしまつた俺の方をじつと見たまま固まつている。しうがねーな、呼んでやるか。

「よつ涼。このふぞけた世界へよつこな」

「恭君……？ 恭君なの？」

「疑うなら、お前が小学校の調理実習でフライパンの底溶かした話してやつてもいい」

「車に……轢かれたんぢやないの？」

「まあ色々あつてこの世界に、」

そこから先は言えなかつた。涼が俺に抱きついてきたからだ。

「……よかつた、よかつたよつ！」

「ななな何だよ！」

「もう会えないかと思つて……もう話せないかと思つて……心配したんだからつ！」

泣きながらそんなことを言つ涼。……つたぐ、しうがねーな。

「ありがとな、心配してくれて」

涼の頭を軽く撫でる。アルバートに跟で会図。

（悪い、もうちょい掛かりそうだ）

（俺達は先にホテルに戻るから、落ち着いたら来い）
(分かつた。ありがと)

泣き続ける涼を軽く抱きしめながら俺は頷いた。
立ち並ぶビルの向こうから太陽が昇るつとしている。

「この世界に朝が訪れようとしていた。

よし。

俺は気合いを入れるとマーシャのいる部屋のドアをノックする。当然返事など帰ってくる筈が無い。

扉の奥からはユサユサという音と、「Wake up!（起きてー！）」という声しか聞こえない。

「Am p! Please open the door if you want to wake her up.（アンプ！彼女を起こしたいならドアを開けてくれ）」しばらくした後にアンプが扉を開く。

「起きない」

日本語で呟くと、後は任せたとばかりに下の食堂に降りていく。

「……さて、起こすとするか」

俺はズボンのポケットからフォールディングナイフを一振り取り出し、刃を力チャリと開く。

「今日も一日が始まるぞ、マーシャ！」

俺は握っているナイフの刃先を真下に向け、マーシャの胸に真っ直ぐ振り下ろす。丁度心臓の位置だ。

「……ッ！」

マーシャはすんでの所で体を回して刺突をかわす。俺も刃先がベッドに触れるか触れないかの所でナイフを止め、そのまま横になぎ払つて追従する。

彼女はそれも頭を下げて避け、手刀をナイフの峰に直撃させる。ナイフは吹き飛んで床に落ちるが、その前に俺は拳を突き出す。

「畜生！」

「ゾゾゾ……」

しかしその打撃も受け流される。互いに打撃を戻し合ひ、それをやり過ごす。マーシャが12回目で突き出した掌底。その位置は高く、彼女の重心は浮いていた。

「もうつたつ！」

「……！？」

彼女の腕を取つて足を払い、ベッドの上に押し倒す。そのまま抵抗の隙を見せずに左手でポケットナイフを抜き、首筋に突き当てる。

「Checkmate.」

マーシャはそのまま硬直すると、そのまま氣を失つたよつて眠りだした。エクササイズは終了だ。

軽く汗を拭うと、マーシャをつづく。

「Good morning Marsha. (おはようマーシャ)

「彼女はもぞもぞと布団の中で動くと、とろんとした田でこちらを認識する。

「Good morning Al. (おはよう、アル)」

さて、今日も爽やかな朝だ。

俺は一つ伸びをすると、恭介たちと合流するために階下に降りて行つた。

ホテルで簡単に朝食を取る。食堂にそれなりの人間が集まつてゐる所から見て、昨日のように全く人がいないという訳じやなさそうだ。

「それどころか、活気すらあるな」

一人呟く。人々は思い思ひに談笑し、それぞれの人生を謳歌していふようだ。まるであんな恐ろしいゾンビなどいなかつたかのよつて

……

「何かの悪い夢だと思いたくなる」

アルバートは俺の隣に座つて溜息をつく。もちろん、そんなことはあり得ない。あり得ないといつ言葉こそあり得ないと分かつていながら。

「アルバート、銀行に行くんだろ？ とりあえず、俺も外に出て色々見てこよつと思うんだ」

先程考え付いたことを提案してみる。アルバートはしばらく思案した後、頷いた。

「情報が必要だ。ただし、一人一組で正午には帰つてくるよつて

る

「何で？」

「二人一組なのは、いつ敵に襲われても迎撃できるよう」。正午までというのは、その後アーチボルト家の武器倉庫に行くからだ」アーチボルトって言つてマーシャの家か。確かに銃については不安はないが、所詮、弾が無くなつたら、銃剣が付いていとはいつても銃なんてただの鉄の塊だ。俺の手元にあるのはマガジン2本分。これではあまりにも心もとない。

「分かつたよ。涼を連れて行くから、アンプに基本の情報とこれらの方針を伝えておいてくれ。あと、エミリオさんのことも」

「アイツのこともマーシャと同じで呼び捨てで構わない。今度は、離れないうにしろよ？」

悪戯っぽい顔をするアルバート。この人、こんな顔もできるのか……

「なにを？」

「彼女さんの手をだよ」

俺は飲みかけていた紅茶を噴出しそうになつて、むせ返つた。

「ちつちがつ、違つて！ 俺とアイツはただの幼馴染つてだけで！」

「そうか？ すぐ似合つていたと思つが……」

「んなわけないつて！ 俺がアイツと一緒にいるのは、危なつかしくて田が離せないつてだけだから！」

「さつきだつて、抱き合つていたじやないか。少しは気があるんじやないか？」

「だから違つて言つてんだろ！ あれはアイツが泣き出したからで！」

笑いながらそんなことを言つアルバート。朝から調子が狂うな。そんな会話をしていると後ろからマーシャが声を掛けてきた。

「（おはようアルバート、キョウスケ。ねえ、聞きたいことがあるのだけれど）」「

なんとかグッドモーニングくらいは聞き取れたので挨拶を返す。ア

ルバートに通訳を頼むと、ビリヤやら問題が起きたらしい。

「（どうしたんだ？）」

アルバートが尋ねる。

「（さつき忘れ物をしたから部屋に一旦戻ったんだけど、私のベッドに知らない子が寝てるのよ。それにさつきHミリオがいたし。どういうことかしら？ アンプに聞いてみたら、どうやら知り合いらしいんだけれど）」

そういうば、さつき涼が「昨日の夜は寝てないから寝る」って言ってアンプに連れて行かれたんだっけか。アルバートが早朝の出来事について説明する。

「（なるほど。それで、そのスズなんだけど……ちつとも起きないのよ。どれだけ揺らしても、耳元で大きな音を出してもね。あれほど寝起きが悪い人間は初めて見たわ）」

「（俺は一人知ってるよ……）」

アルバートが疲れたように呟いた。お互に苦労しているようだ。
「ちょっと起こしてくるよ。アイツは俺じゃないと起きないんだ。
それと、マーシャに『めんつて伝えておいて』

アルバートにそう言つて、俺は涼を起こしに部屋へ向かつ。

「すゞ～起きる～メシ抜くぞ～」

ベッドの上の掛け布団がもぞもぞと動き、寝起きでぼやぼやな、色素の薄い頭が顔を出した。眼が半開きだ。

「ふえ？ おはよ恭君」

「皆待つてるから、下に行くぞ」

「あ、うん。そだね」

「こいつは異世界でもこの調子か。……いいのか？ これで。

「で、色々と調べて回ったわけだけど」

マーシャの倉庫へ向かう道中、恭介が口を開いた。現在午後1時。周囲の喧騒がこちらにも聞こえてくる。昨日のことが嘘のようだ。

「あのゾンビは夜にならないと出てこないみたいだ。昼間にいた人たちにはゾンビのことを知らなかつた」

「知らない？　だつてあんなにゾンビが居たら、どんなに夜とは言つても誰か気付くよ」

涼の言葉に恭介は頷いた。

「あと、気付いてたか？　これだけ物物しい格好のアルバート達がウロウロしてゐるのに警察が来るどころか騒ぎすら起きなかつただろ？　服の下にホルスターを付けてる俺やグルカナイフをケースに入れてるお前は別としてもさ。やっぱ、この世界に俺達の常識は通用しないみたいだ」

言われてみればその通りだ。恭介たちならともかく、俺達の装備は玩具の域を逸脱してしまつてゐる。しかし、それについて誰も触れてこない。　まるで、それが当たり前の光景のように。

さらに、と恭介は続けた。

「もしかして、これがパラレルワールドつてやつならもう一人の俺も居るんじゃないかつて思つてさ。公衆電話で電話してみたんだ。そしたら元の世界で俺が使つていいはずの番号は存在しなかつた。これは俺の仮説だけど……逆逆の馬鹿が言つてた『書けなかつたアイデア』つてのに、もしかして俺達は存在していないんじゃないかな

「そんざい、しない？」

アンプが彼を見上げた。それは俺としても気になるところだ。

「俺や涼、アンプがいるブランクブレイン……アルバートやマーシャ、エミリオがいるThe War in Manhattan……

… そのどちらでもない物語の舞台がこの世界だとしたら、

「（おい、だからどういうことなんだ？ はつきり言つてくれよ）」

俺から通訳を受けているエミリオが続きを促した。

「本来出てこないはずの作品から出てきたキャラは、本来の作品に強制的に戻される。作風に合わなければ邪魔なだけだからさ。でも、

俺達には戻されるべき体と魂が揃っていない。つまり、」

「（体が護つているはずの魂が、強制的に戻されるときのダメージを受けるつてことかしら、キョウスケ？）」

マーシャの通訳を聞いて恭介が頷く。

「ああ、一種の拒絶反応ってやつだ。元の世界に帰るのはその拒絶反応に任せることしても、体を見つけないことにはまずいことになるかもしねー」

どうやら状況は思ったより悪いらしい。急がなければならぬことは分かるが、手がかりがないことには迂闊に動けない。こんなときにXナンバーの奴は何をやつてるんだろうか。あの廃人、俺達を放つておいて遊んでやがった時には……いや、待て。落ち着けアルバート。 そうだった、はじめからあいつは殺すはずだつたじやないか、ハハハ。

「あの、アルバートさん？ 眼が怖いよ……？」

涼が俺の顔を見て言った。それで正気に戻る。

「ああ、すまない。ある男のことを思い出してな」

そんな会話を交わしていると、田的の建物に着いた。アーチボルト家の武器倉庫だ。外見は薄汚い8階建ての雑居ビル。しかしその地下に広がる空間は地上階より遥かに広く、古今東西あらゆる銃器とその弾薬が大量に揃えられている。さらに射撃場まで完備されていて任務に就く俺達もかなり世話になつた。といつても、日本にある倉庫を実際に見るのは俺も初めてだ。

「（確か……ここだつたかしら？）」

マーシャは外壁のタイルに指を這わせると、その継ぎ目にカードを差し込んでスライドさせた。

それからビルの中に入ると、埃っぽい床の一部が外れかかっているのに気が付く。

彼女は床板をどかすと、ついて来いとの合図。その直後、彼女の姿は穴に消えた。

床板の中には梯子があり、それは地下の奥深くまで続いていた。一番最後に降りていった俺は、扉の前に立つ彼女と一同を暗闇の中で視認する。

「P a r a b e l l u m . (戦争に備えよ)」

マイクが彼女の声を拾い、声紋を認識する。しばらくの後、重厚な観音開きの扉がゆっくりと開いた。

「W e l c o m e .」

マーシャは優雅に微笑んだが、他の皆は馬鹿みたいに口を開けていりしかなかつた。

広すぎる。

「(……おいマーシャ、いつからルーブルは日本に越して、銃ばつか置くようになったんだ?)」

エミリオがようやく口を開く。

そこは柔らかな照明が大理石の磨き上げられた白い床を照らし、順路を示す矢印が壁に貼つてあつた。そこは美術館だ、と説明しても誰も疑わないだろう。

しかし、そこでスポーツライトを浴びているのは数々の銃、銃、銃。「(なるほど、ルーブルとは言い得て妙ね。確かに銃器の博物館としても通用するわ。ベレッタ・ミュージアムも真っ青でしょ。地下一階の半分は第二次世界大戦終戦までの銃を中心に置いてあるわ。ここらへんは時代もあるから欠損しているモデルも多い。残り半分と地下一階は第二次世界大戦から現在に至るまで。M 16 - A K系のバリエーションはすべて三階よ。地下四階はシュー・ティング・レンジと手入れ、調整ができるファクトリーがある。弾薬とマガジンもここ)。どこでも好きなように移動して構わないわ。しばらく時間がたつたら放送で呼び出すから)」

「（……本当に博物館だな）」

南北戦争に使われたミニエー銃が並び、その少し向こにマクシム機関銃と思しきテカイ円筒がある。歴史的な価値も高いだろ。

「貴重なモノもあるから、無闇に手を触れるなよ」

「うわあ、見て見て！ 变な形のリボルバー！」

「つて全然聞いてないし……ん？」

彼女が手に握っている回転式拳銃。トップオープンのフレーム。引つ込んだトリガーオのペリとしたバレルを持つその銃は……

「（おいマーシャ。あのテキサス・パターソン、可動品か？）」

「（ええ、もちろん。私があれのレプリカを置くとでも？）」

クソッ！

「お、おい、涼ちゃん。そのまま、持っている拳銃を、ゆっくり、元の場所に、戻すんだ」

「？？？」

「テキサス・パターソン・リボルバー。コルトが手がけた最初期の拳銃。製造数が元々少なく、現存する完璧なモデルはもっと少ない。それ故、高値がついていてな。その上物なら……ざつと10万ドルは下らないだろ？」

「じゅうまんじゅうまん、ひやくまん、せんまい、一千円！？」

涼はそのまま固まる。

「あわわわわどじょひーー てててて手が震えてうひうひうひ動かないよおおおお」

「落ち着け涼！ ほら、そのまま慎重に戻すんだ」

恭介が彼女の手を握つてそのまま壁のフックまで誘導する。彼女の痙攣は収まったようだ。代わりに頭から湯気噴いてるが。

「（なんで気づかないのかねえ、あの少年は。あんなカワイイ子に一途に好かれるなんて、本当に果報者だぜ）」

「（じつちの世界じゃ、いつもあんな調子）」

Hミコオとアンプがスペイン語でヒソヒソと話しているが、当の本

人達は意味を理解していなかつたのか、はたまた氣づかなかつたのか……

地下の『博物館』で、俺は拳銃の並ぶ壁を前にして一人立つていた。

「（どうしたの？）」

声に振り向いたが誰もいない。

「（下）」

視線を下げるが、そこにはムスッとしたアンプの姿があった。

「（いや、すまん。少し考え方をな）」

「（考え方？）」

俺は自分の考え方を話す。

「（そつちの世界と、俺達の世界。創った人間は違う筈なのに、平行世界は一つだ。作者の思考から生まれる副産物なのに、何故その副産物が融合しているのか……逆逆とかいう奴が言つていただろ、『ここはひどい世界だ』と。奴も平行世界が融合していることを理解していのないのかもしれない。『作者は平行世界に干渉できない』とこう言葉を信じるなら、俺の所の作者もおそらくシロだ）」

「（つまり？）」

「（何らかの外的要因が平行世界を一つにしたという説を考えた。俺達も作者も知らないような第三勢力。それが何らかの力で世界を融合させ、俺達は死んだショックでそこに迷い込んだ　あるいは誘い込まれた）」

「（おもしろい思考。所で、これは私の考え方だけ……）」

アンプは言葉を探す。

「（あのゾンビのようなものを操る、もっと高位のモノがいると思う。アレはそれほど知能があるように思えないけれど、私達の肉体を奪おうという意志が感じられた）」

「（五感を『増幅』させて読みとつたか。便利なものだな。続けて）

「（つまり、その高位存在が指令をゾンビに下し、私達の肉体を探

していのだと考えた。で、あなたの説と合わせて考えると（）」

「（……世界を融合させた存在が俺達の肉体を必要としているとい

う事か）」

「（そうこう「う」と。勿論、目的までは分からぬけど）」

彼女はテクテク棚に向かつて歩き、ハンドガンを見上げる。

「（当分情報収集の為に動く事になる。この仮説を確かめなきゃ）

「（利発だな、全く）」

俺は並んでいるハンドガンの中から一丁を取り出し、彼女に手渡す。

「（ルガー M K .3。弾は .22 LR を 10 発だ。威力は小さいがその分反動が低く、扱いやすい。精度の高さを生かして頭を狙え。

……遠距離用の武器が入り用なんだろ？）」

「……ありがとう」

「わざわざ日本語か？」

「かんしゃのことばは、にほんごがきれい」

俺はそうか、とだけ返した。頭の中は、この謎だらけな世界について考える事で一杯だった。

俺達は各自の弾薬を補給し、予備の銃もいくつかもつていく事にした。特に俺と涼、そしてアンプには動きを妨げないボディーアーマー、グローブに戦闘服が支給された。

「コイツがあれば防御力は上がる。最初は重いかもしねだが、すぐになれるだろ？」

装備を一段階グレードアップしたのか、一層強固なボディーアーマーを着込んだアルバートとマーシャ。弾薬のポーチはベルトにまで増設されている。デジタル迷彩が施された戦闘服は都市戦で有利に働くだろ？。

「あれ？ そういえばヒミリオは？」

「奴ならまだライフル弾の調合をしているはずだ。ちょっと見に行つてくる」

「俺も行くよ」

ライフル弾の調合なんて、どんな事をやつていいんだ？ 少し興味がある。

扉を開くと、エミリオが機械を使って弾頭を薬莢に押し込んでいた。なるほど。ああやつて銃弾は作るのか……

「（またパウダーの合成か？）」

「（ああ。スナイパーにとって常にベストな弾薬を準備する事は女の次に大事なんだよ。ああ、そうだキヨウスケ。お前の名前が書いてある銃があつたぜ）」

彼が指さした先。それは……

「カノンハウルじゃないか！」

俺の愛銃である、50口径中折ライフルがそこに折り畳まれて横たわっていた。

「驚いたな、こんな所にあるなんて」

「お前の世界の銃も、どうやらこちらの世界に持ち込まれているらしいな。弾を切らすなよ。よいしょっと」

アルバートは・50ブローニング弾を一箱担いで荷物に加えた。すぐ隣には、エミリオの物と思しきライフルがある。精悍な黒のストックに、すらりと伸びたバレル。装着されたスコープとバイポッド。すぐかっこいいライフルだ。俺は思わず手を伸ばした。

「DO NOT TOUCH IT！」

ライフルに手が触れるか触れないかで、エミリオはものすごい剣幕でこちらに歩いてきた。

「（スナイパーの銃に触れるなんて、お前はどうこう脳味噌を授かりやがったんだ！）」

アルバートの通訳を介すまでもなく、俺は自分の過ちを認めた。

「あ、アイムソーリー」

「（ふつ、まあ、触れてないならいいが。今回は許す）」

エミリオはふとこちらを向く。

「（なあキヨウスケ。100ヤードの距離から175グレインの弾

頭を秒速2600f/sで飛ばす時、角度が1°。ズレた場合には何インチの着弾誤差が出ると思う?」

は……? なんだか、ファイートとかグレインとか耳慣れない言葉が聞こえたけど……? アルバートの通訳を聞いても、理解できない。ああ、そうか。これはもはや言語ですら無いじやないか。

なんだ、数字か。

次の瞬間、俺の視界はブラックアウトした。

「(何ソレ……)」

マーシャは呆れて声も出ないよつだ。

「(きょうすけに数字は毒)」

「と、とにかく、恭君も起きたんだし万事解決でしょ? なんだか女性陣に哀れみの目で見られているような気がするけど、別に何ともない。うん、いつもの事だ。」

「まあ持病みたいなもんでも。3桁の足し算引き算までは大丈夫なんだけど、4桁になると眩暈。5桁になると吐き気。それ以上複雑になると意識障害がでるんだ」

目が覚めた時はもう口が沈むかという頃。急いで夕食をかき込むと、来るべき日没に備えた。

「さて、もうすぐ日が沈む。銃の点検を」

ボルトやスライドを引いて初弾を装填するガチャガチャという音がする。つてかアンプも拳銃貰つたのか。

「……また、あんなのが来るのかな」

涼がグルカナイフを引き抜いて軽く振る。金属が空間を切り裂く音がした。

「来るなら、倒すまでだ」

カノンハウルと二丁拳銃の薬室には、既に弾丸は装填されている。

「Stand by!」

その一声で周囲が緊張する。日がだんだんとビルの谷間に消えていく。

それと同時に、周りを歩いていた人間も。

闇が訪れた時、そこは俺達と、

化け物しかいなかつた。

奴らの叫び。くそつ、今回は数が多い。

「（十分に引きつけて！）」

マーシャがトリガーに指を移動させる。

「5！」

アルバートがカウントに入る。

「4！」

俺もトリガーに指を掛け、涼は構えの体制に入る。

「3！」

だんだん近づいてきた。

「2！」

輪郭がはっきり見える。

「1！」

「こんばつぱー！」

轟くエンジン音が全ての緊張をぶち壊して俺達の左側からやつてくれる。

「……まさかっ！」

アルバートが驚きの表情を見せる。

750ccエンジンの重いサウンド。だがそれを操る男が乗つているのは、バイクでは無かった。

「ロデ ボーイ……」

「ロデオ ーイだつて！？」

まさか、あの男はあのシェイプアップ機器に、エンジンを取り付けてやつってきたつてのか！？

一体何者なんだ？

中央が凹んだウェスタンスタイルの帽子に、チエックのシャツとジ

ーンズ。革ジャンと革のブーツを身につけて、腰にはガンベルトでリボルバーを2丁吊つている。手に持っているのは、レバーアクションのワインチエスター・ライフル。「これはどこからどう見ても、

「西部劇か……？」

男は手にしたライフル、M1873を馬（？）上で発砲し、瞬く間に装弾数14発を用いて14のゾンビを地獄へ送り返した。射撃の腕は中々らしい。

彼は口 オボーアイを俺達の眼前に止めると、鞍（？）についたホルスターにライフルをしまう。

「やれやれ、腹筋ショイプアッブコースは良い具合に鍛えられるな」意味不明な言葉を呴きつつ、乗り物の後ろに積んであるラジカセのスイッチを入れる。

「イントロが終わるまで生かしておいてやる。地獄へ帰れ、亡者共」

曲が流れ出した瞬間、俺は夢だと思った。恐ろしい早さでリボルバーを抜き撃つガンマンと、流れてくるエロゲの曲とのギャップ……いいのか、これで？

ファストドロウ、ファーニング、トリックショート。様々な射撃法で45レルの弾頭を脳天に叩き込んでいく。6発撃ち終わればお手玉のように左手と右手の拳銃をスイッチして再び撃ち始める。それは実に鮮やかだった。バツクミュージックがここまでイタくなれば、12発目を撃ち終わつたとき、彼は銃をくるくる回してホルスターに戻し、曲の歌詞を小声で、あくまでダンディーに呴くのだった。

「 あつとめいと」

何だコイツ……

「（つーか、スゲエな……いろいろと）」

エミリオが呴いた。無言で俺も同意する。

「あの曲知ってるよ！ わたし以外にも持つてる人居なんだ！」

持つてんのかよ涼。俺は思わず仰け反つた。と、横からどす黒い

殺意のオーラが。敵かと思つて振り向くとアルバートだった。何事かをブツブツと呟いている。

「殺す……」

「へ？ 何言つてんだ？ 僕がそう尋ねる前にアルバートは銃を構えて突撃していった。

「Xナンバー！ 貴様に会える口がこれほどまで早くに来るとはな！」

「おおアル！ 私もキミの顔が見たくて夜も眠れなかつたんだぜ！」
変態のほうもローデ ボーイから降り立つて、アルバートに向かつて両手を広げる。

「こつちは今夜からぐつすり眠れそうだ！ てめーのツラを揉まないですむと思うとな！」

アルバートが放つた弾丸が、突然現れた変態の顔面に吸い込まれていく。

「ハハハ、無駄だよ無駄！」

変態はポケットから取り出したトマトでそれを受け止めた。ぐしゃぐしゃぐしゃ、と音を立ててトマトが潰れる。あんまり食い物粗末にすんなよな、と專業主夫モードの俺。

「俺、あのシーン知つてる。実際にやれる奴居たんだ……」

「見たことあるの？ 恭君

後ろで涼が仰け反つていた。

「（アルがあんなに取り乱すなんて。あの変な奴とかなり深い因縁があるのかしら？）

「……いみふめい」

アンプがマーシャの言葉に首肯した。

「クソッ！ 殺しきれないかッ！」

マガジンの中身を全て吐き出して銃口が沈黙する。アルバートが悪態をつきながら呼吸を整えた。変態は顔面をトマトまみれにして笑つていてる。

「やー やー 皆わん。おこりの名前はずつと×ナンバー。とれたて新鮮な君たちの味方さー！」

果たしてこの変態さん、日本で一般的に使われている言語 すなわち、国内では日本語、世界共通語では『ジャパニーズ』と呼ばれるものは通じるのだろうか。

「ん? キミは恭介君かね! わーいわーい!」

俺を見止めると、嬉しそうに両手を振ってきた。これまで、16年とちょっとの人生の中でこんなぶつ飛んだ人類と知り合いになった覚えはない。だつて忘れるわけないだろ、絶対にトライウマになつてるはずだ。

「……誰?」

俺の言葉に変態は「なんだつて」と叫ぶとオーバーアクションで額を押された。そうしたいのはこっちだ。

「聞いてないの? 逆逆君に、何も?」

「逆逆の、知り合い?」

「では改めて。やー やー 皆わん。おこりの名前はずつと×ナンバー。とれたて新鮮な君たちの味方さー!」

「そつからかよ!」

思わず突っ込んでしまった。何だこいつ……格好から中身に至るまでツツツ//ビビろが満載じゃねーか。

「うーん、良いツツツミだ。速さ、鋭さ、共に満点。すばらしくーーえーくせれんとつ」

はっきり言つて、ウザかった。いちいち動作が目障りだ。しかし、この変態を見ているとどうにも逆逆の事が思い出される。田の前の男は、どこかアイツに似ていた。

「皆も状況は把握したよねつ! ジャ、本題にいってみよー『待て待て待て』(注・この中に、英語、スペイン語、ロシア語、日本語を含む)

その場に居た全員が、首と手の平を同時に横に振った。おお、異なる国が足並みを揃えた瞬間だ。異文化交流つてすばらしい。

「何だ、意外と飲み込み悪いんだね」

全員の額に血管が浮き出た。おお、異なる国が足並みを以下略。

「「」これまでのお前の発言で状況が飲み込める奴が居るとしたらそれは嘘をついてるか、お前自身がどちらかしかない…」「俺とアルバートがきれいにハモつた。どうやらアルバートは口系みたいだけど、アメリカ国籍だから　　おお、異なる国が以下略。」
「しようがないなあ、一から説明するよ、全く……めんどくさいなあ。逆逆君、やつといてつて言つたのに……最近買ったゲームが佳境だから任せたつて何だよなあ」

あの野郎、俺達がこんな状況だつてのに自分はゲームやつてんのかよ！　Xナンバーは一つ咳払いをすると真面目な顔になつた。

「」の世界はキミ達が居た世界とは全く異なる軸にある。つまり、この世界ではキミ達は存在しない事になる。そして、当然その存在は邪魔だ」

どうやら俺の推測は当たつていたらしい。だとしたら急がないとな

……

「（邪魔、つてどうこういとなんだ？）」

エミリオが尋ねた。Xナンバーはふむ、と考え込むと説明を再開した。

「簡単に言つてしまえば“逆境無頼力　ジ”の世界に突然“プリュア”が出て来る様なものなのさ」

分かりやすい例えだ、変態にしては。でも、エミリオにそれが分かるのか？

「（なるほど。分かつた）」

しかしエミリオはふんふんと頷いた。ジャパンアニメ、恐るべし。
「違う例えでたとえると、そうだなあ……」

いや、誰も頼んでないぞ。

「SHUFILE！に、ゴ13が出て来るみたいな

「なるほど！」

涼が手を叩いた。何でこいつは分かるんだろーか。

「まあ、そこは恭介君辺りが解いているんだろうけど。逆逆君からは頭脳明晰と聞いているよ」

「そんなんじゃないわ」

「さて、ここでキミ達は違和感を感じないかな？」
何のことだ？ 全員が考え込んだ。そして、一つの疑問が浮かび上がる。

「何でマーシャの武器倉庫はこの世界にあつたんだ？」

「そう、そこだよ。本来君達が居ないということは、アーチボルト家も存在しない。にも拘わらず武器倉庫はこの世界に存在する」
考えてみればそうだ。これでは俺の仮説と矛盾する。

「そこは、僕と逆逆君が頑張ったのさ！ 壊めて壊めて！」

×ナンバーが頭を差し出す。

ガツ！ つとアルバートが無言でアスファルトにそれを叩きつけ、ズシャーッと叩きつけたままの頭を裏路地にまでスライディングさせ、

グシャ！ つと中華料理屋の裏にあつた生ゴミが大量に入つたポリバケツに放り込んだ。

「大丈夫かな……？」

涼が心配そうに呟く。しかしそれは杞憂だつたようで、×ナンバーは頭にアジの頭や林檎の芯や食いかけのチンジャオロースを載せた愉快な状態で立ち上がつた。

「痛つてえ！ 僕の顔を秋刀魚の薬味にした挙句に生ゴミにする気か！」

「うるさい！ 気持ち悪いわ！」

アルバートがキレた。つーか×ナンバー……一人称、統一しろよ。

「こいつが俺達の作者だなんて、未だに信じられんな」

ああ。逆逆がそんな事を話していたような気がする。同じ学校で同じ部活だけ？ 通りで雰囲気が似ていると思った。

「まったく。マジメに話をしようと思ってたのにい」

嘘つけ、と言いたげな視線を浴びつつ、×ナンバーはゴミを手で払

う。つてか「ミミ綺麗さっぱり落ちてるし。作者パワー？」

「さて。キミたちがこの世界で邪魔者だという所まで話したかな？」腰のリボルバーに弾丸を込め、レバー・アクションライフルにも肩掛けベルトに挟んだ弾薬を装填しつつ、Xナンバーは一息ついて天を仰いだ。

「平行世界と通常の世界つてのは、対極に位置している。陰と陽つてやつだね。光と闇、破壊と再生、男性と女性、正物質と反物質。対をなす存在があつてこそ、世界は安定するんだ。政治だつて保守派と革新派のバランスがとれていないと崩壊するだろ？」

だけど、とXナンバーは話を続ける。

「片方が強力になれば、当然バランスが崩れ、それは自壊する。女性が沢山いても、男性が一人ならばゲフツ」

Xナンバーが盛大に鼻血を吹いた。一体何を妄想したつてんだ。予想はつくけど。

「と、とにかくそれは好ましくない事態。シーソーは傾いたまゝとなり、シーソーとしての役割は果たせなくなるわけだ。それがこの世界でも起こり始めている。キミたちも見ただろ？ 夜になると全く別の世界に切り替わっていく様を。平行世界が対になる世界を夜だけとはいえ、完全に塗り替えているんだ。つまり

「平行世界が大きくなっているつて事かな？」

「ザツツライ！」

涼の言葉にスマイルとサムアップ。本当にテンションが高い奴だ。

「オイチヤンもよく分からんんだけど、ボクと逆逆の平行世界が寄せ集められてるらしいんだ、人為的に。それで私と逆逆は原因究明の為に、この世界に潜入した。するとビックリ、キミたちも又この世界に紛れ込んでしまつたじゃないか！ 理由を聞いて二重に驚いたよ。キミたちは『死んで』ここに来た。だが何故キミたちが死ぬんだ？ ある種の創造主である俺達の改変無しに、何故キミたちが死ぬ？ 答えはたーんじゅん。何かがキミたちを呼び寄せたんだ」「つまり、ワタシ達を必要としているモノ、あるいはヒトがいる

つてこと？）」

「（正確にはキミたちの駆かじだだ。必要としているだけならそのまま拉致すればいい）」

マーシャの質問を一部肯定するXナンバー。つてかコイツ英語話せるのかよ。なんかムカつくな。

「拉致……そういえば！」

アルバートが何かを思いだし、Xナンバーに問う。

「俺と恭介がさらわれた時、スーツを着た、丁度お前みたいな変態と出会つてな。そいつが『Xナンバーの協力無しには君をここに連れて来れなかつた』と言つていた。Xナンバー。お前はこの件について、何か噛んでいるのか？」

「スーツ……姿？」

熟考するXナンバー。皆が見守る中、時間だけが過ぎていく。ぽつくりぽつくり、ちーん。

「僕チンよく分かんない。最近記憶が飛び気味なの」

「死ね」

アルバートがその首を片手で締め上げた。奴の両足が宙に浮き、その口から変な音が聞こえて来る。しかし誰も止めに入らない。ストレス溜まつてゐるからな。

「ぽつくり！」

Xナンバーが皿田を剥いてぐつたりとなつた。……死んだか。にしても自分の口で「ぽつくり」と言つう奴、いるんだな。世界は広い。アルバートがソレをボロ雑巾のように放り投げる。哀れ奴の体は再び中華料理屋のゴミ箱に突き刺さつた。

「これで少しは世の中も良い方向に向かうだろ？ 行こうか、皆」「ちょっと待てやい！」

「何だ、死んでなかつたのか」

「ひどくない！？」

Xナンバーはポケットから「山猫は獲物を逃さない」と書かれた扇子を取り出して広げた。ちなみにゴミ箱に入ったまま。頭には色

的にやばそうな感じの酢豚が乗つかったている。

「しかし、スーツの男ねえ。ふん、面白くなつてきやがつた」

「格好つかないから酢豚どかせ。眼も当てられない」

「俺が声を掛けるとXナンバーは嬉しそうに顔を輝かせた。

「キミはそれがしに声を掛けてくれんの！？ やつさし～！ それが美少女だったらなお良いんだけどなあ～。そりいえば聞いてるよ？」

逆逆君から。キミ、女装ができむ～」

言い切る前に、俺はこいつの口にルシフェルの銃口を突っ込んだ。

「黙つて死ぬか、しゃべつて死ぬか、好きなほうを選ばせてやる」

「どつちも死んじゃうよね？」

「みたいだな」

「分かつた、言わない、約束する」

こくこくと頷くXナンバー。もつ一度睨むと俺は銃口を外した。

「んで、正直なところどうなんだ？ 覚えあるのか？」

俺が尋ねるともう一度熟考するXナンバー。

「いや、どうやら我々作者陣も調査する必要があるみたいだねえ。とこいつわけで、ここいらで退散させてもらひンゴン」

そんなことを言いながら奴はロテオ一にまたがるとラジカセのボタンを押した。しばらくして、悲しい旋律のピアノが聞こえてくる。

「何でショパンの『別れの曲』……」

アルバートが呟いた。全くだ、理解ができん。

「ではさらば！ 願わくばまた出会わん」とを！

できれば一度と会いたくない。そんな俺達の心情を知つてか知らずか、Xナンバーは颯爽と走り去つて行つた。

はあ、思わず溜息が出る。

横を見ればアルバートも同じように溜息をついていた。

「（おい、夜が明けちまつたぜ）」

エミリオが空を見る。東の空から太陽が昇るつとしていた。いや、いくらなんでも早過ぎないか？

「ここではわたしたちの世界のじょうしきは通用しない。それを言つたのははきょうすけ」

アンプが俺を見上げて言った。

「……ああ、そうだったな」

俺達は朝の光に眼を細めた。とにかく、今は情報が必要だ。逆逆やらXナンバーが何か掴むまでは戦い続けるしかなさそうだ。……い

いのか？ これで。

第4話・Tasting Peace

疲れていたので、日中に眠る事はさほど苦ではなかった。一日一四時間で体内時計を動かしておかなくては後に障る。

「(やつぱりオレ達には、なんも出来ないのか?)」

朝食の席、エミリオは慣れない箸でメシを食いながら俺達に問う。

「(作者が深く絡んでいる問題である以上、アイツ等を探さなければ)」

俺は味噌汁を飲むと立ち上がる。

「(どこ行くんだ?)」

「(シューティング・レンジだ。腕を上げることは難しいが、鈍らせるのは簡単だからな)」

ここにとひり、難しい事を考えすぎている。少し気分転換をしたかつた。

「(そうか。にしても、このハシってのは使いにくいいな。何でアジア圏の人間はこんなで飯が食えるんだ?)」
首を傾げるエミリオ。ナイフやフォークに慣れてしまった人間には使いにくいものだらう。マーシャはすぐに使えるようになつたんだがな。

「(郷に入つては郷に従え、だ)」

「(そんなもんかねえ)」

彼は天井の蛍光灯に箸をかざし、ペン回しの要領でクルクルと回し始めた。行儀が良くない。

シューティング・レンジに行くと、すでに恭介が右手に握った銃を的に向かって構えていた。

「おはよう恭介。……恭介?」

声を掛けるが反応しない。真面目な顔で的を狙つているまだ。聞こえていないのか?

「あ、アルバーートさん。おはよつゝぞこます」

声のしたほうを振り向くとイヤーマフを着けた涼が手を振っていた。そして申し訳なさそうに苦笑する。

「恭君、いひなつちやうど反応しないんです。本を読んだるときとかはそれに入り込んだら、地震があつたのに気付かなかつた事もあつたなあ」

そのときのことを思い出したのか、涼がくすっと笑つた。そして近くにあつた休憩用のベンチを指差す。

「座りませんか？ 少しお話したいです」

「すごい集中力だな。どうなつてんだ」

ベンチに座つて、銃を構える恭介の背中を眺めながら思わず呟いた。

涼がそれに頷く。

「ほんとにねえ。だけど、昔からわたしが困つてたときには一番最初に気付いてくれるんですよ」

嬉しそうに微笑む涼。この際だから前々から気になつていていた事を尋ねてみよつか。

「君は……彼のことが好きなのか？」

それを聞いた瞬間、彼女は耳から首まで赤くなつて俯いてしまつた。おいおい大丈夫か？

「わかります？」

しばらくして涼が小さく口を開いた。

「……まあな」

そりや、あれだけ過剰に反応していれば誰だつて気付くだろ。バレていないとでも思つていたのか？

「よく言われるんです、考へてる事が手に取るよつて分かるつて。だけど恭君だけは未だに気付かなくて」

「信じがたいが、そつなんだろうな」

これだけ分かりやすい反応をする彼女の想いに気付かない人間つてのが一番近い位置に居るのは、かなりもどかしいんだろう。

「なあ、君はどうして恭介の家で暮らしているんだ？」

このままでは彼女が赤面しそぎて死ぬ可能性があつたので話題を変える。

「あ、そっか。アルバートさんは知らないんだつけ。わたしが小学生のときに両親が2人とも死んじゃつて、恭君のお父さんに引き取られたんですね。それからはずつと一緒に」

「その、大変だつたんだな」

彼女の明るい表情からは想像もつかなかつたが、かなり重い過去を背負つていたようだ。申し訳なさそうにする俺を見て、涼は慌てて首を振つた。

「だ、だけど皆が励ましてくれたから、今はもう寂しくないですよ？」

恭君もアンプもいますから

「そうか、よかつたな」

「はい！」

笑顔で頷く涼。すると恭介がシューティングレンジから出てきた。

「おはようアールバート。涼も」

「ああ、おはよう」

「うん、おはよ」

「なあアルバート、聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

「銃剣の練習をしたいんだけどなんか良い方法あるかな」
なるほど。的だけじゃ撃つ練習しかできないか。どうしたものか、マーシャに尋ねてみるか。

「それと、涼。お前は何で死んだんだ？」

そう聞かれた涼は少し赤くなりながら答えた。

「びっくりしたから……」

「は？ びっくり？」

「恭君が車に轢かれたつて連絡が来て、ショックでそのまま……」
そりやそうだ。普通の反応だ。

「ちょっと待て。お前にその連絡を入れたのは誰だ？」

恭介が首をかしげた。ん？ そう言われてみれば、確かにそつだ。

俺達が死んだのを知つている人間はいないはず、それは肉体が次元の狭間とやらに放り込まれているからだ。それをなぜ……？

「うーんと名前は聞かなかつたんだけど、スーツ着てたよ」「スーツ？ それってまさか、ちょっと背が高くて、変な事ばっか言つてなかつたか？」

涼はしばらく考えると頷いた。

「そう、たぶんその人だと思つ」

「俺、アルバートがひき逃げ……アンプとユミリオはダークマター……涼とマーシャはショック死……？ まさか、でもそんなハズは……いや、ありえない事はありえない、か」

何事か呟いた後、恭介は俺の方を向いた。

「アルバート、これは仮説だけど……」

「何か分かったのか？」

「だから仮説だつて。俺達の死因、バラバラなようだけど共通点があるかも」

「共通点？ どゆこと？」

涼の言葉に頷くと、恭介はポケットからメモ帳を取り出した。

「俺とアルバートの死因、ひき逃げだよな。それをやつた犯人が同じ人間、もしくは同じ思想で動いていた人間達つて仮定しよう。俺が死んだ場合、高山家でメシを作れる人間がいなくなる。アルバートが死んだ場合、部隊の資金が動かせなくなるんだよな？」

「ああ、あいつらに貯蓄なんてものはないからな。同じようにメシが食えなくなつたはずだ」

恭介がメモ用紙にさらさらと何かを記入する。

「うちは、それで涼が飯を作つてアンプが食して死んだ。そしてそつちは、」

「金のないエミリオがマーシャの飯を食つて死んだ……」

「さらに、こつちは誰かが涼に俺が轢かれた事実を教えてショック死させた」

「マーシャは謎の請求書が大量に来たショックで死んだ。恐らく俺

が死んだ事で溜まつたツケだらう。……てことは、まさか
恭介が頷く。

「Jの出来事が、誰かの思惑通りに動いていたとしてもおかしくはないんだ」

「へ？ へ？」

涼が一人で首を傾げていた。恭介が分かりやすく説明する。

「俺が死んだら飯が食えなくてアンプが死んだ。お前は俺が死んだショックで死んだだろ？ アルバートが死ぬと、金が動かせなくてエミリオが飯を食えずに死んだ。マーシャはその後の請求書でショック死。俺とアルバートが死んでから、ドミノ倒しのように皆が死んだ。これを狙っていた奴、もしくは奴らが居るのかも、って事。そして、スーツの奴が今のとこ一番怪しい」

「そんなことができるのか？」

「ありえない事はありえない。 そういうことだと思つ」

兎にも角にも作者連中が情報を掴むまで指を咥えて待つてゐるわけには行かない。今のところはスーツの男を捜す事にしよう。

「お前、よくそんな仮説を立てられるな」

「昔から本だけは読んでたからさ、伏線の予想はよくやるんだ」

恭介はそう言つて苦笑した。

「で、銃剣の訓練か」

アルバートは腰から抜いたM9銃剣をSG552に装着する。チャキッと金属同士が噛み合つ音がした。

「元々銃剣は、単発式先込銃を持つ兵士が再装填の際、騎兵の突撃に反撃できるように装着したものだ。つまり、長い銃ほど槍のよう扱え、地面から効率的に馬上の騎士を貫けるというわけだ」

「ところが、と人差し指を立てる。

「塹壕や市街地戦、ジャングル等の戦闘が増えるに従つて、接近戦に有利なようにライフルを短縮化し始めた。強力な銃弾を遠距離で飛ばし合うのではなく、接近戦で反動の低い弾をばらまく戦い方が

主流になつてきただ。良い例が第一次世界大戦から登場したサブマシンガンだな。第二次からはナチス・ドイツのStg44、アサルトライフルの走りが登場した。ベトナム戦争の時には米軍もM16ライフルを短縮した物を特殊部隊に提供していた。ただこれらの短い銃を使う場合、槍として扱う銃剣のメリットは落ちてしまう。だが俺は、短縮した得物ほど着剣するメリットは高いと俺は考へている

「どういう事だ？」

「近年トレンドの、『UQB』だ」

I—I C Q B …… C l o s e Q u a r t e r s B a t t l e (閉鎖空間における戦闘)。武装勢力が建物内に人質を取る事件が多発する中で編み出された戦闘方法だ。室内という狭い環境内でいかに素早く制圧を行うかに特化されたライフル、ハンドガンそして徒手格闘の扱い。彼ら民間特殊部隊D e m o n i c P i g e o n sは正に専門家だろ？。

「刃物は銃に間合いこそ劣るもの、圧倒的なアドヴァンテージがある」

それは攻撃範囲だ、とアルバートは続ける。

「銃弾はその口径の範囲のみ高い殺傷能力を有する。広くてせいぜい直径1cm程。だがナイフを始めとする刃物を使えば」

ビュッ！

着剣した銃を真横に振り抜く。

「より広範囲に攻撃ができるんだ。つまり、銃剣の間合いになれば銃よりもこちらが有利という事。剣での戦闘もまだ廃れたわけじゃないというのが、俺の意見だ。槍としてのみ使うだけではなく、銃全体を武器として扱う。これにより只ナイフを持つよりも攻撃にバリエーションが生まれる。というわけで、早速始めるか

「……始めるつて、何を？」

「訓練がしたいんだろ？」

「ヤリと笑うアルバート。何だろう、イヤな予感がする。

「どうからでも来い」

「どうからでもって、これ真剣なんだぞ？ 危なくないか？」

「だからプロテクターを付けているんだろ？」

的を取つ払つたシューティングレンジの中央に、俺とアルバートは互いに刃先を突きつけ対峙する。剣道の防具を3割増にしたようなアーマーを体中に着ているが、これ本当に大丈夫なんだろうな？ ほんとに、いいのか？ これで。

「安心しろ、銃持つただけの高校1年生に負けるよ」 俺とアルバートは務まらん。お前」とき、大した相手じゃないしな」 無性にムカつく言い方されてるけど、慎重に行かないと。

「頑張つてねー」

涼の声が届く。アルバートがニヤッと笑つた。

「ほら、彼女が応援してるぞ？ 格好悪いところを見せられないな、彼氏としては」

作戦変更。速やかに鎮圧、場合によつては殺傷も可。

「だから違つて言つたろ！？」

間合いを一気に詰めて右の銃剣を振り上げる。逆手に握つた銃剣が風を切る音がした。

「やる気になつたか？ だが動きが直線的過ぎる」

アルバートに体を僅かに逸らしただけでかわされた。がら空きの脇に拳を叩き込まれる。

「これで1回死んだ」

とん、と体がよろめく。とりあえず距離を取つて体勢を立て直した。

「お前の銃剣は逆手、1撃1撃を確実に当てないと反撃されたときに防ぎようがない。リーチはせいぜい30cmだから相当踏み込まないといけないし、かなり変則的な動きを要求される取り扱いが難しい武器だ」

と、余裕で解説するアルバート。

「逆にアルバートの銃剣は間合いが長い分、懷に入り込まれると振

り回しづらい。違つか？」

「その通り。よく分かつてゐるじゃないか」

「仲間に同じような武器を使つてゐる奴がいるんだ。槍に似てるやつ。アルバートの弱点は懐。何とかそこまで入り込まないと勝機はない。ここは、とつさの思いつきだけやってみるしかなさそうだ。」

「再開だ、恭介」

走り出し、さつきと同じように右で斬り上げる。アルバートが首を傾げながら軽くかわした。

「聞いてなかつたのか？」

「聞いてたよ。その上でつ！」

体を左に反転。脇腹に迫る拳を左の銃剣で防ぎ、右の銃剣を右から左へ振りぬく。刃がアルバートの眼前を掠めた。浅かつたか！

「今のはやるじゃないか」

「お褒め頂光栄の至りだ」

今度はアルバートが距離を取る。

「次はこちらからだ」

低く構えた刃が地面を舐めるように迫つてきた。突きか！

「あつぶね！」

とつさに左の銃剣で弾く。しかし彼の動きは止まらなかつた。右ひざが鳩尾に入る。いくらボディアーマーしてゐるとは言つても結構痛いんですけど……。

「だ、大丈夫？」

涼が心配そうに立ち上がる。何とか頷くと俺は立ち上がつた。

「蹴りとか、アリですか……」

「戦い方にアリもナシもない。生きてゐる奴が勝者だ。それと、銃剣で攻撃を防ごうとするな。刃が痛むし、状況にもよるが大抵はかわした方が次の行動に移りやすい」

やっぱ、そこら辺は戦場を生きてきた人間なんだな。一緒にメシ食つたりしてたせいで失念してた。

「今日は最後まで付き合つてもらうからな、アルバート」

「お前が強くなるのはこっちとしても嬉しい事だ」「つして朝の時間が過ぎていく。

「（こ）れ、何やつてんだ？」

「（銃剣の訓練だつて。きょうすけが）」

「（おおアンプか。マーシャは？）」

「（起きないからそのまま）」

「（だらうな、あの眠り姫は）」

後ろからスペイン語が聞こえる。ミコオとアンプか。

「せつ！」

何回目になるかも分からない恭介の斬撃をかわす。俺達が訓練を始めてから2時間が経過しようとしていた。

にしてもこいつ、上手くなるのが速すぎないか？ 今のはかなり危なかつたぞ？

「また外した……次こ）せつ！」

いよいよ動きが読めなくなってきたな……。そういうれば聞きたい事がある。

「お前、なんで、涼に、指導を、頼まないんだ？」

体を左右に振つて刃をかわしながら尋ねる。答えはすぐに返つてきた。

「あいつ、いつもは、あれだけ、刃物握ると、めちゃくちゃ、強いんだ。だから、銃剣、だけじゃ、レベルが、高すぎて、練習に、ならない、つと」

左から来た銃剣を後ろに仰け反つて避ける。一旦後ろに下がり呼吸を整えて恭介が続けた。

「俺の異能は銃にだけ有効だから、銃剣は効果がないんだよね。そろそろ休憩する？」

「疲れたのか？」

「いや、まだいけるけどさ」

「だつたら続けるぞ」

夜まではまだ時間がある。今のうちにやれる事をやっておかなければ。

「おなか空いたー」

涼が呟いた。恭介がそちらを見ずに答える。

「分かつた分かつた。後でチャーハン作つてやるから、今は我慢してけ」

「ほんとに?」

「こんな事で嘘ついたつてしょうがないだろ? や……って」

俺の突きをバックステップでかわす恭介。そこへ追撃に斬り上げた。しかし、それも首を上に逸らして避けられた。

「チャーハン? 何だそれは?」

「アイツの好物なんだよ。昔から、せがまれば作つててさ」

「そうか、確かにここにはキッチンもあるから後でマーシャに案内してもらえ」

恭介の右の銃剣が突き出される。手首を掴んで逸らし、そのまま捻り上げた。その腕から銃が落ちる。彼が膝をついた。

「痛い痛い痛い! アルバート! ギブギブ!」

解放すると、手首を擦りながら立ち上がる。その目に少し涙が溜まつていた。少し力を入れすぎたか?

「いけると思つたんだけどな……やっぱ敵わないや」

「当たり前だ。戦闘の技術つていうのは一朝一夕に身につくものじゃない」

再び間合いを取り対峙する。

「よし、これで最後だ。メシの時間もあるしな」

「よつしゃ、来い!」

下から風音を上げて迫る刃。フロイントだ。腰を軽く捻つて回避して、本命の左手を弾く。だが弾かれた反動を利用して、陽動としていた右手を突き出される。ライフルのレシーバーで防ぎ、牽制のローキック。恭介は飛び退き、またもや距離が離れる。

「……なかなか技のバリエーションが増えたじゃないか。変則的な

行動は相手のミスを誘う

「なかなかミスしてくれないじゃんか」

「バレバレだ。もつとダイナミックに攻撃を仕掛けなきゃならない」俺は空中にSG552を放り投げる。驚きに見開かれた恭介の目は明らかに（武器を捨てるなんて……）と語っている。俺は勝ちを確信した。

落ちてきた愛銃を、俺は思い切り彼に向かって蹴り込む（……）。同時にダッシュ。恭介が飛んでくるライフルを避けるために屈む。行動に思考がついて行つていかない良い例だ。

宙を飛ぶ武器のハンドガードを握り、予め与えた加速に遠心力をつける。恭介が武器を向けたその時には、折りたたみ式ストックがまるで斧のように、彼のヘルメットを真上から強打していた。

「頭蓋骨陥没、脳内出血で死亡だ」

「……痛つてえー！」

「『変則的な行動は相手のミスを誘う』。分かつただろ？」「身をもって理解したよ……」

延長したバレルからM9銃剣を抜き取り鞘に戻す。蹴飛ばして殴つたぐらいでは、このイス製のタフなライフルに影響は無い。

「さて、腹が減つては戦は出来ないからな。メシだ。マーシャを起¹にして元²に！」

「何だよこれ……」

食堂のドアを開けると、寝巻き姿のマーシャが紅茶とスコーンを用意してティータイムを楽しんでいた。いや、楽しんでいたとは語弊があるかもしれない。

「寝てる……よな？」

「寝てる……ね……？」

「…………」

寝ながら紅茶を入れて飲んでるってのか？ うん、目を閉じてるし

……寝息立ててるし……

「長年の習慣が、軀に染み着いているんだろうな。恐ろしい女だよ

……」

横にいたアルバートが呟いた。イギリス人がみんなこうで無いことを切に願うよ。

このままじゃ昼に遅れる。とりあえず彼女を起さることにした。

「もしもし？ もう昼だけど」

俺が彼女の肩へ手を伸ばした時。

「危ないっ！」

気がついたら涼がグルカナイフを峰打ちで振り下ろしていた。

ガツ！ と音がして地面に転がったのはマーシャの拳銃 C Z 7

5 S P - 0 1。

何があつたのかを認識する前に、彼女はフォールディングナイフを抜いて俺に襲いかかってきた。何だってんだ！？

「うわ！」

とつさに身を翻してかわす。前髪が少し切れたらしい、目の前を舞つていった。

「 Z Z Z Z Z . . .

大きく体制を崩したマーシャが振り返りながらナイフを振った。すばん！ と花瓶にささっていた花が床に落ちる。……おいおい勘弁してくれよ、今は防具着けてないんだぞ？

「どーすりやいいんだ？ こういうときは」

アルバートに尋ねる。彼は腕を組んで答えた。

「いくつかあるが、一番手っ取り早いのはあいつを倒す事。一番目は時間が経過するのを待つ。最後はお前が殺される、だな

「ちなみに、時間はどれくらい？」

「最短で5時間だ」

はあ、やるしかないのか。

「勝てばいいんだな？ 攻撃は寸止め？」

「ああ、止めは刺さなくていい」

俺は双銃を構える。その横に涼が立とうとするのを眼で制した。

「やばくなるまで手を出さないでくれ。これが今日の課題らしいか

ら

「だけど……」

「頼む」

「……分かった。でも、ほんとに危くなつたらわたしも入るからね

しばらくして、涼は渋々グルカナイフを下ろした。

「ありがとな」

「どうせ言つたつて聞かないんでしょ。 マーシャさん、構えを見ただけで分かるけどかなり強いみたい。気をつけて」

その言葉に頷くと俺はマーシャに眼を向ける。構えはどの攻撃からでも対応できる中段。

「……くう

彼女が突然間合いを詰めてきた。横薙ぎに刃が振られる。クソッ、何て速さだ！ インストール狂制御 状態の俺と同レベルじゃねーか？

「だけど、浅い！」

間合いがアルバートと違つて短い。お陰で回避に移れる時間が長かつた。それを食堂の中央に設置された長テーブルの天板を転がつて避ける。その上から容赦なくナイフが振り下ろされた。刃渡り10センチほどのフォールディングナイフが天板に突き刺さり耳元で、ガツ！ という音が聞こえる。なんていうか、狂戦士バーサーカーって奴？

「なんとか反撃に回らないと……後手になつてるな」

とりあえず、牽制で近くのイスを一脚投げてみた。

「……すう

真っ二つ。二つになつたイス（だつたもの）が左右に飛んでつた。

この人直死の魔眼でも持つてんじやねーのか！？ 吸血鬼程度さく

つと殺しそうだぞ！？ いいのか？ これで！？

「寝ている状態のそいつは化物だ。並の人間なら即死だな

「つまり、想 真心状態つてか」

アルバートと涼が首を傾げる。分かるのは俺だけか……少し悲しい。

「……ぐう

「どうやらマーシャはナイフが抜けなくなつたらしい。これはもしかして？」

「もうつたあ！」

（多少の罪悪感は感じつつ）腕を蹴り飛ばして長テーブルを飛び越える。後ろによろめく彼女の背中に回り、組み伏せようとした。

「その程度でやられるような人間はうちの部隊にはいない」

アルバートの言葉と同時に、俺の手から銃が消える。一瞬の事で分からなかつたが、どうやら手首に食らつた手刀で弾き飛ばされたらしい。膝を突く俺の遙か後ろで銃剣が床に突き刺さつた。あれの回収は無理か。

「なるほど……武器はナイフだけって訳じゃないんだよな」

しかも今までの動きは全て片手でやつていたらしく、もう片方の手には刺さつていたナイフが握られていた。

「恭君、もう！」

涼がグルカナイフを構える。俺は溜息をついて頷くと言つた。

「ああ、分かつた。お前を一回だけ頼る。だから、そこにある掃除用のデッキブラシ取つてくれ」

「へ？ ぶらし？」

もう一度頷く。少ししてこちらに飛んで来たデッキブラシを掴んだ。ちょっと軽いけど長さはこれくらいだつたつけな。

それでマーシャの腕を弾いて一回下がる。距離は5歩分。

「恭君、それって……」

デッキブラシをバトンのようにクルクル回してから下段に構える。かつて、将の家がやつている槍術の道場に通つていたときに習つた構えだ。

「俺だつて武器が銃だけつて訳じやないんだ」

まあ、そんな見栄を張つたところで俺が槍術を習つてたのつて2年くらいだし、デッキブラシじや相手の攻撃受け止めたところで真つ二つなんだけど……。だから、

「先手必勝！」

「デッキブラシを前に突き出す。

当然のようじジャンプでかわされた。

横から柄で叩く。

右腕でブロック。このときマーシャが着地。上にから振り下ろす。

横に転がって避けられた。

追い討ちで下段で左に振る。打撃こそ当たりはしなかつたが、ブラシのTの字にとこに襟首が引っかかった。

ラツキ！ そのままテーブルまで引きずつて、

「これでつ、終わりだ！」

角に頭が当たるか当たらぬかの所で寸止め。しかし勢いまでは殺しきれなかつたのか、彼女の首が絞まつて変な声が漏れた。しばらくして呻くような英語が聞こえてくる。

「（どうじこんなところで寝てたのかしら？ 襟にブラシが引っかかつているし、ねえアル……あら？ キョウスケ？）」「どうやらマーシャは無事に眼を覚ましたようだ。……疲れた、一度とやりたくなー。」

「寝起きで悪いんだけど、キッチンどこかな。昼飯作りたいんだけど」

「（……ああ、もうそんな時間なのね。分かったわ、こつちよ）」

アルバートの通訳を聞いた彼女が頷く。後は材料が揃つてれば良いけど。

「（お疲れ様、アルバート）」

カウンター式のテーブルに着いて一息ついていると、横からアンプが声を掛けてきた。俺の右隣の席にちょっと座り、足を振りながらこちらを見る。

「（疲れた？）」

「（いや、そうでもない。）あらも鍛えられるしな）」

「（そう、ならいい）」

それだけ言つと、彼女はカウンターの奥でフライパンを振る恭介に眼を向けた。

「（きょうすけ、楽しそうだった）」「（楽しそう？）」

俺が尋ねるとアンプは恭介を見たまま頷いた。

「（きょうすけの両親は、きょうすけが中学生のときに海外に行つちゃつたから……たぶん年上に思いつ切り全力を出せる機会がなかつたせいだと思つ）」「（なるほど、それでの料理の腕か。涼は飯が作れないらしいし、あいつが作つてるんだろ？）

彼女は眉間にしわを寄せて言つ。

「（死んだときのこと思い出させないで。ほんとに不味かつたんだから）」

「（すまん、そうだつたな）」「（よお、一人でなに話してんだ？）」

いつの間にやら左隣にHミリオが座つていた。

「（ああ、たいした事じやない。それよりお前達、訓練の途中から姿が見えなかつたが何をしていたんだ？）

「（ん~？ イイ事）」「（エミリオ、お前まさかッ）」

俺が問いただそうとする前に、Hミリオが手を着いていたテーブルに9mmバラベラムがめり込んでいた。見ると、恭介がルシフェルを握つて立つていて。その姿は、まるでその銃の名の通り墮天使だつた。

「I dare you to say that again .

（もう一回言つてみる）

「待て恭介！ なんかお前英語喋つちやつてるぞ！」
これ、キャラクターの設定としてかなりやばいんじゃないだろうか。
しかもこいつ、若干目が紅くなつていていたような……？

「べつになにもしてない。ただ書庫で調べ物のてつだいをしてもらつただけ」

アンプが日本語で答える。しばらく考えた後、彼は銃を下ろした。
「何だ〜ちゃんと言つてくれないと、勘違いしちゃうじゃんか〜」
笑顔でフライパンの前に戻る。しかしその背中からは、「次ふざけ
たら……どうなるか分かるよな?」みたいな殺氣が放たれていた。
「遅くなつちゃつた〜ってあれ? エミリオさん、どしたの?」
後から来た涼が俺に抱きついたままのエミリオを見て首を傾げる。
しばらく考えて、

「あ〜、そういう趣味の人なんだつ!」

「(違うー。)」

エミリオが声を上げた。こうして毎の時間は過ぎていく。

第5話・A n o t h e r ' s .

夜。皆で情報収集のために動き出した。

「 ？ 」 といふことで、しばらく出歩く事になつたのだ。

そんなわけで俺達は夜の大通りを歩いていた。もちろん各自武器は構えている。

その頭上には紅の月が輝いていた。アルバートが見上げて呟く。

「 赤い月か……不吉だな」

全くだ。先程から道に影は見えない。呻き声一つしない、俺達の足音だけが響く世界。不気味にもほどがあるよ、これ。

「 ！」

突然アンプが立ち止まる。何か感じたようだ。

「 ん、どうしたアンプ。敵か？」

「 し。なにか聞こえる」

俺が尋ねると人差し指を口に当てて耳を澄ませた。しかし、よく聞き取れないようだ。

「 だめ、もつとちかづかないと」

さつき以上に警戒を強めながら、さらに前に進む。5分ほどしてなんか聞こえてきたぞ。つーかさつきからアンプの顔が若干うんざりした様に見えるのは気のせいか？

『 うー わぎうわぎ、なー にみてはー ねるつ、じゅー ジやのおつき さー まみてはー ねるつ 』

歌か？ それと何かを打ち付ける様な音も聞こえる。

「 あれ、人か？」

アルバートが呟く。そう言われてみると、2人の人間が見えた。しかも片方は見覚えがある。

「 お前ら、何やつてんだよ……」

そう、俺達の作者。逆逆とXナンバーだった。何で公道のど真ん中

で歌つてんだわ！」しかも杵と臼で餅つきながら、ちなみに逆逆がこねる係りで、Xナンバーがつく係りのようだ。どうでもいいけど。つていうか何だよその頭につけたウサミミは……ちなみに逆逆が垂れ耳で、Xナンバーが立ち耳だ。本当にどうでもいいけど。

「やあ高山君。見て分からいか？ 餅つきだ餅つき。こんなに良い月が見えたのでな、我々の餅つき職人としての魂が揺さぶられたんだゾ！」

「はいはい、んでなにしてんだお前ら」

「……対応ちべてつ」

Xナンバーが小声で言った。

「それはそうと、餅食べる？？」

「！」の前に言つた、この世界について調べるつてのはどうしたんだ？

逆逆が差し出したいろいろんな種類の餅が乗つたお盆を無視してアルバートが尋ねる。二人は仲良く首を傾げると同時に答えた。

『僕チンよく分かんない。最近記憶がとび氣味なの』

『死ね』

俺とアルバートが同時にその首を締め上げた。

『えいめん！』

「どこの神父だお前等！」

二人はほぼ同時にアツチの世界に旅立つたようだ。たぶん「永眠」と掛けたんだろう。面白くない。

「あつ、これおいしく」

「食うなよ！」

涼達はお盆から餅を取り出して口に運んでいる。

「おい恭介、このヨモギ旨いぞ。冷めない内に食え」

「アルバート、あんただけは信じたのにっ！ つて本当に眞いな！」

結局みんなでお餅を道端でおぼる事になつた。実は夜が早く来たので、夕食を食べていなかつたんだ。この餅をついた人間は道端で

伸びてるけど、まあいいや。考えると食べ物がマズくなる。

「勝手に無視するなっ！」

チツ、まだ生きてやがった。

「凄い生命力だな……お前等「キブリかよ

『？ ウサギだよ？』

二人して余った餅を食べながら、日の周りを「イナバ！ イナバ！」とか叫びながらぴょんぴょん跳ねている。きっとコレがやりたかっただけなんだろうな。なんかもう面倒くさい奴らだ。

しかし彼らはぴたりと動きを止めると、耳をピョコピョコと動かした。それ動くのかよ……

「おいウサギ壹号、何か不穏な音を感じるねえ」

「そうだねえウサギ貳号。特にあのビルの陰が怪しいねえ」

「……きょうすけ、なにかいる」

各々が武器を構えて警戒する中、一匹（？）は杵を手にビルに突撃していった。

『こんばつぱー！ つかぢやんだよっ！』

返事は耳をつんざくような声だった。2mほどの鱗に覆われたボディに、鉤爪のついた4本の手。人のような形をした頭からは、妖しく光る牙が一対生えている。正に異形だった。

「そうだ、餅たべる？」

Xナンバーがお盆を出すが、返事は爪の一突きだった。餅よりも肉が食いたいらしいな。

「わおっ、攻撃的っ！ だつたらこっちも！ てぬっ！」

逆逆が杵を振り下ろすが、一気に間合いを開けられる。杵はアスファルトに当たって鈍い音を立てた。

「ばーか、近距離でつっこむとでも思ったのかい！？」

作者陣は背負つたライフルで遠距離から容赦ない攻撃を加える。M1873と……FN Cか？ 5.56mmと44-40が降り注ぎ、化物はたまらず膝をつく。ライフルの弾が切れると拳銃を引き抜く。シングル・アクション・アーミーとCNC75初期型。・45と9mm

mの雨あられを受け、よつやく敵は沈黙した。

「何だよアイツ……ゾンビじゃない？」

「新手だね。だけど一つ言える事がある」

俺の言葉にXナンバーは指を一本立てる。

「あの程度のスペカもかわせないなんて、大したこと無い敵だとう事だ」

「いやスペカって何だスペカって」

「（今までの野郎とは違つて俊敏で、防護力も高かつたな。やつこさんも上級になつたつて事か……）」

「（アレがゾンビのよう沢山出でくれば……苦戦するわね）」

エミリオとマーシャが呟いた。全くだ。だけど、これは……

「ナイトウォーカー！？」

「だね」

俺達の世界に時折現れる化物にそつくりだった。それも、これはかなりの上位種だ。

「知つている敵か？」

アルバートがこちらを向く。

「俺達が戦つてゐる連中だ。おい、逆逆。これは一体……」

尋ねた先に逆逆は居なかつた。その向こうにある道路の角を見つめて固まつてゐる。

「どう、したんだ？」

「ああ、あつちのほうに……キヤワワイおこやのこの気配がするんだZEE！」

「マジで！？ じいじい？」

Xナンバーが風のよくな速さで飛んでいた。先程まで視線を向けていた道路を曲がり、直後 化け物の叫び声と銃声が響く。

「何だよ今度は！」

まさか、他にも人が居たつてのか？ 次は誰だ！？

「おにやのこ確保～！」

どうやらこいつ等、頭はアレなくせして戦闘技術はかなり高いらし

い。一人の少女の手を引いて帰ってきた。

「おや、君は……」

逆逆が意外そうな声を上げた。涼は少し驚いているが嬉しさを隠しきれないようだ。アンプは首をかしげている。そりやそうか、こいつは、彼女の存在を知らない。

「何者だ、お前」

アルバート含め、部隊の皆は警戒を緩めない。

「

俺か？ 何も言えなかつた。だつてそつじやないか、何でこいつがここに居るんだ。何で、どうして

「どうして恭子がここに居る……？」

そつ、居るはずがない。だつて、彼女は……俺なのだから。

とりあえずその場から移動する事にした俺達は、とあるファミリーレストランに居た。先ほどXナンバーがつれてきた少女、名前を恭子といふらしい。彼女は今、涼の隣で体を縮めていた。無理もない、あんな化物に襲われた挙句に、こんな不得体の知れない武装集団に囲まれているのだから。

にしても、さつきの恭介の取り乱しは何だつたのだろうか？ まるで幽霊でも見たようじやないか。

「（エミリオ、女性を前にして声を掛けないなんざ珍しいな。どうしたんだ？）

「（違うんだ）」

エミリオは首を振る。

「（彼女は『彼女』じゃあ無い）」

「（何よソレ。あの子が男だとでも）」

「（そのまさかだ。オレには分かる）」

マーシャの言葉に頷く。彼のセリフは信じられなかつた。目の前に

いる恭子は中々美形で、だれもが女性だと確信を持つて断言できるだろう。だが数多く女を口説いて回っているエミリオの事だ。信用に値するデータである事は間違いない。

「（自分から言い出すまで待つた方が良いと思う。彼女　彼女と呼ぼう　が伏せておきたい事実という可能性もあるしな）」逆逆が自分のライフルを持つてこちらのテーブルに走つてくる。ドリンクバーから飲み物を頂戴してきたらしい。

「敵はここにはいないみたいだね。ほれ高山君、コーラだ」

「あんたにしては気が利くな……って苦甘つー？」

「ふつふつふ……それはコーラとコーヒーを1・1の割合で混合しているか「ぐべらつ！」

恭介のチョップが延髄に入ったのか、へなへなと床に崩れ落ちる逆逆。

「　クスッ」

彼女の固い表情が一瞬崩れる。良い間の取り方が出来た。周りの空気が少し和らぐ。しかし、恭介の目は厳しい。恭子を睨んだまま動かなかつた。

「どうしたの？　きょうすけ」

アンプが心配そうに彼の顔を覗き込む。恭介は目を伏せると、席を立つた。そのままドリンクバーで水を汲んで口をすすぐ。無口な彼の表情はどこか思案しているようにも、怯えているようにも見えた。

「アンプの言うとおり変だね、恭君らしくない」

涼も恭子の肩を抱きながら頷く。しばらくして、恭介は有無を言わせぬ口調で言つた。

「悪いんだけど、恭子はトイレにでも行つて席を外してくれるか。皆に言つておきたい」とある

「話つて何だ？」

恭子が居なくなつた店内で恭介はテーブルに手を着いた。

「恭子の事なんだけど……あんまり信用しないでほしい」

「えりして、恭子さんはわたしの友達だよ。」

「分かってる。だとしても、俺はあいつを信用すべきじゃないと思

うんだ

（あの子が敵かもしれないって事？）

「ナニコトナリ?」
恭介は涼の方を見ていた。額かない。

そんなわけないよ！ だって、たぶん、恭子さんはわたしの恩人で、反対なんぢよ？ そんな人があんまり化物の味方などいぢる！

方達がいた。そんな人がおんな仕物の営刀がノブなし涼が声を止めた。しかし藤介は続ける。

「俺の考へでは、十中八九あいつは敵だ

「どうしてそんな事言うの！？」

「それは言えないけど……でも本当だ。俺には分かる

「恭君に分かつたつてわたし가納得できない！ そんなカンタンに

わたしの友達を敵扱いしないで！」

ついに涼は立ち上がってしまった。俺含め全員が面食らう中、一方

の恭介は落ち着いた様子で言つた。

「頼む、話を聞いてくれ。理由は言えないけど、あいつは信用でき

用心に越した事ないのは分かるだろ？」

わからんない！ わからんないよ！ ぜうしてそんな事誰の！？

恭子さんは敵なんかじゃなし！」

そんな涼を放置して、とにかくと恭介に話を切り上げた。

あいこの前でこれからの方針や弱点やなんかを語るのは控えてほ

「同僚の間で遊んでいた時、今度はかつての顧客たちが、『

そう叫んで涼はファミリーレストランを飛び出してしまった。その

背中を恭介は眺めるだけだ。

「追いかけないのか？」

俺が尋ねると彼は少し俯いて弱弱しく笑つた。

「少ししたら頭も冷えて帰つてくるよ。アイツはいつつもそうなん

だ

1ドリンクを飲み始めた。どうやら味が分かっていないらしい。

「（どうなんだアンプ、いつもこんな感じなのか？）」

「（わたしが一人と一緒に暮らしてまだ日は浅いけど、喧嘩なんかした事ない。いつもきょうすけは、すずと意見がぶつかっても最後には曲げるから）」

隣のアンプに尋ねてみると、彼女は少し戸惑つたような顔になつた。そして、「トイレ」と言つて歩き去つていく。

「（だるーな。見てみるよ、あいつの手。テーブルの下でよく見えないけど、かなりイライラしてるみたいだぜ）」

見てみるとエミリオの言つとおり、彼の指は手の甲をつねつたり絡めたり、せわしなく動き回つてゐる。まるで自分を必死に落ち着かせようとしているみたいだ。

「（ねえキョウスケ。どうしてキョウコが信用できないのか教えてくれないかしら）」

「ごめんマー・シャ。今は言えないんだ」

困つたように笑つて、再びドリンクを飲む。相変わらず指は忙しく動き回つていた。

「ねえ……きょうすけ」

トイレから戻つたらしいアンプが少し青い顔になつて戻つてきた。どうしたのだろう。

「何だ？ 急ぎじゃないなら、後にしてくれないか？ 考え事してるんだ」

「あの……きょうこが居ない」

恭介が眼を見開いて立ち上がる。ガタン、と音がしてコップが倒れた。ドリンクがテーブルに広がる。

「な

「（マジか！？ もしキョウコが敵だったとしたら…）」

「恭介！ 行く、ぞ……」

俺が振り返つたときにはもう、恭介はいなかつた。

夜明けまでまだ時間がある。俺は夜の街を走り続けていた。

（俺のせいだ……俺がちゃんと説明しなかつたから……）

当てはいいけど、涼がどこに行つたのかは分からぬいけど捜すしかない。

「狂制御^{インストール}、開始^{スタート}！」

頭に小さな痛みが走り、俺の双眸は紅く狂氣を宿した。この世界にも、狂氣は流れていたようだ。俺の目が涼の移動したルートを観る。あとはそれを追うだけだ。

「涼！ どこだ！」

この辺りに、あいつの気配を強く感じる。もつすぐだ。角を曲がるところのゾンビが襲い掛かってくる。俺は舌打ちして銃を向けた。

「お前らに構つてる暇はない！」

2秒で殲滅。正面に眼を向けると、金属がぶつかる音とそれで生まれた火花が見えた。涼だ。

「涼！」

俺が叫ぶとアイツが振り返った。かなり息が切れてる。普通の状態じゃねーぞ？

「ごめんね、恭君の、言つとおりだつたよ……」

彼女と対峙する影、それは果たして恭子だつた。

「涼！ 頭下げてろ！」

9mm弾をフルオートで恭子に撃ち込むが、彼女は面倒くさげに軀を捻つて回避する。

手に握っているのは二丁の拳銃。先には細身の銃剣が装着されている。涼とぶつけ合つていたのはコレだろ。う。

得物を一閃すると、ダッシュして同時に鋭い三連射。だが、狂制御状態において、その攻撃を避ける事は容易い。

射線をギリギリの所まで引きつけて避け、9mmルガーを撃ち込む。

無限の長さを持つ剣として銃と対峙すれば、その斬撃を避ける事は容易い。

「お前、俺達に何の用だ！」

「答える義務も必要もねーよ」

『恭子』は俺と全く同じ声で、冷淡な返答を返す。

「只、お前達の肉体が必要なだけだ」

左手で突き出される銃剣を、腰の動作で回避。懷に入つて剣を突き立てようとするが間合いを開かれる。

「俺の肉体が、何の意味を持つっていうんだよ！」

脇を見ると、涼が脇腹を押されて……クソッ、やっぱり出血してやがる！

「人間のカラダは多くを語るからな。ひはつ、まあサンプルは取れた」

彼女は赤い液体

涼の血か…… 小瓶をこちらにかざす。

「後は俺が直接手を下す事もねーか。後片付けは他がやる」

パチン！ と指を鳴らす恭子。その音とほぼ同時に、無数と言つて良い程のゾンビとナイトウォーカーが現れ、周りを包囲される。

「肉骨片が残つていれば良い。んじゃ、制圧」

踵を返しその場を歩き去る彼女。俺は銃弾を撃ち込むが、射線上にゾンビが重なり盾となる。

「畜生っ！」

「…………恭君…………」

へたり込んでいた涼が口を開く。出血の為か顔面が白い。

「…………このまま…………終わりなのか…………な…………？」

「なに縁起でも無い事言つてるんだよ」

「サイゴになるなら……恭君に……伝えたい事が……あるの……」

「話は後で聞く……。今は黙つてろ、体力使つぞ」

涼は悲痛な表情で首を振る。

「恭君……今じゃなきゃ…………わたし……恭君の事…………」

耳をつんざくような銃声。ディーゼルエンジンと軋むタイヤの音。化け物が千切れ飛び、はね飛ばされる。開かれた視界の前には、リアクティブ・アーマーを装着した八輪装甲車、ストライカーが銃座の機銃から火をふきながらそこにいた。余る所が無い程にアニメのイラストがペイントされた装甲車の中から、次々武装した人間が現れ、化け物を殺していく。

「足を取りに行つてた。遅れですまない」

遅いぞ、アルバート！涼が負傷してるんだ、治療を！」

一門周防御陣形！上

手慣れた手つきで三人は涼の周りを囲む
ファーストエイド七頭身

「田舎で。キツウヌア、拳銃（ハンドガン）や火力が足りない。私が治療する

間、撃ち続けて）上

マーシャが運んだガンケースを蹴り開けると、一丁のアサルトライフルと大量の予備マガジンを入れたチェストリグ（腰部弾倉入れ）がそこにあつた。

ライフルを手に取ると、俺の異能が働く。

（ドイツ製のHk-33。5.56mmを30発装填可能。作動方式はローラーロッキングボルトシステム。射撃準備として、マガジンをハウジング前面に引っかけつ……）

二人とアイコンタクトを取る。

「（キヨウスケ、思いつきりかましてやれ！）」

恭介 連中は遠慮はいりない！」

防御陣の射撃は正確だつた。Hk33を完璧に使いこなしている恭

介に驚くが、恐らく彼の話した「力」のなせる業なのだろう。

俺のシグが弾切れを起こす。その場に屈み、満タンのマガジンを取り出して空弾倉をダンプポーチに入れる。

「カバー！」

恭介がこちらの分の敵をしばし相手しているのを横目に、フル装弾のマガジンを叩き込む。ボルト・リリースを押し上げて薬室に弾を送り込むと、ガシャンとボルトの音がした。

「アップ！」

三点バーストで頭を粉碎する。射撃を続けたお陰で銃身が加熱するが、ここで止めるわけにはいかない。

「（ヒミツオ！ そつちはどうだ！）」

「（百発百中だ！ スコープを覗く必要なんて無いぐらいだぜ！）」

彼の使うM24狙撃銃は連射性に劣るが、命中精度と弾丸のエネルギーは格段に優れている。弾頭にスチールコアのFMJ（被金属弾頭）を使っているからか、2・3の敵を同時に貫いている。足元には5発装弾の空マガジンがいくつも転がっており、今はボディアーマーに直接差し込んだ弾丸を一発づつ装填している。

「カバー！」

恭介が俺の動作を真似てかがみ込むので援護射撃をしてやる。

「半径3m以内に近寄るな！」

恭介は怒りの形相で怪物に弾丸を叩き込む。

「（半分の弾倉を使った！ まだ終わらないのか？！）」

マーシャが傷口に包帯を巻く。傷自体は浅いようだが、これまでの出血のお陰か涼の意識は朦朧とし始めていた。

「（終わつたわ！ 退路を開いて！）」

「よし、アンプ！ M240を使え！」

装甲車の上面にある銃座が機械音をあげて動くと、異形達をバリバリと薙ぎ倒していく。今、中からアンプがコントローラーを使い、テレビゲームのように画面に映るゾンビを射撃しているはずだ。

「（Move！）」

エミリオとマーシャが涼の服をつかんで地面を引きずる。一人は空いている方の手で拳銃を握り、牽制射を放つ。進路と退路にそれぞれ恭介と俺。機関銃で出来た屍の間をフォーマンセルで移動する。

「涼はどうなんだ？！」

「（輸血とはいかなくても輸液が必要ね。早くストライカーに戻らないと）」

その時、マーシャの背中から「バシッ」と乾いた音がした。ひっくり返る彼女。ボディアーマーに被弾したらしい。殴られたような衝撃だろう。

「（何！？ 連中も銃を持つの？？）」

俺達の目線の先には、大量のゾンビの集団がいた。彼らは今までとは違い、MP5機関短銃を腰だめで構えている。

「（Holy Shit…… 走れ！）」

次々に飛んでくる弾丸。何発も防弾プレートに受け、その痛みに片膝をつきくなるが走る、走る、走る。

「応戦するな！ 装甲車まで走れっ！」

涼を引きずつたまま、俺達は遮蔽物となる装甲めがけて疾走する。片腕で出鱈目に弾丸をばらまくが、当たつたかどうかは分からぬ。当たつた所で戦局は変わらないだろうが。

「（Xナンバー！ 彼女を奥に！）」

二人が車内のXナンバーに涼を預け、自らも乗り込む。エミリオが車内から輸液パックを見つけ、針を静脈に刺す。これで当面は安心だ。Xナンバーはウサギの耳を取り外すとピンを抜き、外に投げ捨てる。すぐに濃いピンク色の煙幕が敵の視界を遮った。

「ふたりとも、のつて！」

アンプが声を上げた瞬間、俺達はストライカーの車内に身を投げ込んだ。

「出しますよつと！」

逆逆がドライブにギアを入れると、八つのタイヤが動き出す。

「後部を開けて射撃しながら撤退しよう！」

×ナンバーが自分のライフルを取り出すと、レバーアクションで弾を吐き出す。俺達も後部スペースから得物を突き出し、追つてくるゾンビを近寄らせない。

「 いっちの援護も頼むよ、高山君！」

CZ75をフロントに開けた隙間から突き出して前方の敵を運転しながら射殺する逆逆を、恭介がライフルのフルオート射撃でサポートする。

前方、後方そして車載機銃。これだけの火力があるのにも関わらず、敵の数はいつこうに減らない。

「（榴弾を使うわ！）」

マーシャがグレネードランチャーを撃ち込み、十数の敵を一度に粉微塵にするが、まだまだ敵の追撃と射撃は終わらない。そろそろ弾も尽きてくる……

「 きじゅう、かわって」

突然、アンプが×ナンバーを押しのけて火線に入り、ルガーを構える。

「 おい、アンプ！ お前何やつてるんだよ！」

運転席から振り向く恭介。

「わたしのからは、 増幅」

彼女は引き金を引く。パンッ！ と・22LR独特の乾いた音がしたような気がしたが、それもつかの間。弾丸のエネルギーは 増幅され、ストライカーの後方直線上200メートルに存在していたモノは、全て消えた……。

さらに運転席に近寄り一発、いや一撃。射線と同軸線にあつた異形は、何も残さずに消滅した。

クリアになつた視界の、遙か遠くに見える影……

「（恭子だつ！）」

目の良いエミリオがすぐに判別する。彼がスコープを覗くと、薄ら笑いを浮かべた恭子の姿がそこについた。

既に弾が尽き、拳銃を使つていたエミリオは、M240車載機関銃

の予備弾薬箱から弾を一発抜き取り、自分のライフルに装填する。

「（アンプ、俺の感覚を 増幅 させてくれ）」

「（わかつた）」

ブローン（伏せ撃ち）体勢を取り、安定用のバイポッド（一脚）の足を立てる。アンプが隣に伏せて、彼の腕に自分の手を重ねる。

「（距離 1・28km、風向き北北西、車の揺れのサイクルを把握、気温 15℃、湿度 20%、自転周期により 0・3m/s 目測修正、ライフリングの磨耗把握、バレルの加熱把握、弾薬のパウダーによる初速不足の為 2m/s 下に調整、偏差 0、スコープのパララクス把握……）」

彼のブルーの目が地球の真理を悟ったかのように澄んだ瞬間、彼はトリガーを真っ直ぐ、ゆっくり引いた。

重い銃声と、遙か前方で散る血飛沫。

「（1st shot、目標左脚部に命中、損壊。第二射装填）」
ボルトを引き、弾丸を装填して戻し、再び射撃体勢に入る。車内のだれもがこのあり得ない距離でのあり得ない精度を持つた狙撃に注目している。逆逆もブレーキをかけ、クルマを停止させていた。

「車体停止。要素から車体の揺れを除外。2秒後に射撃する」
きつちり 2 秒過ぎた後、バレルから 7・62mm 口径の銃弾が狙つたその場所まで飛んでいく。再び遠くで上がる悲鳴。

「（2nd shot、目標右脚部に命中、損壊）」

アンプが手を離すと、エミリオはそのままパタリと床に倒れ込む。通常の何倍もの精度で狙撃をしたお陰で精神力が切れたのだろう。アンプも力を使いすぎたのか、エミリオの横で座り込んでいる。

俺は X ナンバーの隣に移動し、銃座のモニターをズームして恭子の姿を捉える。

横たわった彼女と、吹き飛ばされた足首。地面に広がる大量の血。

通常の人間ならば 5 分と持たない状況だ。だが涼をあそこまで追い込んだ彼女。この程度で殺されるとは誰も思っていなかつた。

「急いで引き返せ、逆逆。恭子を尋問するぞ」

俺がそう言つと、逆逆は「がつてんだあ！」と叫んでストライカーをバツクさせた。

奴のここまで、あと10メートル……7メートル……4メートル……。その時だつた。

「止まれ！」

恭介が叫んだ。

「どうしたんだ？ 恭介」

俺が尋ねると、彼は恭子を指差して答えた。その手は微かに震えている。

「あいつ……再生してる……」

「何だと？」

見ると、周りに広がつた大量の血痕がゆつくりとテープの逆再生のようにならぶて、奴の体の吸い込まれていた。散らばつた足首の肉片もパズルの「J」とく元の場所に収まつっていく。

ついには、完全に足が元の形に戻つてしまつた。この再生能力は人間じやない！

「ひはつ、やつてくれるじゃねーか」

立ち上がると、前に下がつた髪を振り上げて、首に手をやる。ゴキツ、つと音がして奴の首が嵌る。^{はま}こちらを睨むその眼は、片目だけだが 紅く染まつていた。

「ま、ご覧のとおり、この体は死なない。分かつたよな？」

こちらに両手を広げて尊大に説明する。そして口元に残忍な笑みを浮かべて後ろを向いた。常人離れした跳躍力で一階の窓枠に手を掛け登ると、屋根を駆けていく。その姿は、あつという間に闇の中へ消えた。

「何だつたんだ、あれは。紅い眼だと？」

俺が呟くと、恭介は無言でこちらを向いた。その双眸は、奴と同じように紅かつた。

「お前、その眼は……」

「おい逆逆。俺のほかに

狂制御

ができる奴つていたか？」

インストール

「いんや、君だけだ。他にはいない」

彼は、そうか、とだけ呟いて涼のほうを振り返った。その顔には疲労の色が浮かんでいる。

「……ごめん」

それだけ言つと、恭介は崩れ落ちるように倒れた。とつとて俺が腕で支えると、弱弱しく笑つた。

「おい、大丈夫か!?」

「悪い、このモードになると消費が激しいんだ……」

逆逆が無言で頷いて、ストライカーを武器倉庫のほうに発進させた。今は回復が最優先だ。

翌日。俺は涼が眠つているベッドの横にあるイスで目を覚ました。壁も床も純白の医務室。心なしか頭が重い。昨日は無理をしそぎたかな。

「何だつたんだ、あいつ」

その問いに答えるものは居ない。涼は重症ではないものの、今日は絶対安静だ。アンプとエミリオは精神疲労が大きいし、アルバートとマーシャは装備の点検をしなくちゃいけない。その上、あの作者共は、栄養剤として出された点滴を見るやいなや「痛いのイヤイ」
「痛いのイヤイ」
「痛いのイヤイ」
とか叫んで居なくなりやがった。俺は狂制御の副作用で、頭痛が酷い。たぶん、昼には抜けると思うんだけどな。

「守れなかつた……」

涼の寝顔を見つめながら、自分を責める。アルバートに銃剣術を教わつても、狂制御^{インストール}をして、この世界での俺は……こんなにも無力だ。自分の大切な人一人守れない。と、ドアが開いて誰か入ってきた。片言の日本語でアニソンを歌っている。この声は……

「イキノ「リタイツ、イキノ「リタイツ、マダイキテタクーナル」「

「グットモーニング、マー・シャ」

「（あら、まだ居たの？ キョウスケ）」

「えつと、イエス」

通訳が居ないから、マミコニケーションが取りにくる。俺が考える様子をしばらく眺めていたマーシャは小さく笑うと、俺の隣に座つて膝の上にノートパソコンを置いた。立ち上がった画面にソフトを1つ起動させる。これは、翻訳ソフト？

画面を横から覗き込む俺を一度見て、彼女は何かを入力した。

「ん？ 昨日はしつかり寝た？ これで筆談しようつて意味か？」

パソコンを差し出す彼女に俺が問うと、マーシャは首をかしげた。

「あ、そつか。えと、一応は、つと」

俺達は交互に文章を打つしていく。

「そう、ならいいんだけど。……心配なのね、彼女が」

「俺、守れなかつた。コイツと喧嘩して、危険な世界に1人きりにして、その拳句に怪我させた……これじゃ、保護者失格だ」

「保護者？」

「本当に、コイツとは小さな頃からの付き合いです。眼を離すと、すぐに転んで、手を切つて、頭ぶつけて……いつもどこかしら怪我してたんだ。だけど」

マーシャは無言で聞いてくれる。その沈黙がありがたかった。「こんな大怪我はした事ないんだよ。その上、元の原因がそれを一番氣をつけていたはずの俺だつたなんて……」

「それは違うと思うわ、キョウスケ」

俺は顔を上げた。彼女は微笑みながらキーを叩く。

「あなたは、スズが1番危険だと判断したから、レストランで「キヨウ」を信用するな」と言つたんでしょう？ 詳しくは知らないけれど、この子とキョウは友達だつたみたいだし。警戒を解きやすから、標的になり易いと思つた、違うかしら？」

「その通りだよ。よく分かつたな」

「だけど、どうしても分からない。何であなたはキョウウノを信用すべきじゃないと思ったの？」

「……涼の奴、田は覚まさないかな」

「昼間までは起きないと思つわ。でもなぜ？」

「俺は溜息をついて文字を打つた。

「恭子は……俺なんだ」

マーシャに、俺が女装したときに涼と鉢合わせして、再会した話をする。スゲー恥ずかしかつた。

「なるほどね、言いたくなかった訳だわ」

「頼むから誰にも言わないで……つまりこの世界には、俺が2人存在する事になるんだ」

「生き別れた兄弟って可能性は？」

「無い。俺は一人っ子だから」

「2人のキョウスケ……分からぬわね。謎は深まるばかりだわ」

「全くだ。 ありがとう、マーシャ」

「べつに、お礼を言われるような事は何もしてないわよ。ただ単に、気になる事を尋ねただけ」

「それでもさ。ところで今何時？」

「10時丁度。食事にしましょうか」

「そつか、俺はもうちょっとここに居るよ」

「分かった。だけど、何か胃に入れておきなさい、いいわね？」

「ああ、ちょっとしたら俺も行くから」

マーシャを見送って、柵にもたれて涼の顔を眺める。つと、なんかめちゃくちゃ眠くなってきたな……

「ちょっとだけ、寝るか……

再び眼を覚ますと、天井のスピーカーから正午を知らせるチャイムが鳴つた。

「2時間か……頭痛は、無いな」

ベッドを見ると涼が居なかつた。マーシャの話では昼間には眼を覚

ますつてことだつたから、もしかしたら先に行つたのかもしれない。

「……何だ？ これ」

俺の肩に毛布が掛かつていた。涼が掛けてくれたのか？

「目が覚めたんなら、起こせよな」

医務室を出て上へ登る。田指すは食堂だ。

「おかしいな」

さつきからみんなの気配がしない。食堂のドアの前に来ても音がないのはどう考へてもおかしい。

「まさか……！」

「おー！ みんな何処にいるんだ？」
ガンラックの森の中を、一丁拳銃でクリアリングしながら歩く。
不気味な程に静かだ……

カツ！

「……」

後ろに軍靴の音を感じ、転じて反撃に移りつとした時にはもう遅かつた。

「動くなつ！」

背中に突きつけられる銃口。それも二つ。

「……なんだ、高山君じゃないか」

銃を下ろす逆逆とXナンバー。逆逆はTシャツにプレート・キャリアを着けた軽装で、短縮したM4ライフルを装備している。一方Xナンバーはカウボーイ装備から第一次世界大戦のナチス・ドイツ軍装に着替え、ドラムマガジンを装着したMG42機関銃を脇に抱えていた。

「お前等、どこに行つてたんだよ……」

「ちゅーしゃがこわいっ！」

「答えになつてねえっ！ そんな事よりも、涼やアルバートが何処にいるか知らないか？」

「何処にいるかは知らないけど……」

Xナンバーは言葉を濁す。

「誰といむかはたぶん知つてゐる……と思つ」

「なんだよコレ……」

ホールの中央。そこには薙ぎ倒された棚、銃弾で穴だらけになつた壁や天井、そして異形の死体がそこかしこに広がつていた。天井には一箇所、一際大きな穴が開いている。

「ところで逆逆君。これを見てくれ」

Xナンバーは床に落ちた空薬莢の内、一つを拾い上げる。

「こいつを見てどう思う?」

「……すごく……大きいです……」

「5.56mm口径のカートリッジ?」

「あうつ、無視しないでつ……」

「そう。そして、これと、これと、これ」

7.62mm×51の薬莢、40mmグレネードのデカいケース、

45口径ピストルカートリッジ、9mmそして.357SIG……

「……もしかして、アルバート達が戦闘に巻き込まれたのか?」

22LRの薬莢が無く、必要以上の破壊が行われていない事を考へると、アンプは安全な場所に隠れているんだろう。死体には……長い刃物で切断した跡は無い。という事は涼も一緒にいる可能性がある。戦闘したのは、アルバート達Demonic Pigeonsのメンバーだけか。

「恐らくはそうだろうねえ。そして何者かが車をビルの外につけていた映像を、監視カメラから入手した。すぐにレンズを破壊されたけど、データは無事だつたよ」

そう言って、どこから取り出したのか、逆逆はテレビとビデオデッキを取り出して、そこにテープをセットした。しばらくして映像が画面に映し出される。部屋の斜め上から撮られていたものだ。

10時30分、皆が食堂に集まっている様子が記録されていた。その15分後、涼が部屋に入つてくる。無理をさせないように、さりげなくエミリオが椅子に座らせていた。軽いんだけど、やっぱりいい人なんだろうな。

そこからは、のどかな風景がずっと続く。異変が起きたのは11時だ。

「こ」の時だ。アルちゃんが何かに気付いた

×ナンバーの言つとおり、画面の中でアルバートが顔を上げた。皆に何かを伝える。マーシャが涼とアンプに何事かを言つが、涼は首を振つて拒否する。しかし、その時にもアイツの手は脇腹 傷口に当たっていた。

「無茶しやがつて……」

1人で咳く。アンプが涼の手を取つて、引きずるように掃除用具のロッカーに隠れる。その後

「敵だねえ、どう見ても」

天井を破つて、ナイトウォーカー やらゾンビやらが降つてきた。Demonic Pigeonsの皆が発砲する。カメラにノイズが走り、画面が揺れる。敵影が薄くなつた瞬間、ロッカーに隠れていた2人が部屋から脱出するのが映つた。再び降つてくる異形。その群れにアルバートたちが隠れ……

「どうやら、ここまでようだね」

映像はそこで終わつていた。監視カメラが力尽きたんだろう。

「何だよ、皆はどこに行つたんだ？ 涼とアンプは？ どこだよ！？」

逆逆の襟首に掴みかかる。詰め寄る俺に、逆逆は首を振つた。その顔は、暗い影を落としている。×ナンバーも同じだった。

「我々にも分からない。しかし、この映像が撮られてから、まだ15分しか経つていない。君なら追えるはずだ。 狂制御 インストールなら」

「こつちも色々探つてみるからさ、ではさらばだ。恭介君

2人は食堂を出て行つた。俺は目を閉じて咳く。
「狂制御 インストール、開始ツ」

俺の双眸が紅く狂氣を宿した。

「別々に行動してるのは考えこくい……アイツらの行きそつなどころ……」

アンプは、無理をさせないレベルで涼の意思を尊重するはずだ。そ

して涼、普通は真っ先に逃げるところだけ……アイツの場合は……

「まさか！」

敵の死体が転がる道を駆け戻る。医務室に続く廊下に敵影1、背中にでかい角が5本あり、太く鋭い爪が生えた丸太のような腕を振り上げて、じつに背中を向けている。その向こうにいた！

「涼ツ！ アンプッ！」

アンプは氣絶しているようだ。その小さな体を庇うように涼が両手を広げている。その顔は恐怖と苦痛に歪んでいた。目をきゅっと瞑つている 間に合ってくれよ！

狭い廊下の壁を蹴り上げ、化物の背中を飛び越える。逆さまの体勢で空中に浮かんだ俺は双銃の狙いを奴の顔面に付けて、引金を引いた。

「うちの身内に手エ出してもんじゃねえ！」

その初撃で化物は後退した。しゃがんだ状態で着地し、間髪入れずにその腕を、右の銃剣で斬り付ける。

「大丈夫か！？」

目だけを後ろに遣つて尋ねる。涼は恐々目を開けた。大丈夫みたいだな。

「恭、君……」

「怪我、無いか？」

「うんつ……」

「ならいい。こいつは俺が片付ける。だからここに居る、いいな？」

「うんつ……」

「泣くなよ。まだ終わってないんだから」

「うんつ……怪我しないでね……」

お前が言つなよ、俺はそう返して前方に視線を戻す。いつの間にやら、数は10に増えていた。叫び声を上げながら、じつに走つてくる。後ろは行き止まり。退路は無い。だけど、

「群れきやがつて……化物風情が！」

退却する気も無かつた。更に 狂氣 を取り込む。強化から狂化へ

昇華させる。

一千切れ飛べ

駆け出す。左手で背中に吊つたCANNON-HOWL 02を開、そのままの姿勢で発砲する。咆哮が轟き、異形の山が吹き飛んだ。CANNON-HOWL 02を置み、両の銃剣を構えて跳ぶ。空中で3体の首と胴体を分けた。着地と同時に、双銃をフルオートで撃つ。6体が崩れ落ちた。

「ラスト1！」

マガジンを取替え、左の銃剣を腹に突き刺して、グリップの下についたアタツチメントを捻る。銃口が切つ先と同じ方向を向いた。そのままフルオートで引き金を引く。銃弾と、衝撃で震える刃が2重でダメージを与える、目標は完全に沈黙した。

ドッ！ と倒れる化物。ギリギリ、涼とマンゴの道まだしげりへ
くつついでいられそうだ。

寄る。

「Jの状態は長く持たないから手短に話す。アルバート達を助けに行く。車庫から適当な車を使って彼らの痕跡をそのまま辿る。戦闘になるかもしれないから一人は引っ込んでいろ。いいな」

「でも

涼、俺に拘まれば歩けるだろ。行くぞ」

でも、私も役に立ちたい……

「ソレ、返してくれないかなあ？」

×ナンバーが目の前の女、いや男

紅く揺らめいていた。

「ソレが無いと困るんだよ。どれぐらい困るかっていりと、バッ

クアップを取る為にハードディスクを取りだそうとしたら、静電気で新旧どっちのディスクもお釈迦にしちゃった時ぐらい、困るんだよ～。ちなみにい～実体験です てへつ

「一度の破裂音。Xナンバーが飛び退く。恭子が右腰から銃剣の付いたM9A1拳銃を抜き、発砲したのだ。

「まあまあ。乱暴はよしましようよお～。ところでソレ、返してくれないかなあ～」

前に出る逆逆。

「ソレが無いと困るんだよう。どれぐらい困るかつていうと、（禁則事項です）中に（放送できません）してたら、誰かがちょうど（見せられないよ～）のタイミングでやってきた時ぐらい、困るんだよ～。ちなみにい～実体験かどうかはあ～、御想像にお任せしますてへつ

十三回の破裂音。逆逆が飛び退く。恭子が右手に握った銃剣の付いたM9A1拳銃を全弾、発砲したのだ。

「てめえら……ふざけてんのか！？」

「ふざけじやないよ？」

まさか、といった顔で一人は振り返る。

「「ふざけじやないよ、ウサギだよつ～ ウサミミミ装着、シャキーンつ～ それイナバ！ イナバ！」

「……こいつあ末期だな」

「全くね」

横でエミリオとマーシャが呟いた。ナチス軍人とPMCオペレーターがウサギに扮して踊っている様は、実に奇怪だ……

ここは巨大なビル。元々電気店だったみたいだが、夜の世界で店なんていふチンケなシステムは意味を成さない。

俺達は侵攻を受けた後内臓を食い潰される事も無く、どういふわけかこのビルに縛り付けられた状態でこのコントにもならない冗談をただ眺めている。命あっての物種というが、涼がコテンパンにされた所を見るに、十中八九なぶり殺すつもりなんだろうな。

「二人のお嬢さんは無事かな？」

「無事……だと良いが。恭介がなんとかしてくれてる事を祈るしかないな」

「で、アイツがわざわざ武器庫まで取りに来たのが、アレか……「そんなに重要な物なら、もつとちゃんと管理してよね……死にかけたんだから。にしても、そんなに大事な物のかしら。あのキヨウコが握ってる……」

「一本のボールペン。

「急げ！ 急げ急げっ！」

アクセル全開で運転しているキャラバンを飛ばす。本当はストライカーが良かつたんだけど、果たして逆逆の物だつたらしく車庫には無かつた。他の高機動車や装甲車は全部マニコアルで運転方法が分からなかつたので、忘れられたように停めてあつたA-Tの日本車を頂戴したというわけだ。

「恭君、道分かるの！？」

「分からぬけど、感じるんだっ！」

ブレーキで急減速して角を曲がる。後ろでガシャガシャと音を立てるケースに入った銃器。彼らが捕らわれているのなら、こちらから武器を持って行かなくてはいけない。手近な物を突っ込んだが、彼らはプロだ。使い方ぐらいは分かるだろう。

サイドミラーがぶつかってポキッと折れたが、そんな些細な事は気にしていられない。

「みんなの気配と、恭子の気配が道に残ってる！」

頼む、急げっ！ 狂化が切れる前に、仲間に何かある前にっ！

「ん……こには？」

どうやら田を覚ましたらしい、アンプが体を起こした。頭を押されて首を振る。

「大丈夫か？ 今、アルバートたちを助けに向かってるんだ」

「……きょうすけ？ 無事なの？」

「ああ。だけど、詳しい話は後だ。今はちゅうと集中しなきゃいけない」

俺の狂化はせいぜい10分が限度だ。タイムリミットは、あと1分程度。俺達は今、大通りに差し掛かっていた。もうすぐのはずだ。その時、俺の頭を激痛が走った。そのせいで大きく手元が狂う。

「くそっ！ 掴まれ！」

キャラバンは、ガードレールに激突した。どうやら、もう動かないみたいだ。同時に、俺の狂化も解除される。体を一気に疲労感が襲つた。だけど、休んでいる場合じゃない。

「涼、アルバート達がどこに居るか 把握 できるか？」
涼は頷くと、少しの間目を閉じた。そして、一軒の電気店を指差した。

「たぶん、あそこだと想つ。でもどうするの？」

「俺だけで行く。お前らは、どこか安全なところに隠れてろ」

俺がそう言つと、涼は首を横に振つた。

「わたしも行く。これ以上護つてももう訳にはいかないから」

「そんな事言つたつてお前、怪我してるだろ」

涼は上着の裾を持ち上げた。露わになつた脇腹には、傷跡も残つてない。

「どういうことだ？ だつてお前、さつきまで……」

「よく分からぬけど、もう塞がつてるの。たぶん、この世界の影響じやないかな。だからわたしも戦える」

そう言つと、キャラバンからグルカナイフを取り出した。俺の言う事を聞く気はないらしい。

「アンプ、お前は？」

アンプは首を傾げると、小さく頷いた。

「だいじょうぶ。田が覚めてから、ちょうどしがいいから

「無理すんな。キツくなつたら言えよ？」

「たぶん、いちばん疲れてるのは、きょうすけ

そうかな、とだけ答える。しかし、彼女の言つとおり俺の体は限界だった。恐らく、あと一回 狂制御^{インストール} したら、確実にぶつ倒れるだろつな。

「さて、行こう。きっと連中は最上階だ」
俺達は、そびえ立つ電気屋を見上げて頷いた。

「ね～ね～、返してよ～。私のニーソックス返してよね～」
M9A1バンバンバンッ！　トマトグシャグシャグシャ。

「無理だよXナンバー。新しいの買おうよ。僕、おなか減ったよ」
「いやだいやだいやだ～あれじやなきやダメなんだよ！　だつてあ
れは……」

「あれは？」

「おいらさんが昔、小学校の運動会で参加賞に貰つた奴なんだぞ～」
「な、なんだつて～」

「ねえアル」

「どうした、マーシャ」

「あいつらの茶番劇、いつまで見なくちゃいけないのかしらね」
「これが解けるまでつてか？　冗談じやないぜ」
「て、てめーら……人質とられてるつて分かつてんのか？　ふざけ
んのも大概にしろよッ！」

恭子が切れた。声が恭介と全く同じだ。そして、その突つ込み方も。やはり、アイツと関係があるんだろうか。

「ワ～怒つた怒つた～。怖いよ～」

「大丈夫さ、うちの主人公が助けに来てくれるヨン」

「でも、彼は僕達の事が嫌いなんでしょう？」

「そこは心配無用。だつてあの子は、ツンデレ

「じゃねーつってんだろうがッ！」

爆音と共に、アホ共の横にあつた壁が吹つ飛ぶ。恭子が腕で顔を覆

いながら、爆心地へと眼を向けた。その顔が残忍な笑みへと変わる。

「ひはつ、待つてたぜ」

「！」なら逃げ道はない。され、お前の正体も目的も、洗いざらり

吐いてもらひうぞ」

コマンドーようじくCANON - HOW - 02を肩に担いだ恭介が、壁の残骸を跨いで部屋に入ってきた。その後ろに、涼とアンプが続く。

「ほーら、言つたとおりでしょ？ でしょでしょ？」

何故か、逆逆がすごく偉そうだった。すごく腹が立つた。

「よーし、援護援護！」

逆逆とXナンバーが頭に手を伸ばしてウサミミを取り外し、根本にあるピンを引っこ抜いて投げる。部屋を満たす煙。

「つあつ！」

恭介達はとっさに腕で防御の姿勢を作るが、恭子は間に合わず視界を遮られる。

「クソつ！ 何しやがるんだつ！」

「涼！ 今のうちに救出を！」

「分かつたつ！」

ダッシュでアルバート達の元に駆け寄り、繩を切断していく涼。

「ハツ！ 逃がすかよつ！」

煙を払つた恭子が右手を振り下ろす。後ろには多数のMP5を持ったゾンビ兵士。

「ぶつ放せえ！」

拳銃弾が軽快に奏でる死の16ビート。今遠距離での反撃手段を持つているのは恭介と作者陣のみ。時間稼ぎの為に牽制射をルシフェルと十六夜で放つ。

「アルバート！ 車の中に銃がある！ そこまで退却だ！」

「分かつた！ MOVE！」

丸腰のアルバート達は涼を先頭に、走つて穴から脱出する。

「それそれえ～～～～～！」

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！ ヴアアア

×ナンバーのMG42『ヒトラーの電気ノコギリ』の音が室内に反響する。

バダダン！ バダダン！ バダダン！

隣で射撃を続ける逆逆。彼の短縮されたM4も余剩力でガバレルから吹き出して、轟音と火炎をまき散らしている。俺は2人に叫んだ。

「ゾンビは頼む！ 俺はあいつを、恭子を倒す！」

「あいあいさー！」

最後の 狂制御。頭を鋭い痛みが襲う。だけど、此うて居る暇はない。全力で駆け出した。銃剣を振り上げる。狙うは首だ。殺すつもりで行く！

「来いよ！遊んでませー！」

恭子が左の銃剣で、それを捌いた。体の勢いを下に逸らされる。俺は舌打ちすると、床に手を着いて足を振り上げた。奴の拳銃を跳ね飛ばす。こんな動き、**狂制御**^{インストール} 中じやないとできない。奴の顔が渋面に変わった。

一
せぬじきねえか。
さすがだな。

お前誰なんだよ！」

一七八

着地して、間合を置く。距離は10歩ほどだ。銃を使えなくしたところで、あいつはまだもう一つ持っている。安心はできない。汗が頬から流れ落ちた。

「お前ら、大丈夫か？」

作者連中を見遣ると、あいつらはゾンビの群れに囲まれていた。背

中合わせに何か言つてゐる。Xナンバーが口を開いた。

「やれるか？ この数」

「あと1体増えたらヤバいかもな」

「そうか」

そして2人はトリガーパルを引く。その弾丸は、敵の活動を確実に止めていた。そして逆逆は「ヤツ」と笑つ。

「なんだ、お前も戦うのか」

「お前らなあ！ カツコつけてる場合じやないつての！」

すると2人は、こっちを振り返つて文句を垂れた。

「なんだよ、良いとこだつたのにい～」

「そうだそうだ。君は主人公だから、いいかもしないけどさ。我々はあくまでモブキャラだからね？ ここで目立つておかないとさモブだつたら目立つなよ！ と内心突つ込みを入れてゐるところだ、恭子の声が入つた。

「よそ見してゐる場合じやないんじやないの？ お前の相手は、俺だろうがあつ！」

奴が握つてゐる左の銃剣を、後ろに仰け反つて紙一重にかわす。

こいつ、速いけどアルバートほど巧くない。どこかで見たことがある軌道だ……

「狂制御インストール」にその格好、お前は何なんだよー！」

銃撃を交えながら斬り付ける。恭子の右腿から血が噴き出た。

「おーおー、ひつでーなこりや。やつてくれるねえ」

「どうせ再生するんだろうが！」

さらに左腕と首筋。だけど、浅いかつ！ 奴を仕留めるまではいかない。

「制服が血塗れだ。こつちは再生できねーんだぜ？」

「知るか！ お前はここで沈める！」

「できたらいいな。あの作者共はしづらへじつに来ねーだろ。ひわけで、『止まつてろ』」

奴の右目が蒼くなつていて、その瞳はまるで、時計の文字盤のよう

に……そこで俺の意識は途絶えた。

恭子が握る両手の銃剣が正確な軌道を描き、恭介の両腕を切断する。血が鮮やかな噴水のように噴き出し、地面に紅い幾何学模様を描く。

「アツー！」

「それは色々と違うよ逆逆つー……でもアレは……」

「『ボールペン』を使つたつ！」

恭介はそのままピッタリと動きを止めている。

「細かい『執筆』は出来ないけど、あの程度なら……第三者にも扱えるのか！？」

「ひはははつ、なかなか使えるじゃねえか。じゃ、いただきます、つと

「うそ……恭君つ！」

「恭介！ 畜生がつ！」

アルバートは崩れ落ちる涼をひつつかみ、停めてある車に急ぐ。

「恭君が、恭君がつ！」

「（スズ！ 今は走つて！）」

アンプが前方の敵を一掃するのを確認して、マーシャが叫ぶ。

「鍵を」

エミリオが錯乱状態に陥っている涼からキーを奪い、トランクを開ける。

ケースの中にはナチスドイツのカンピピストル（擲弾発射拳銃）とMP40機関拳銃、旧日本軍の九九式狙撃銃、そしてM1カービン（騎兵銃）が換えの弾薬と共に押し込まれていた。どれも第二次世界大戦で使われた骨董品だ。

「装備を」

マーシャがカンピピストルを腰に提げ、ショマイザーMP40を手にする。エミリオは九九式のボルトを引いて初弾を装填し、俺はM

1カービンにM4銃剣を装着した。使い方は昔習つた。大ざつぱだが分かる。

「これで、戦えるっ！」

小さな・30カービン弾を薬室に装填し、へたり込んだ涼を起こす。涼、カレシを助けにいくぞ」

「まずい、高山君がっ！ Xナンバー、他に筆記用具は？」

Xナンバーはポケットに手を突っ込む。

「鉛筆ならあるよっ！」

「十分だあ！」『執筆開始』

「その時、彼、高山恭介の腕跡の周りに無数の蝙蝠ハクモクが姿を現した。傷口の周りに群れる黒い影達。彼らが霧のように去ったあと、恭介の腕は再び拳銃を手にしてあるべき場所に戻った」

「これでっ！」

逆逆が宙に書いた文字を地面に叩きつけるようなモーションを取ると、恭介の腕の周りに蝙蝠が現れ、腕が再生した。

拳銃を手にしていなかつたが、全てシナリオ通りだ。逆逆が手を開くと、そこには灰になつた鉛筆があつた。

「アチャヤー、やつぱ平行世界で鉛筆を使うのは難しいなあ。拳銃も『創造』できなかつたや」

「涼ちゃんの傷を治した時は、ボールペンだつたからねえ。ボール

ペンのほうが消えない分、強く刻めるんだろうね」

「うーん。じゃ、サインペンだつたら、もっと効果が期待できるんだろうか」

「……えあ

俺が意識を戻すと、ニヤッと笑つた恭子が佇んでいた。俺の腕を興味深そうに眺めている。と、今気づいたけど、銃が無い！

「おい逆逆！ 武器は！？」

「腕が精一杯）。『メーン』

「は？ 腕？」

俺が首をかしげていると、恭子が呟いた。

「ふん、『作者』のレベルまで行くと、鉛筆でも『創造』は出来るか……なるほどな、おもしれえ。もつひとつ見てみたいんだが、どうしたもんか。もう目的は果たしたしな」

そう言つてポケットから小瓶を取り出す。そこには赤い液体が波打つっていた。

（俺の……血？ それに、やつきのは穂波の タイムキーパー……
…なのか？）

「目的は、何だ？」

「あ？ 目的？ そうだなあ、俺の場合は 解放 とでも言つてお

こうか。ひははっ」

「解放？」

喋り過ぎた、と恭子が顔をしかめたその時

「FIRE！」

擲弾が穴から飛び込み、爆風と火炎、そして無数の破片が部屋の奥で爆ぜる。直後にバラバラと9mm弾が水撒きのようになびきせられる。

「Move, Move, Move！」

マーシャのGOサインと同時にエミリオがゾンビの頭に7・7mmをぶち込むと、独特的のアリサカ・アクションで次弾を薬室に入れる。独特的のスコープレティクルに苦戦するが、距離によるセンターを掴んでからは正確な狙撃を披露している。

アルバートはセミオート・カービンの軽快な速射で、敵に銃を構える暇をとえずに対応していた。

「恭君！ 無事なの！？」

涼が突破口を開く為、両手のグルカナイフを振るい化け物の四肢を切断する。ただ数が多く、こちらまで到達できない。

「どうしたあ？ 頼みの援軍はこっちまで来ないぜえ！ 『止まつ』

「武器をよこせつ！」

逆逆が右腰からグローツク1-9を、Xナンバーが皮製ホルスターからワルサーP38を取り出し、それを俺に思い切り投げる。

「つ！」

両手でキヤッチした銃の情報が頭になだれ込む。まずは装弾数の多いグローツクで猛攻。相手が回避体勢に移つた所でワルサーを撃ち込む。

「畜生、なかなかやるじゃねえか！」

切札を封じられた恭子は舌打ちをすると、応戦しながらじりじり後退し始めた。残る下僕も残り十数体を数えるのみ。しかも数は減つていく。

「ヤツを逃がすな、お前等つ！」

銃剣を近場の敵に突き立て、止めをさしたアルバートが命令する。同時に火器という火器から銃弾が放たれ、アンデットを一掃して恭子の姿を射線上に露わにする。

「あんなことして、許さないんだから！」

涼がツーハンド・ホールドでナイフを握り、退却しようとする恭子に切りつける。

「お前も、千切れろつ！」

斬撃で腕が飛び、足がもげて血の海が出来上がる。

「チッ……クソがつ！ 邪魔ばかりしやがつて……貴様等！ 次は地獄だぞ！ ひははははははッ！」

縦に振られた刃が頭を真つ二つにするが、頭蓋骨の中身をぶちまくる前に恭子の姿は霧となつて消えた。

「消えた……逃げたか」

恭介が咳いて崩れ落ちた。涼が駆け寄つてその体を支える。

「大丈夫？」 狂制御インストールの使いすぎだよ」

「……みたいだな。おい逆逆、さつき、俺の腕がどうとか言ってなかつたか？」

そういうば、恭介の両腕は切り落とされたはずだ。それが、今はぴつたりくつ付いて、正常に動いている。如何にこの世界が異常だとはいえ、これはどういう事なんだ？

「ああ、それね。作者としての システム権限と言えばいいかな。説明するのが大変なんだけど……」

逆逆が、考え込むように腕を組んで目を閉じる。そして、

「Z Z Z Z . . .」

「死ね」

「ぎやあ痛い！ 私の肘関節はそつちに曲がらないぞ！」

みし、みし、みし、ぽきつ。

「普通の湿布を貼ろうとしたら、かえつて腰が痛くなつた。アツ！」

Xナンバーがそんな事をほざいた。

「分かつた、分かつた！ ちゃんと説明するから！ お願ひだから、私が縄抜けに困らない体に改造するのは止めてくれ！ 全く、右肘が逆に曲がつてるじゃないか。どうすればいいんだよ、これ」

「スタートボタンでサバイバルビュアを開いて、メニューからキューを選択して……」

Xナンバーが説明するのを聞かず、逆逆は空のマガジンを口に咥えて、左手で右の手首を掴むと、強引に元に戻した。え？ 今度は歯が痛い？ 知るか。

「さて、話を戻すけど。さつき、恭子が高山君の両腕を斬り飛ばした。こう、スッパーンってね」

そう言いながら、腕を手刀で斬るモーションを取る。恭介が顔をしかめた。

「さつき、俺が止まってたときか……」

「我々作者が、君たちが元いた世界を創り出しているのは知ってるよね。その創造と言つ概念を形にしたのが、この世界で我々が使う、筆記用具なんだ。それを使うことで、さつきみたいに高山君の腕を復活させたり、桐臣君の傷を塞いだりしたわけよ。えへへ、偉い？」

「ちょっと待て。だつたら、この世界 자체を消すように書けば、消えるんじゃないのか？」

俺がそう尋ねると、逆逆とXナンバーは分かつてない、と言つよう

に首を横に振つた。

「あのねえアルバート君。君は消しゴムで字を消せるからって、それによつて生じた消しカスを無かつたことに出来るのかい？ そういうことなんだ。出来たらやつてるつちゅうねん」

それもそうか。にしても、ムカつくなこいつら。死ねばいいのこ。

「（それでも不可解なのは、アイツ等、血液を取つてたわよね？）」

「（ああ。オレもきつちり搾り取られたぜ）」

エミリオが腕に残るナイフ痕を見せる。

「けつえきで、なにができるの？」

Xナンバーはアンプの質問に腕を組む。

「そうだね……平清盛は墨に自分の血を混ぜてお経を書いたつてい

うからね。『写経でもするんじゃない？』

「宗教的な倫理観はこれっぽっちも持つてなさそつたじやない

か……」

「……あ」

逆逆がポン、と手を打つ。

「成分検索だ」

「成分検索？」

周りの目が逆逆に集中する。

「人間の血つてのは、海に近いって言われてるだろ？」

確かに、そんな話を聞いた事がある。生命が海から誕生した証拠だ。後ろでナチ野郎が「この海何？ なんて海？」とか抜かしてやがるが誰も聞いちゃいない。あとで銃床撲殺するか。弾も剣も勿体ないし。

「海つてのは世界の根元。だからその海の成分を調べれば、世界の構成成分が分かる」

「ほしいのらう！ ……え？ おいらの番？ あつ、みんな止めてつ、ストック真下にして銃を振り上げないでっ！ ええと、ケホン。作者によつて作る世界つてのはビミョーに異なる訳。ファンタジーやSFを書く人なんか見てもらえば分かるけど。だから海水や血液を判定して、世界の違いを数値化する。ただ、それをやる為にわざわざ武装した人間を襲う必要なんて無いと思つんだけどな」「特別に俺達が必要だつた、つて事か？」

「やう考えるのが妥当だね。それじゃ、ぼくらはそりそろおいつますよつ」

Xナンバーは拳銃の換え弾倉を3つ恭介に押しつけると、傍らに停めてある『デオボーリに跨る。ロデオ』にはMG用の銃座が追加されていた……

「金曜ロードショーで『ダイ・ハード』をやるんだ。録画機器が家に無いから、リアルタイムで見なきやいけないんでね。それじゃ、Auf wiedersehen！」

Xナンバーはアクセルとエロゲの主題歌が入ったカセットのスイッチを入れると、ビルの三階から窓を突き破つて

ガツシャーン！

バーン！ グシャグシャツ！ バーン！

口元オーライ大爆発！
奴は真っ黒になつて徒步で帰つて行つた。

「悪いな高山君。アイツをストライカーで拾つていかんきや。移動手段は確保してるよね？ んじゃ、バイナラー！」

逆逆もグロックのマガジンを3つ恭介に押しつけ、さつきXナンバーが突っ切つた窓から飛び降りた。

スタッフ

わーお、華麗なる着地

(炎の真上)

ପାତା ୧୦୨

もう一人の作者は明るく道を照らしながら、奇妙なステップを踏んで車庫の方まで消えていった。

「（……とにかく、今オレ達が持っている装備品をカウントしてみようぜ。オレはアリサカ・ライフルが一丁だけだ。弾は銃に残つてる分を合わせて12発つてとこだ）」

ヨミリオがテイコルを突き出す。全員の火力は不足している。ついでに把握した方が良い。

（MP40サブマシンガンとカンフピストル用の榴弾が2つ。短機関銃の方はまだ余裕があるわ）

「（M1カービンだ。弾は撃ちまくれるほど無い）」
俺は、最後の手段だがな、と銃剣を指で弾く。

「アルバートからもらつたけんじゅうだけ。のこり5発。だけど、

增幅 が使えるのは2発がげんかい」

「わたしは刃物だから弾切れは無いけど…… グルカナイフが2本だよ」

「俺の装備はP38とグロック19だ。弾はさつき補給を受けた」

「恭君、敵の銃は使えない?」

「そうだな。まだ使える奴があるかもしない!」

恭介はゾンビの残骸に向かうと、しゃがみ込んで銃を探し始めた。しばらくして戻つてくる。

「ダットサイトが付いたMP7が1丁。マガジンは今付いてる奴しかないな。これだけか…… 他のはしつかり破壊されてやがる」
おそらく、俺たちが使うのを恐れた恭子が予め、そういう指示を出していたんだろう。抜かりの無いことだ。にしても、恭介の使う銃は何で毎回H&Kばかりなんだ? 作者の趣味か?

「(参つたな、ここから武器庫まで帰れるか?)」

「(戻つたところで、天井に大穴が開いてるわよ。他の場所を探しましょう)」

マーシャの言つとおり、俺たちの本拠地は敵に知られている。このまま戻つても「襲つてください」と言つているようなものだ。

「(つても、どこか休めるところは必要だぜ? 特にオレみたいな狙撃手は翌日コンディションに大きな差が出る)」

エミリオの言つことも一理ある。確かに 狂制御 (インストール) とやらを使う恭介や、先ほどまで負傷していた涼、增幅 を扱うアンプにとつて、これは死活問題だろう。それに、彼らは戦えると言つてもまだ子供だ。俺が腕を組んだところで、アンプが口を開く。

「もしかして、マーシャの武器庫がさくしゃによつて作られたとしたら、きょうすけの家もあるかもしれない。ここからも近いし、もうすぐ夜明けだから」

「俺の家じゃなくて俺たちの家だろ。 まあ、その可能性はあるな。だけど、人様を呼べるほど片付いてるかどうか……」

「大丈夫だ。俺だつて一人暮らしだからな、散らかってるのは慣れてるさ」

しかし、恭介は首を振る。どういふことだ？

「いやね、リビングはいいんだけどさ……涼の部屋が酷いんだよなあ」

その言葉に涼が抗議した。

「失礼な！ ちゃんと片付けてるよー。」

「そりなのか？ アンプ」

その横にいるアンプが、恭介の問いかに首を横に振る。

「ううん。ひとことで言つなら、混沌カオス」

「そこまでじやないよ！ セイゼイ ハリケーン通過あと つてレベルだよ！」

それも酷いんじやないか？

「（つて）いうか、部屋は足りるのかよ。二ホンの家は狭いって有名だからな」

「うーん、エミリオの言つとおりだな。男女で分けなきやいけないし……」

恭介が考え込む。しばらくして部屋割りを決めたらしい。

「親父の部屋と俺の部屋にアルバートとエミリオ。涼の部屋に、女性陣。狭いかもしれないけど、我慢してくれ。俺はリビングのソファで寝るから」

そんなわけで、俺たちは高山家に移動することになった。

力チャツ。

玄関ドアをゆっくり開け、各員と共に部屋をクリアリングしていく。足音も立てずにスルスルと暗闇を移動。一切ムダな動きが無い。

「OK . A 11 C l e a r e d .」

「R o gger that .」

「（もう少しがかると思つたんだがな。やつぱり小さいんだな、日本のおつてのは）」

照明のスイッチを探り当て、Hミリオが漏らす。

「（こつちは邪魔する立場よ。Hミリオ、文句言わないで。アルバートのアパートより広いじゃない。密として紳士になりなさいよね）

「（悪かつたな、そちらの英國紳士とは似ても似つかない粗野な男で）」

「（なにもそこまでは言つてないわよ。只、ホストの環境に贅沢を言つのはマナーとしては……）」

「（ほ～ら。長年の伝統^{マナ}に沿わない人間は野蛮人つてんだろ、ブリテン。どうせ俺はライフルを肩に、山奥で狩猟やつてる方がマシだつてんだろ？）」

「（ちよつと、何よその言い方！　私は貴方の^{あなた}人間性や性格を否定した訳じゃなくつて……）」

「（一人とも、黙つてろ（Shut up）。そんな言い争いをする前に、恭介達に謝罪だ）」

俺はヒートアップする一人を引き離す。

「（謝罪？　……まあ、すまないとは思つてるが……）」

「（ちがう、そうじゃない。その……ローマに入つたらローマ人のように振る舞え、という諺^{いんわざ}はどこにでもあつてだな。その……、俺もひじでの暮らし^{くらし}が長くて忘れてたつてのもあるんだが……）」

照明を付ける。

「（……日本じゃ、大抵玄関で靴を脱ぐんだ）」

「（…………あ～）」

泥のついた廊下と、玄関で苦笑いを浮かべる家の主達が、俺達の明るくなつた視界に映つた。

「悪いな、客人に掃除させるなんて」

「泥を拭くついでみたいな物だ。気にするな」

現在、俺達は大掃除を敢行していた。各小部屋は元の世界そのままだつたが、リビングや廊下は埃だらけで、蜘蛛の巣まで張つていた。

「（「メンネ これが精一杯なのつ ）」と空薬莢か何かで刻まれていた。ストライカーズつて何だよ……

「（キツチンと風呂は掃除したぜ。冷蔵庫の中身は新品だ。飢え死にはしねえだろ）」

雑巾を片手にしたエミリオは冷蔵庫のドアを開けて中身を確認する。マーシャにマナー云々を説教されていたのは効いていないみたいだ。アンプは両手に持つた殺虫スプレーでゴキブリを追い回している。ちょこまかとお互忙しそうだ。

「そういえば、マーシャと涼はどこだ？」

「ああ。まだ涼の部屋で掃除してるはずだ」

作者陣はあくまで『忠実に』部屋を再現しておいたらしい。ドアを開ける音と共にモノが崩れ、二人の悲鳴が聞こえたのはついつきの事だ。

「……ちょっと、一人の様子を見てくるよ」

「（あ、ちょっと待つてくれ恭介。気になる事がある）」

エミリオが俺を呼び止める。

「（お前、アンプとスズと、3人でここに生活してるんだよな？）

「？ それがどうかしたか？」

通訳を待つ間、エミリオの顔がニヤリと崩れた。

「（他には、誰も、ここにいないんだよな？）」

「ああ。色々事情があつてな。親とは同居してないんだ」

エミリオの表情が面白くて堪らないと言わんばかりの笑顔に変わる。俺の肩を抱き、十数年ぶりに再会した友人に語りかけるよつな高いテンションで会話を続ける。

「（スズちゃん、いい女だよな、ハハツ！ そつは思わないか？）

「何が言いたいんだ？」

「（そりゃあ、ねえ。一つ屋根の下、年頃の男女がする事といやあ、

「つか」

そこから先は聞けなかつた。いや、そう言ひと語弊があるか？　通訳がゆつくりと立ち上がり俺の脇からいなくなつたお陰で、内容が理解できなかつたつてのが正しい。アルバートはエミリオの頭をスリッパでぶつ叩いたが、スリッパとは思えない轟音を立て、エミリオの意識はどこかに吹き飛んだ。

「（アイツは本当にそういう事しか考えられないのか……？　これつて人選ミスなのか？　ミスだつたのか？）」

アルバートは頭を抱えてブツブツと英語で独り言を呟いている。エミリオは一体何を話してたんだろう？　気になるけど、聞いたら負けなんだろうな、きっと。

「へ」

スズの部屋はヒドい散らかりよつた。実家の使用人が見たら目を回すところだろう。

「（マー・シャさん、それは左奥の棚に運んでおいて下さい）」

日本語は今一つ理解出来ないが、ボディーランゲージと抑揚で意味はなんとなく掴める。英語と日本語で会話を交わすこともあるぐらいだ。意思疎通は言語が関わらずとも、それなりに取れる事を初めて実感した。

（ん？　何かしら、この箱）

私は正方形の目立たない、小さな紙箱を見つける。箱の上には黒字で何か書いてある。

（レイが使つていたPCに、確かに似た漢字があつたかしら…：確か、「？」でOpen？　だから、「開」も同じ意味かしら？…）

私は指示に従つて、箱のフタを持ち上げる。

作者からの情報が何かかと思つたけれど、それは全く違つた。

「キョウスケの写真？」

「（うああああああ、何見てるんですかマー・シャさんっ…）」

これはいけない。どうやら「Do Not Open」の意味だつ

たようだ。周りの文字が否定語だったのだろう。

「まあ、女の子には誰でもハーフはあるし……」

「…………」ハハハ。みんなには秘密にしてくださいね？」

真っ赤な顔でスズが俯く。こんなに分かり易い性格してるので、当の思ひが一瞬で氣付かなくて、言つたは間違がちうほんやないか

しら。もはや犯罪レベルの鈍さね。ヒ、溜息を吐いて掃除に戻る。
(つて、今度の箱は何かしら)

「（ひやわわわわわわっ！）」返してくだれーっ！

おそれらくスズの年齢では買つこと出来ないはずの。それは、ゲームの箱だった。が出来ないはずの。

うーん、なんて言えばいいのかしら？ やたらと露出の多い女の子が笑顔でポーズをとっているイラストが描かれていて、その隅にはピンクの背景に両手をクロスさせたシルエットとR-18の文字が踊っていた。キョウスケじゃないけれど、いいのかしら？ これで、「いつも、」というのをやつていいの？

「（誰にも知られてなかつたのに……。）え、えと……どんと、

すひーへ、えこしんぐ、あがめうひやうひー。

どうやら、「それについては何も詰つた」と詰つけるらしい。私は苦笑いで頷いた。

「さてと、一応は俺の部屋も見ておくか。涼と違つて掃除はしてるんだけどな」

一人呟いて部屋に向かう。その途中で涼の悲鳴が2回聞こえたんだ
けど……大丈夫なのか？

（俺のラノベ「レクショ」は無事なんだろつか。もし、あれに万が一のことがあれば……）

俺の部屋の本棚には、無数のライトノベルが収まっている。可能な限り初版をそろえ、巻数も完璧。毎週毎週きちんと埃を払い、痛まないよう、乾燥しつつも直射日光が当たらない場所に保管してある。

(まあ、何もないとは思つんだけどね)

扉を開ける。暗い部屋の中に居たのは、2体のゾンビ。そして、その手には

「魔剣シリーズ3巻と12巻！ てめえら！ 汚い手で触れるんじやねー！」

床を見れば、お気に入りだつた数々のタイトルが紙屑同然に引き裂かれていた。

「あれの9巻と13巻……その4巻と6巻……てめえが今踏んだ1巻なんかなあ……今じゃ何処の本屋を探しても見つからねえんだぞ……！」

連中の頭を両手で掴むと、そのまま駆け出す。一階の、道路に面したベランダのガラスを突き破り、地面に叩き付けた。しかし、手は離さずに近くにあつたブロック塀に投げ飛ばす。2体が重なつて地面に落ちる前に、俺は右足を振り上げていた。いっぱいに伸ばして、その鳩尾に突き刺す。その衝撃で、ブロック塀にヒビが入つた。それでも俺の気は收まらない。足を引き抜くと、回し蹴りで5メートル程ふつ飛ばし、銃を取り出して銃床を頭に叩きつける。

「おらつ！ おらつ！ よくも！ よくも俺のコレクションを！」なんか、ゾンビの顔面がとんでもない事になつてゐるような気もするけど、止めない。と、音を聞きつけたアルバートたちが玄関から飛び出してきた。

「恭介！ 大丈夫か？」

安心させようと、俺は振り返ると笑顔で手を上げた。

「ああ、安心してくれ。ちょっと“害虫”を“駆除”してただけだから

から

しかし、アルバートはかなり驚いた表情で固まつている。

「ん？ どうしたんだ？」

「（おいおい、これじゃあどつちがバケモノか分からねえよ……）

後ろに居たエミリオが俺を指差して言つた。改めて自分の服をよく見ると、返り血で真つ赤に染まつっていた。

「あはは、やりすぎたみたいだ」

「、怖い……」

幾多の銃火をかいぐぐつてきた特殊部隊員は、目の前の日本人高校生の前に真っ青になつていたとさ。

「で？ 奴らはこのまま奇襲をかけるつもりなんだね？」

「そう。見張りの連中が話してた。言語を操るつて事は、化け物のランクが上がつてるつて事かな？ 格好も顔以外は人間みたいだつたし」

「私、逆逆三里は困惑していた。ついさっきまで、カーナビの方向に従つて家に向かっていた筈だった。ただ、道案内の矢印を見て隣の相棒が、

「そりいえば、塾でベクトルの試験があつて、全然出来なくてさあ」

と言つた所から記憶が完全に無くなつてゐる。Xナンバー曰く、「この世に在る全ての絶望をハンドルにぶつけたような運転」だつたらしい。そして気が付くと、なんと敵アジト車庫の真ん前まで潜入を果たしてしまつたらしいのだ。ベクトル、恐るべし。

で、今はストライカーを路上駐車し、光学迷彩を施してある。Eye have you!…………と言つたところでXナンバーぐら

いしか分からぬよな。
現在は基地内に潜入。手頃な物陰に隠れて敵歩哨から情報を漏れ聞いてゐる所だ。

「逆逆、敵歩哨がどつちやり車庫への道を通つてゐる。武装はMP5機関短銃とMP7機関短銃。時々UMPを持つてゐるのもいる。腰にはグロツクを差してて、グレネードを入れたポーチも見える。装備はウツドランド調のシティカモの戦闘服。チエストリグをボディー

アーマーの上から装着して、ケブラーのヘルメットを被つての
Xナンバーが革製の背嚢から双眼鏡を取り出し、詳細に装備を偵察
する。

「どうする？ 今なら制圧出来ない人数じゃないけど」

MG42のフリーディングカバーをポンと叩くXナンバー。

「こんなメタル アミみたいなシチュエーションで戦闘なんかしたら、
こっちが絶対不利だね。向こうの動向を探つてみるのが一番じゃな
い？」

私はXナンバーの手から双眼鏡をひつたくり「ああっ、これナチの
実物双眼鏡なんだか」 兵士達を観察する。比較的広いスペースに
整列する敵兵。格好だけは人と変わらないが、その顔には猛禽のよ
うな目と鉤のあるクチバシが付いている。人外だ。

「大隊長殿の挨拶である、気をつけ！」

リーダー格と思われるワシ頭が号令を掛けると、ざわついていた化
け物が急に静かになる。そして壇上に上るのは……

「やはり恭子か……」

「よく聞け肩共。前回生み出したクズ共より、マシな働きをしろ。
攻撃目標は、恭介、アルバート達が滞在している家だ。血液を検査
した結果、特定作者が創造する分子の構造原子が割り出せた。セン
サーを使って住宅地をスキャンさせた所、作者が造ったと思われる
家が発見された。アジトになつてている可能性が高いから、そこをブ
ツ潰せ」

「おいおい、アル達、ヤヴァインんじゃないの？ つてかそつちのキ
ヤラが暴走してるんだから、どこにかしてよ逆逆君
Xナンバーが耳打ちで不平を垂れる。

「そんな事言つたつてさあ……私だつて知らないよ、まさか恭子君
が出てくると思わなかつたし」

「そうは言つてもどうにかしないといけないよな、と私は天井を仰
いだ。このままでは彼らの世界は滅茶苦茶になつてしまつ。一発当

てないと……。

「ねえXナンバー。あいつらの持つてる情報、全部違うものに変えてしまうのはどうだらうか。家の住所を変えちやうとか」
「うへん、それがいいかも。てーかそれがベストだね」
「そうと決まれば行動開始。ひとつとコンピューターの数値を改ざんして つて、アレ？ 恭子の演説が止まってる？
「だが、ブツ潰す前に、ここにいる害虫を2匹駆除しなくちゃいけないみてーだなア」

「おいおい。害虫扱いは酷いねえ、どうも」

Xナンバーが銃を構えて立ち上がる。やれやれ、バレちやったかあ……。ゲームだったら赤いビックリマークが頭上に輝くところなんだけどねえ。

「どうやら、やるしかないみたいだ。疲れてるのこ……

濁流のよみに雪崩込む化物。迎え撃つしかなさそりだ。

恭介の豹変からじょらくへ経つて、高山家。俺達はそれぞれ割り振られた部屋で休んでいた。1階から恭介の声が響く。

「おーい、メシできだぞー……つてこらアンプー！ つまみ食いすんなって！ 涼！ じきくさ紛れて俺の肉とるなー！」

「食事時からにぎやかだな」

「あら？ 私達が一緒に食事をする時も、にぎやかじゃない？」

俺後ろで階段を下るマーシャ。確かに賑やかだが……

「何を言つているんですかエミリオ！ これからは人民元の時代だつていつに、報酬をわざわざドルで受け取るなんてー！」

「つたく、やかましいなレイ。この国の自販機が全部、人民元でコーラが買えるようになりや考えてやるよ」

またいつも言い争いが始まった……今日の組み合わせはエミリオとレイか。このペアが夕食時に討論をする確率は……34%って所

か。最近上昇気味だな。

「そういう小金の話をしているんじゃないです！ 資本主義による経済成長の停滞によつて、U.S.ドルとコーコーは下落していますよ。そんな時に預金までドルにすれば、共産主義による人民元換算レートは大幅にドルに不利になります！」

「へえ～、で、それ何処のニュースサイトからの引用だ？」

「しゅ、週間人民通信です！」

いや、それ、思いつきり自国寄り改竄入つてるだろ……

「程々にしどきなさいよ～」

マーシャは意にも介さぬ様子でスープをよそっている。完全に小さな兄弟のケンカを横目に見る育児放棄気味の母親の目をしていた。実際、このメンツ間での言い争いじゃあ、銃を、『撃つ』所までエスカレートする事は無いしな。俺達はプロだ。滅多なことで武力は公使しない。ただ、その直前まであつといつまに行くのが嘆かわしいが……

「俺が給金の全てをU.S.ドルで受け取るのは、俺がアメリカに住んでるからだ。当然、他の国に行く時はその国の金を持って行くさ。で、お前は俺の財布の中身をハゲジジイの紙切れにとつかえさせて、一体何の特があるつていうんだ？」

「言いましたね……毛沢東同志をハゲ呼ばわりですか！！」

「言つたさ。それも何十万の反乱分子の首をすつ飛ばした最上級のクソ垂れ野郎だ！ 俺はナチが嫌いだが、時代錯誤のアカも嫌いでね、コミニスト！」

「へえ～、じゃあそのクソ垂れコミニストのトラップに毎回背中を任せてるエミリオは、クソまみれのワイヤー付き指向性地雷を背中にくつつけた資本主義の犬つて訳ですねつ～」

「ほう……口が立つようになつたじやないかアカのギークーそのお高くとまつた鼻をふきとばしてやらあ～」

「上等だラテン野郎（Greaser）！ 星（red star）が刻まれた5.8mmの味、思い知らさせてやる！」

「丁の拳銃がファストドロウ（早抜き）され、照準線が一本に重なる。今のはエミリオの方が0・05秒ほど速かつたなど頭の隅で考えつつ、二人の間に座っているクロトーにアイコンタクトを送る。彼は素早く両手を突き出し、それぞれのトリガー後部に指を突っ込み、引き金を無力化した。

「……食事の場で……クソだのラテンだの垂れ流すな……自分のブツを……気軽に抜くな……」

「……わあつたよクロトー。……悪いな、レイ。個人思想はこの国じや自由だ」

「……気にしてませんよ。私が自分の意見を押し通したのが元ですし」

二人は互い拳銃の銃把を、シャンパンのグラスのようにならぶつけてホルスターに戻す。これで当分はナカナオリだ。

「さて、メシの前に祈れ。日頃のドンパチに白目むいてる神様じゃなく、自分の命を守る鉛弾にな」

「……どうしたの？ アル？」

「いや、『賑やかな食事風景』を思い出したら涙が出てきた」

「そう……？」

元の世界に戻つたら、何とかしないとな。俺はそつ固く誓うのだった。

テーブルの上に並んだ空の皿を重ねて持つと、俺は流しに向かった。洗い物はさつさと片付けるに限る。

「にしても、これからどうすればいいんだろ」

誰に言うでもなく一人呟く。スーツの男を捜すにしても手掛かりは無いし、恭子を倒すにも火力が足りない。マーシャの武器庫も封じられたしな。八方ふさがりって感じだ。

「何か手伝うことあるか?」

声に振り向くとアルバートだった。客に手伝つてもらうわけにはいかない、そう答えて断る。いや、断ろうとしたというのが正しい。なぜなら、

「おい！ 恭介！ しつかりしろ！」

口を開く前に、俺の体が床に倒れたからだ。

恭君が倒れた。確かに狂制御はかなり使っていたし、戦闘に次ぐ戦闘だつたけど、やっぱり消耗が激しすぎる。いつもそうだ、彼は肝心なことをわたしに教えてくれない。自分の体が限界を超えるときくらい、頼つてほしかった。……たしかに、ちょっと頼りないかもしれないけど。

「すず、大丈夫？」

アンプがわたしを見上げて尋ねた。精一杯の笑顔で答える。

「うん、大丈夫。大丈夫だから……」

わたしが心配したつてどうなることじやない。それは分かつてるけど、そう簡単に自分の感情はコントロールできないのです。ちなみに恭君はリビングのソファに横になっている。そろそろ額のタオルを換えよう、そう思つてわたしは立ち上がつた。

「（いつも、こうなるのか？ なんだっけ、あの狂制御って奴だ）」

Hミリオさんの言葉をアルバートさんに通訳してもらつて、わたしは首を振る。

「こつもはいんなふつこはならないんです。せいぜい頭痛が酷ぐるべりこ。でも今日は連續で使つたからかな。こんなことに」そこまで言つて俯く。いつも、この世界に来てからずっと思つていたことを思わず口に出した。

「やつぱり、わたしがいなこまつが恭君ひとつてはこいのかもしれないです。ずっと伸びてもうつてばつかりで、足を引つ張ることしかしてない。うつと、この世界に来てからの話じやない。元の世界にいた時だつて恭君はわたしにつきつきりで、化物と戦つようになつたそもそももの原因だつてわたしがちゃんと事情を説明しなかつたからで……やつぱりわたしがいたり、」

「それは違つ」

アンプが首を振つた。小さい、でも確かな声で続ける。

「このはえ、きょうすけとすずがけんかしたとき。すずが飛び出して、きょうすけはすつと心配してた。わたしが「きょうこが居ない」つて教えたとき、一番動搖したのがきょうすけで、一番早く動いたのもきょうすけ」

（ああ、気がついたらキヨウスケの奴はキニを探しに走つてたぜ。それは、心の底から心配していたからだね）

Hミリオさんが腕を組んで頷く。見れば、マー・シャさんはアルバートさんも頷いていた。

「こつには君が必要だ。居ないほうがいいなんて思つてるのを知つたら、たぶん恭介は本氣で怒るぞ」みんなの言葉が、心にすつと入つてくる。俯いたまま、だけど少し涙目になつて言つた。

「……ありがと、みんな」

その日の夜明け。恭君のそばにいたわたしが少し目を閉じていると、恭君が目を覚ましたのか声を掛けてきた。

「……あれ、涼？」

「起きた？ 大丈夫？」

恭君は少し頭を振つて頷く。

「ああ、大丈夫だよ。ずっと見ててくれたのか？」

「あ、うん」

彼は少し微笑むとわたしの頭に手を置いた。

「ありがとな。もう大丈夫だから、心配すんな
ゆっくりソファから起き上がると、ベランダに向かつて歩いていく。
わたしもそのあとを追つた。

「夜、明けちゃったな」

東の空が白んでいる。太陽が昇り、新しい一日が始まろうとしていた。

「うん、そだね」

しばらくその様を2人で眺めていると、恭君が唐突に口を開く。

「……今度は、護るから」

「ふえ？」

急に言われたから思わず訊きかえす。彼はもう一度言つた。

「今度は絶対に護る。怪我なんかさせない、恭子の奴には指一本触
れさせないから。心配すんな、必ず無事に元の世界に戻してやるよ
わたしは首を横に振つた。

「それは違うよ。……一緒に、が抜けてる。恭君が怪我したってダメなのです」

恭君は一瞬ぽかんとして、少し笑う。

「そつか、そうだよな。うん、お前の言うとおりだ」

恭子さんの名を騙る何か。スーツの人にこの世界のこと。分からな
いことだらけだけど、今はこのときを大事にしたい。心からそう思
つた。

「（それじゃあ、お休みだな）」

「（ああ。一時間したら交代だからな）」

部屋へと消えていくアルの背中。つたぐ、なんでオレが見張り役を

……休息を取りたって言つたのはオレじゃねえかよ。……

薄暗いお陰でこのオンボロスコープのレティクルも見えやしない。それに闇から急襲をかけるなら必然的に今、接近して電撃戦をかけるに決まってる。ボルトアクションじゃ勝ち目なしだ。

「（アレはエミリオが悪い）」

ぼそりと隣にいるチツコいのが呟く。

「（…………ありや事故だ）」

便所に行こうとして、開けたドアが浴室。そしてその中にはハダカの女。つてベタな展開すぎるぜ。ラブコメと違う所といえば、眼球が映像を脳に送る前に、その擲弾手オシナノコが強烈なビジを見舞つて、男の意識と少しばかりの脳細胞を消し去つた事だな。

「（とにかく、1時間の辛抱。そしたら眠れる）」

ふわあ、と欠伸。コイツも疲れてるんだろう。

「（幼少期の夜更かしは体に毒だつてのにな……オレがガキの時は、朝日が上つたら起きて、日が沈んだら眠つてたぜ）」

「（原始的ね）」

「（オヤジとオフクロがくたばつたお陰で、ずっと山でジジイと狩猟生活をしてたんだ。その時の経験が、コイツにファーデバックされてるつて訳さ）」

担いだライフルを指で示す。

「（なんだかんだで楽しかつたぜ？　あの老いぼれも大戦中は狙撃手だったんだ。引退してから山に籠もつちまつてな。二人でライフル担いで山の中かけずり回つてたんだよ。初めてグリズリーを狩つた時は感動したね……あの皮や肉は、命の熱を帯びてた。あの時、オレは自然に『教えられた』気がするね。聖書100冊の価値がある体験だった。学校にも少しだけ行つたが、教師の垂れる講釈よりも、鹿でも狩つてた方がよっぽど有意義だつたと今でも思つてる

お前は、恭介の所に来る前は何をしてたんだ？）」

ふと氣になつたので聞いてみる。どうみても血縁の人間には見えないし、ホームステイをする年齢でもない。チツコいのは少し遠い目

になつて答えた。

「（私は、ロシアにあつたとある研究施設で実験体にされたいた）

「（おいおい、予想以上にヘビイじゃねーかよ……）

「（狭苦しい研究所に詰め込まれて、物心ついた時から外の世界を知らなかつた。あなたとは逆、私は無機質な檻の中で育つてきたの。唯一の自然といえば、高い壙の中で更に高い空と雲だけだつた）」

「（実験つて、何をしたんだ……？）」

「（私の力は知つているでしょ？ アレを使って更に大きな結果を取り出そうというのが目的だつた。来る日も来る日も体力と気力を搾り取られていく中で、私は決心した）」

オレは何も言えなかつた。こんなにチツ「いのがそんな過酷な日々を送つてきたなんて想像つかない。チツ「いのは続ける。

「壙（の外、この隔絶された世界から脱走すること。それが私の目的になつた。今思えば、笑つてしまつほど無計画。外に出た後のことなんて考えちゃいなかつた いいえ、考えられなかつた。そんな事にまで思いを巡らせたら、諦めてしまいそうで、せつかくの決意がほどけてしまいそうで……だから、私は外に出ることだけを考えた）」

そこまで言つて、一旦言葉を切つた。大切な記憶を取り出すように目を閉じる。

「（あの日のことはよく覚えてる。真つ白い雪が空から降つてきて、凍りつきそうなほど寒い夜。この力と運だけで研究所を抜け出した私は警備兵の追跡を振り切ろうと必死に走つた。だけど裸足に、手術のときに着るような服一枚で逃げるには限界があつて、最後には雪の中に体を埋めてしまつた。その時思つたの。「神様、もしこれを見て何もしないのなら、あなたは偽者だ」つて。そうしたら、）

「（そうしたら？ どうなつたんだよ）」

「（一人のお人好しが手を差し伸べてくれた。彼は、私に微笑みかけて、こう言つた。「どうやら、助けが必要みたいだね」つて。警備兵を巧く巻いた彼は振り返つて私に手を伸ばした。見ず知らずの

「こんな子供を匿うなんて、この人は何を考えているのだろう、そう思つて尋ねた。「どうして、私を助けたの?」。そうしたら、彼はこう答えたの、「だって、見捨てる理由が無いじゃないか」。その人が恭介の父親で、彼と恭介の母親が違う国に転勤することになつたから私は日本に来た、そういう事。私はあの2人に引き取られていたから)」

「…………」

「おい、なんだよ、何だよこのおんもい空氣! 会話が続かん、これほど死んだ空氣は生涯で3回あるかないか。エミリオ=プレシアードかなりのピンチ! オレが内心冷や汗だらだらなのを知つてか知らずか、チツ「このはしつかりした口調で言つ。

「(日本に来てからも、きょうすけとすずはとても優しかつた。だから、あの一人を傷つける人は許さない。絶対に守る)」

決意に満ちたその表情にオレは少しだけ見入つて、その頭に手を載せた。

「(そうか。ま、協力くらいはしてやるよ)」

結構良いこと言つたなあ、オレ。そんな感想を心の中で呟いていた

「(そこ)に手を載せていいのは、きょうすけとしょーだけ)」

ぱつ、と払いのけられた。可愛くねえなあ、つたぐ。

「で、僕達は今ここ、恭介&アルバートの潜伏現場行きトラックに乗つてしまーす!」

(わーーーー! ヒコー ヒコーーー!)

「なんとつ! 今回、特別ゲストとして、かの有名な恭子さんに来て頂いちゃつてまーす!」

(おおおおおつ!)

「では、恭子さん、ビービーおつ!」

(パチパチパチパチパチ!)

「テメエ、何だその司会と効果音はつ! いい加減にしろつ!」

そう言つと恭子はおいちやんの大事な大事なラジカセ、ソニーのCD-FD-E500TVを、「宴会盛り上げBGM集 v01.2」共々9mm弾でブチ抜いた。

「あああああ、エカエリーナ2世になんて事をおおつ…」「ソレ名前付いてたの!? しかもロシア皇帝の名前!? 高貴じやん! ラジカセの癖に!」

「確かにね、彼女は、このCDラジカセは、低音をきつちりと再現出来ない、ベースやチョロの音を聞くには使えない娘だつたかもしないよつ。でもね、彼女はきつちりと、クリアーに語学学習用のCDを流してくれたんだ。

そう。僕がエカエリーナ1世を使って中国語のレッスンCDを流していた時の事だ。1世は……彼女は努力したと思つ。だけど、所詮はドキにて900円で買った代物。僕が中国語の4つの発音が聞き取れず、イラッとしてつい手を上げると……彼女は……不燃ゴミ!!

「自分がモノに当たつて壊したつてだけの体験を、こいつまで仰々しく語るヤツは初めてみたぜ……」

「それ以来、僕は彼女を悼む為、中国語から手を引いた」「早い話が諦めたんだな!? 1世関係なく、自分の力量不足だったんだな!?」

「そしてヤダ電氣で出会つた彼女……2世だつた。オーディオコンナーにポツンと置かれていた彼女の銀の、流れるようなボディ。その口から紡ぎ出される、メリハリのついたヴァイオリンの音。僕は一目惚れしてしまつた。僕には……僕には1世を、この世界から失わせてしまつたという過去があつたのに!」

僕は心の底では罪悪感を抱きながらだつたが、彼女を精一杯愛した。彼女もまた、それに応えてくれた。彼女の歌う歌は高音域が強調された弾むようなものだつたし、発音するロシア語は明瞭で、僕の脳をとろけさせた……

「キモつ! ラジカセ買つただけの話なのに、なんかキモつ!」

「だが、キミが現れたつ！ 2世はキミの凶弾に倒れたつ！ 死ぬ間際に、彼女は……彼女は僕にこう呟いたんだ。

『あなたが、何か他のラジカセの事を……ずっと想つていたのは、知つていました。だけど、それでも懸命に私の仕事を評価し、可愛がつてくれた事……すゞく……嬉し……かつた……』

「ショートした電線の音以外、何も聞こえなかつたけどねえ！ つて、お前何ツツコミに紛れてケータイ操作してるんだ？』

「ん？ ああ、これが。アマゾンで新しいラジカセを買おうと「切り替え早えええええええええええ！」

（ドツ！ ワツハツハツハツハツハツ！）

「畜生！ ipdかつ！ お前ipdにさつきのCD取り込んで、外部スピーカーで流したのかつ！」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！ ゲラゲラゲラゲラ！」

「諸悪の根元のお前が笑うなあ～つ！」

「ん？ ああ、これが。アゾンで新しいラジカセを買おうと」Xナンバーと恭子がボケとツツコミの応酬を続けていた間、私は逆三里は腕を後ろに回し、手首についた鉄のいまいましい手錠をピンで開けようとしていた。

（前の金具を引っ張るようにして、奥の金具を回す、と……）

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！ ゲラゲラゲラゲラ！」

カチン！

よし！ 開いたつ！ 幸い開錠音は笑い声にかき消されたようだ、恭子は何も反応を返してこない。

「所でXナンバー」

「なんじやい逆逆や」

「そろそろ違法アップロードの同人誌が、サイトに上がつたぞ」
「これは事前に取り決めておいた暗号。『鍵が開いた』。」

「マジでぇ！？ もうそんな時間！？ いいやつほつ！ ネットダイビング！ ほら、逆逆も一緒にチョックしようよ～、きっと管理人さんが、夏コミコレクションの最後を放出してる所だよお～」すりよつてくるXナンバー。端から見れば変態だが（堂々正面から見ても変態はある）、きつちりと縛られた両手を恭子の死角に。即ち一人の体の後ろにもつてきていた。

「どうする？ DLしちゃう？？」（そのまま脱出行動に入るか？）

「ダウンロードパスワードが無いでしようが。しばらく探してみなよ」（武器が無い。様子を見てからだ）

互いが他愛もない会話を装い、暗号で情報を交換する。

「貴様等あ！ 自分たちの立場分かつてんのかあ！」

恭子の怒鳴り声と同時に、カチン、と錠が外れた。

「これで、二つの世界が解析される……」

血液の入った試験管が、青白い光を受けて遠心分離器にかけられている。

「苦労して狩り場を用意しただけの事はあるな……。逆逆の世界から一つ、取り逃がしているのが惜しいが、二一つ分で十分だろつ」その研究室のような部屋には、あちこちにビーカーやフラスコやピペット等のガラス器具が整然と並んでいる。そこだけを見れば、大学か製薬会社の研究所だが、ある一点だけが異様だった。壁紙が、清潔さを象徴する白ではなく、紺と赤の一色で塗り分けられていた。

「さて、狩りは獵犬に任せるとして、私は二つ三つ、実験をせねば赤いランプの光に照らし出された男は、白衣ではなく、スース姿だった。

「まずは……遺伝情報を取り出して模造^{クローン}でも創つてみるとしようか」

「…………」

俺は恭介の部屋で眠ることなく座っていた。って言つた、なぜか眠れない。まあ、なぜかって聞かれると理由は大体分かるんだが。

「落ち着かない……何なんだこの本たちは！」

横を見遣れば本人曰く“コレクション”の表紙たちがこちらを向いている。それはどれもこれも登場人物たちがこちらを見ているように見えた。たしか……ライトノベルとか言うジャンルだつたはずだ。レイが見ていたアニメの原作が日本語版しかないと愚痴つていたつけな。そんなことを考えていると、ドアノブが捻られてゆっくりと扉が開いた。その持ち主である恭介が顔を出す。俺と目が合つと、意外そうに言つた。

「あれ、アルバートまだ寝てなかつたのか」

「ああ、寝たかつたんだが横から見られているような気配がしてな。

アレのせいだ」

そう言つて本の群れを指差すと彼は苦笑しながら、そこから大量に抜き出していく。今から読むのだろうか？

「おいおい、早く寝ろよ。明日に支障が出るだろ」

しかし彼は大丈夫、と更に抜き出していく。すでに彼の手には本が塔のように積み上がつていた。何が大丈夫なんだ？ どう考えても1ヶ月は楽しめそうな量だぞ？

「ここの分量なら1時間くらいで読み終わるから、そんなに遅くはならないよ」

「1時間？ だつてそれ、何冊あると思つてる？」

「え？ そんなに大した量じゃないと思うんだけど……まあいいや。それに、今、ソファには涼が寝てるし。寝るに寝れないんだ」

そう言つて苦笑。やつぱり、こいつ……

「お前……涼のことが好きなんだな？」

そう言つと、彼はあれほど大切にしていた本たちをドサドサ床に落とした。けたたましい音と共にギギーっときこちない動きで首を捻

る。

「なつななななななな何を……」

涼程ではないが、こいつも相当分かりやすい。真っ赤な顔で否定する。

「そんなんじやつ！ そんなんじやないんだって！ 別に俺はいつのことが好きってんじやなくて！ ただの幼馴染！ そう、幼馴染なだけなんだって！」

そこで一呼吸置くと、わざわざ分かりやすいように1語1語切つて言った。

「俺は！ 涼の事なんか！ なんとも… 思つて！ 無いから！」

「あ～そうか、よく分かったよ。じゃ、後ろの彼女にも言つてやれ俺がニヤニヤしながら指した先。かなーりのショックを受けた顔の涼を、本日2度目のギギーで恭介が振り返る。

「え……す、す……」

「…………（グスツ）」

「うわあ！ バカ！ 泣くなつて！ 俺が泣かしたみたいじゃんか！」

おそらく、本の落丁音で田が覚めたんだろう。姿が見えないカレシを探しに部屋に来たらこの有様か。笑えるな。

「だつて……だつてだつて……うわあ……」

「泣くな！ ああもう！ アンプもマー・シャもみんな来ちゃつただろ！ どうじろつて言つんだよ！」

騒ぎが聞こえたのか、みんなが集まつてくる。しかし、誰も彼も恭介の言葉を聞いていたのか、若干苦笑いだった。

「（いやあ、キヨウスケよ。オンナノ口を泣かしちまつたとき、どうすればいいのか教えてやろううか？）

Hミリオの言葉に、彼は縋るよう口を「ク」と頷いた。しうがねーな、とHミリオが隣にいたアンプにスペイン語でそれを伝え、恭介に耳打ちさせる。つてずいぶん長い内容だな。

「…………（「にょいじょ）だつて」

「 なあアンプ。Hミリオ、本当にやつしたのか?」

「うん、スペイン」から日本に訳すと、そのことばになるね?」

彼が溜息を吐いて額を押さえていた間に、涼を慰めていたマーシャがエミリオに尋ねる。

「 (なんて言つたのよ。まさか、変なこと吹き込んでないでしょ) 」

「 (おじおじ、オレがそんな男に見えるか? 曲がりにも恋愛経験は豊富なんだぜ?) 」

「 (見えるから言つてるんでしょうが。大体貴方が慣れてるのは、いつこいつ“一途な恋愛”じゃなくて“ナンパな恋愛”でしょ) 」

「 (いやいや、まさか。オレだってそこら辺はちやんと心得ているわ。あいつがちやんと言えれば万事解決なはずだぜ。そしてオレにこの言つはずだ。「ありがとう」やこます。師匠と呼ばせてください) 」

「 (いや、それはない) 」

マーシャとエミリオが英語で会話を交わしているのを下から涼が「…………う? う?」と涙目で見上げていた。と、恭介が意を決した様子で彼女に向き直る。

「すつ! すすす涼つ!」

「グスつ……な、な……」

「いいいいいつ今からつー わせわせわせつ、キスするだつ!」

はあ?

周囲の空気が固まる。見れば恭介の目が緊張のあまり渦巻き模様になっていた。マーシャが無言でエミリオの首を締め上げていった。

「 (やつぱりアンタはひくな事言わないのね。もうこいわ、こいで一思ひこい) 」

「 (ま、待てマーシャ! オレはあれをやれとは言つてない! あれに至るまでの過程を伝えただけでっ! 確かに行けるまで行けど

は言つたけどもー。」

「（より性質たちが悪いわ！　問答無用つー。）」

「（止めないかマーシャー！　なあエミリオ）」

窮地に陥り、目が潤んでいるエミリオに助け船を出す。

「（おお、流石は隊長！　やつぱリアルはオレの味方。）（退職金はこんなもんでいいか？）」

電卓を差し出す。まあ、これだけあれば後々の生活に困る事は無いだろう。足りないならどうかのPMCにでも拾つてもらえばいいが。

「（そんなにいらない子なの？　ボクそんなにいらない子なの？。）

しばりく地面に。『こんな感じで打ちひしがれてたエミリオだが、頭をブンブンと振ると、正氣に戻つたように恭介に食つてかかる。

「（恭介。そいつあヒドいぜ。どれぐらヒドいかってぇと、油でギトギトになつてるフィッシュ・アンド・チップスと回じぐらー。）（何か言つた？）「ヒドいぜ」

「へ……？」そ、そつか？

「（『今からキスするわ』とこきなり言われて、『まあ嬉しい、じやあ遠慮なくどうぞ』なんて言つてくる女はまずいないぞ。こういつのか、いつ、せつげなく、唐突かつ雰囲気を持つてだな）

クイツ（エミリオがマーシャの顎を引き寄せる音）

ガブツ（マーシャがエミリオの土手つ腹に噛みつく音）

ドスツー！（俺がエミリオの土手つ腹に蹴りを入れる音）

ガシャーンー！（吹き飛ばされたエミリオがガラスをぶち破つて外に放り出される音）

「（うう、オレはただ、悩める少年のために手本を見せてやりますと
しただけなのにこぎやあああー、落ちる落ちるー。）」

しただけなのに、ぎゃあああーー!! 落ちる落ちるーー!!

窓枠は片手でぶら下かっているヒミツオ。そしてその手を容赦なく踏みつけるマーサ。おお、怖い怖い。

「（どうせ一階だから死にはしないわよ。残念だけど。ほ
う、遠慮なく落ちなこの好色男っ！）」

れんあいつて
むずかしい

ギヤー・ギヤー・と外で喚く攻防戦と、真っ赤になつて俯く発端の一人。こういふのは苦手だ。さつさと寝よう。

「（おい、アル。戦闘準備だ）」

エミリオが（宙づりの状態で）スコープを覗いていた。

俺は阿修羅忍でござる。マニシヤリ亞斯ガルの魔界に附り魔界。

ちに向かってゐる

「ボケつとするな恭介！涼！朝のエクササイズの時間だぞ！」

「ふあ、はーつ！」

米兵が60年前に命を預けたM1カービン。30口径のFMJ弾を20発納めたマガジンを装着し、鞘から抜いたM1905銃剣を着剣装置に装着する。

「（籠城戦の後、状況に応じて屋外戦闘に入る。弾丸は節約して、常に味方の火線を避けつつ密集しろ）」

つたが、それもかなわないか
……

「（弾倉を叩き込め！　遊底を引いて撃針を起し、閉鎖させて弾薬を薬室に送り込め！　照門と照星を奴らのど真ん中に合わせて、

指紋の中心を引金にあてがい、そのまま引き絞れ！
思い切り遊んでやる（ぱぱー）」

さあ、戦闘開始だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8971h/>

Parallel another...-the encounter of TWO WORLD

2010年10月12日04時12分発行